を

喉音の一つにして元はうおの二音合して成りたるもの。故に之を複母音と稱す。始はうおの如き發音なりしかど今はおと異なる處なし。いろは」の順にておの字よりは前にある故。「口のお」とも。字形によりて襷(たすき)を」とも。又五十圖音によりてわ行のをとも稱へらる。

喉音の一つにしてこそとのほもろの子音を助けて發音せしむるもの。之を單母音と稱し。此單母音を含み持つ子音をお列音と稱ふ。「いろは」の順にてをの字よりは後にある故「奥のお」とも呼ばれ。又五十音圖によりて「あ行のお」とも呼ばる。

〔一〕草の名。あさ。〔二〕あさからむしなどにて造りたる絲。

〔一〕絲、紐、綱などの類。〔二〕樂器の糸。〔三〕すべて長く續きたるもの。

〔一〕動物の體の後ろに長く延びたる部分。●尻尾(しりを)。●しっぽ。〔二〕尾に似たる形のもの。

〔一〕山の峯。●嶺。○萬葉「向つを」〔二〕山の裾の長く引きたる所。○古今「峯にもをにも」

〔一〕動植物の性の一つ。をとこ。……人にては男の字。獸にては牡の字。鳥にては雄の字を書く。〔二〕賤の男などの意。●をとこ。●人。○夫木「宮木ひく男」「山田守る男」風雅「妻木こる男」〔三〕夫(おつと)。

をさの略。○祝詞式「伴のをの八十伴のを」もとはこと同じ詞にて小さき意なれど使びたる上には美しく愛すべき意とも爲り。又ただ輕く添へたるもあり。○「小川」「小車」

〔一〕敬語形容詞の一つ。おんの略にして談話の詞に冠らするもの。多くは固有國語の時に用ふるを常とす。……但し文章の詞にても「お前」「お僧」などの如く稀には用ひらる。○「おふみ」「おぐし」「お月さま」「お早う」〔二〕女の名に冠らせて親しみ呼ぶ詞。○「お松さん」「お竹ごの」(俗)

〔一〕他動詞の前に置くもの。……をと他動

詞の間には他の詞を挾みて言ふ事もあれど意味は直接の關係を示す。○「花を折る」「人を助く」「書を友人に贈る」〔二〕上を上にの意。「海を渡る」「岡を越ゆ」〔三〕方にの意。○「川あり東を流る」〔四〕よりからの意。○「門を出つ」「車を下る」〔五〕にに似たるもの。○古今「逢坂にて人を別れける時」……「人に別るゝと「人を別る」との別は。我行きて人留まる時は「人に」なり。人行きて我留まる時は「人を」なりと知るべし。〔六〕に關して。に就きての意。○後撰「人をいひわづらひてつかはしける」

を（感）〔一〕呼出し又は嘆の意を添ふる詞。よの意。○記「一つ松吾兄を。一つ松。人にありせば衣きせましを」同「八重垣つくる其八重垣を」〔二〕反語の意を持ちて嘆をあらはす詞。○古今「つひにゆく道とはかねて聞きしかど昨日今日とは思はざりしを」

を　唯（感）呼ばれて答ふる聲。はい。○落窪「云々との給へばをとて立ちぬ」

をひィ　甥（名）我兄弟姉妹の男の子。

おい　老（名）〔一〕老ゆる事。〔二〕老人。●年寄。

おひィ　笈（名）〔一〕僧、山伏また六部など旅行する時背負ふもの。四角にて脚ある葛籠の類。〔二〕書生の遊學する時携ふる行李。○「笈を負うて鄉を出づ」

おい（感）〔一〕呼ばれて答ふる詞。同等又は目下の人に對して言ふ。〔二〕人を呼び掛くる詞。これも同等又は目下に對して言ふ。（俗）呼ばれて答ふる聲。○源氏「おいさり〳〵とうなづきて」

おいろ　御色（名）紅の事を云ふ。婦人の詞。

おひィば　追羽（名）鷹に言ふ詞。鳥を捕らんとて追ひゆく翼。●鷹の翼。○定家卿三百首「落草をぬすびつ鳥ものびやらじおしつけてゆく鷹のおひばに」

おいはつ　老果（自動下二段）充分老ゆる。●老い朽つ。

おひィばね　追羽子（名）年の始に數人集りて羽子を順番に廻し突く遊び。

おひィばら　追腹（名）武家の時代に我寵を得たる主君の死したる時切腹して殉死する事。●死人の跡を追ひ行くための切腹。

おひィはらひィ
おひィはらふ

追拂(名)　追拂ふ事。●放逐。●追放。

追拂(他動四段)　追ひ立つる。●追ひ出す。●放逐する。●追放する。

おいばむ

(自動四段)　老人らしくなる。●老境に入る。○枕「老いばみうたてあるものこそ火桶のばたに足をさへもたけて」

おひィはぐ

追剝(他動四段)　通行人を脅迫して衣類を奪ふ。●強奪する。●追落す。

おひィばご
おひィばぎ

(名)　追羽子(おひはね)に同じ。

追剝(名)　追ひ剝ぐ事。●追剝ぎをなす人。●追落し。●ひはぎ。

おいぼる

(自動下二段)　年老いて愚になる。●老耄する。●ぼける。○賴政集「いづこぞや妹が玉章かくしおきて覺ねぬほどにおいぼれにけり」

おいぼれ

老耄(名)　(一)老耄。●もうろく。(二)老耄者。●おいぼれおやぢ。

おいぼふし
おいぼく

老法師(名)　老年の坊主。●老僧。

(自動下二段)　おいぼるに同じ。○落窪「老いぼけて物の覺ねぬまゝに」

おねど

(名)　尻。●ねしき。……婦人の詞。

おひィとり
おひィとりがり

追鳥(名)　追鳥狩(おひとりがり)に同じ。

追鳥狩(名)　雪の降る日。餌に飢ゑたる鳥を追ひ廻して捕る鷹狩。

おいり

御入(名)　貴人の入り來る事。○「御上使のお入」

おいおい
おひィおひィ

(副)　人の泣く聲。(又)―おい〳〵と。

追々(副)　漸々。●段々。●逐次。●漸次。

(又)―おひ〳〵に。(又)―おひ〳〵と。

おいおいし

(形ク形狀言シク活)　老人らしい。●年寄くさし。○榮花「御息所も清げにおぼすれど。物おい〳〵しくいかにぞやおぼして」

おひィおどし
おひィおどす
おひィわけ
おいがる

追落(名)　盜の一種。追剝(おひはぎ)に同じ。

追落(他動四段)　追剝する。

追分(名)　道路の左右二分に分るゝ所。

(自動下二段)　年老いて聲の枯るゝ。○源氏「打ち驚きて陀羅尼讀む。おいがれにたれどいとぐうづきたり」

おひィかく
おいかけ

追掛。追駈(他動下二段)　後ろより追うて駈くる。●おっかける。

緌。老懸(名)　古へ武官の冠の緒に着けたる一種の裝飾。左右の耳の處にありて菊の花

おひィかぜ
追風(名)　〔一〕後ろより追ひ掛けて吹く風。○「舟の追風」〔二〕其物の方より吹き來る風。○「梅の追風」

おひィたち
生立(名)　〔一〕そだち。●發育。●生長。〔二〕生ひ立つ間の出來事。●經歷。●履歷。

おひィたつ
追立(他動下二段)　追うて立ち去らする。●追拂ふ。

おひィたつ
生立(自動四段)　そだちゆく。●發育しつゝある。

おひィたて
(名)　農具。犂の後に附きてある柄の如きところ。

おひィだす
追出(他動四段)　放逐する。

おいづと
老土産(名)　老人の持ちゆく土産(みやげ)。○山家集「おいづとに何をかせまし此春の花待ちつけぬ我身なりせば」

おひィつむ
追詰(他動下二段)　追ひ附きて其人の逃られぬ程に迫る。

おいつく
老附(自動四段)　漸々年寄る。●老人じみて來る。●老人然とする。○紫日記「心とおいつきやつて」

おひィつく
追附(自動四段)　追掛けて其所に到着する。●追ひ及ぶ。

おいねずみ
老鼠(名)　〔一〕老いたる鼠。〔二〕催馬樂の曲名。

おひィなほり
生直(名)　幸運に向ふ事。●運の開くる事。

おひィなはワ
追繩(名)　野飼の馬を捕ふるに用ふる繩。●掛繩。●差繩。

おいなみ
老波(名)　老人の顏に生ずる皺を波に喩へて云ふ。

おいなみに
(副)　やうゝ老い行くにつれて。○萬葉「事もなく有り來しものを老なみにかゝる戀にも我はあへるかも」

おいなすび
老茄子(名)　熟して枝に長く殘りたる茄子。(小大君集)

おいら
(代)　己等(おのれら)の轉。●我。●己。(俗)

おいらか
(名)　じんじょう。●おだやか。●おとなしやか。●大やう。●無造作。△(形)—おいらかなる。○源氏「おいらかなる人の御心といへど如何でかはかばかりの隈はなから

ん」〔副〕―おいらかに。○紫日記「すべて人はおいらかに少し心おきてのどやかに落ち居ぬるを本としてこそ」

おいらん　花魁(名)　遊廓にて姉女郎。●遊女。

おいらく　(名)　おゆるを延ぶればおゆらくにて動詞なるを。おいらくと轉じて名詞に用ふ。◎〔一〕老い。●老衰。●高齢。○新續古今「山寺の入相よりも老いらくの寢覺かなしき鐘のおとかな」〔二〕後世老樂の文字を書きて樂隱居などの意に誤用せり。

おいのなみ　老の波(名)　老波に同じ。○新古今「老の波こゆける身こそあはれなれ」

おいや　(感)　おいに同じ。答ふる聲。○源氏「云々と申すに。おいや聞きし人なゝりと覺して」

おひィまはシ　追廻(名)　魚網の一種。持網の類にて水の深みより淺みの處まで追ひ廻し魚を掬ひ上ぐるもの。

おひィまはッす　追廻(他動四段)　四方より手を廻して追ひ立つる。

おいまつ　老松(名)　松の老木。

おひィまさり　生優(名)　生長するにつれて容貌のよくなる事。

おひィこる　生凝(自動四段)　多くの草が一かたまりに爲りて生ひ茂る。○空穗「夏になるまゝに出で入りつくろふ人無ければ蓬葎さへおひこりて」

おいこむ　(自動四段)　老衰する。●老耄。

おひィこむ　追込(他動四段)　追ひ入るゝ。●入れ込む。

おひィこめ　追込(名)　刑罰の名。閉門に同じ。

おいこみ　老込(名)　老衰。●老耄。

おひィこみ　追込(名)　入れ込み。

おいへほほ　御家頰(名)　武具の名面頰の一種にして皺なく滑らかなるもの。

おいへりう　御家流(名)　〔一〕尊圓流に同じ。〔二〕尊圓親王より出でたる諸流の總名。

おいて　於(後)　おきての音便。◎てして就きて取りて關してなどの意。○「朝鮮京城に於て」「況んや人間に於てをや」

おひィて　追手(名)　舟の後ろより吹く風。●順風。●おひかぜ。

おひィて　追手(名)　追ひ行く人。●追ひ來る人。●追兵。●追捕者。

おいで　御出(名)　〔一〕來るの敬語。●御光來。●御來臨。〔二〕行く。至るの敬語。●御出向。●御越し。〔三〕居るの敬語。●御在宅。

おいさらぼふ　(自動四段)　老いて瘠する。

おひィさき　生先(名)　生立ち行く未來。●生長する行末。○源氏「おひさきこもれる慈の内に」

おひィさきなし　生先無(形。形狀言ク活)　身上の未來の頼もしからぬ。(枕)

おいき　老木(名)　年古りたる木。●老木。

おひィき　負木(名)　昔し貴女の外出する時は人に負はれたる事なり。其時に用ふるもの。下の文を見よ。……洞房語園に曰く。慶長の頃までは。諸家の女中などの駕籠と云ふもの稀にして多くは人に負はれたりとう。頭には カツギを被り負はしたり。それにはおひきと云ふもの有つて是に足を掛けたる事なり」

おいきゃる　(自動四段)　行かれた。●行きなさった。●行かしった。(狂言)

おいゆがむ　(自動四段)　老いて容貌の醜くなる。○源氏「おいゆがめる貌も知らずつくろひさまよふ」

おひィめ　負債(名)　借金。●借財。●負財。

おいし　(形。形狀言シク活)　うまし。●美味なり。(俗)

おいじた　老舌(名)　老人の舌。……物言ふ事につきて云ふ。追々舌の利かぬやうになるの意にて。○萬葉「百年に老舌いでゝよゝむとも」

おいしらむ　老白(自動四段)　老いて白髮になる。○宇治「おいしらみたる老僧」

おいしらふ　(自動四段)　いたく老ゆる。●老衰する。○源氏「院の御時よりさぶらひて老いしらへるどもは悲しくて今更に泣きさわぎめできこゆ」

おひィしく　追及(他動四段)　追掛けて行き着く。●追ひつく。(記)

おひィしげる　生茂(自動四段)　生長繁茂する。

おいひがむ　(自動四段)　老いて心の僻む。○源氏「おいひがめるにやいとほしくぞ見ゆる」

おいせさま　御伊勢樣(名)　〔一〕伊勢大神宮。〔二〕大神宮の御祓。

おひィずり　笈摺(名)　〔一〕笈を負ふ時の肩當。〔二〕順禮の着る袖無の類。大人は白色、子供は赤、白繼ぎ合せの布にて作る。

おひずる　笈摺(名)　おひすりの〔二〕に同じ。

おひずがふ　(自動四段)　追ひ掛け跡を繼ぐ。●源氏「かういふ幸び人の腹の后がれこそ又おひずがひぬれ」

おいずしなずのくすり　(名)　不老不死の靈藥。●仙藥。●古今「頭は白くなりぬとも。音羽の瀧の音に聞く。老いず死なずの藥もが」

おひずなず　生末(名)　生先に同じ。

なろ　(名)　〔一〕岑。〔二〕尾上。……(萬葉東歌)

なろ　(名)　尾。……ろは助字。○夫木「山鳥の尾ろの長尾の」

なろち　大蛇(名)　だいじゃ。●うばゞみ。

おろぬく　(他動四段)　數多き中より拔き去る。●間引く。○「菜をおろぬく」

おろおろ　(副)　おぼろ〳〵の略。◎おぼろに。●少々。●大抵。○撰集抄「此歌の心をおろ〳〵心得るに」

おろか　愚(名)　〔一〕智力の乏しき事。●馬鹿。●愚昧。●愚朦。●阿呆。△(形)—愚なる。(副)—愚に。〔二〕(疎)おろそか。●疎略。●麁末。△(形)—おろかなる。(副)—おろかに。

なろがむ　拜(自動四段)　折れ屈むの轉略。●をがむ。●拜する。(記)

おろだ　尾ろ田(名)　尾上に作りたる田。(萬葉)

おろそか　(名)　疎略。●疎漏。●麁末。●不注意。△(形)—おろそかなる。(副)—おろそかに。

おろねぶり　(名)　おろねぶりをする事。

おろねぶる　(自動四段)　少々眠る。●うと〳〵と眠る。○宇治「足を打ち廣げておろねぶりたるを」

なろのかがみ　尾ろの鏡(名)　一說には。山鳥の尾の鏡の如く光る事。又一說には支那の故事。……曰く「山鷄は其毛羽を愛し。水にうつしては舞ふ。魏の武帝の時。南方之を獻ぜしかば。公子蒼舒、人をして大鏡を取つて其尾に着けしめしに。山鷄形を鑒みて舞うて止まず」○夫木「山鳥のなろのかゞみの霜ぐもりうき面影をかけて戀ひつゝ」新後拾遺「よな〳〵の月の鏡もうつるらん遠山鳥のなろのかゞみに」

おろくぐし　お六櫛(名)　信州木曾の名產の木櫛。

おろし　(名)　〔一〕下ろす事。●下す事。●下ぐる事。〔二〕神佛貴人に奉りたる食物の殘りもの。

●おさがり。〔三〕貴人の着ふるしの衣類。●お垢附。〔四〕其他すべて貴人の使ひふるしの品物。〔五〕晴着を不斷着にする事。〔六〕(卸)おろし賣。〔七〕(風)山おろし。

おろしね 卸直(名) 卸賣の直段。

おろしなみ 卸並(名) 卸賣と同樣の直段。賣品を廉價にする時に云ふ詞。

おろしうり 卸賣(名) 商品を問屋より小賣店へ賣り渡す事。

おろしぐすり (名) 墮胎の藥。

おろしこむ (他動下二段) 簾を垂れて其中に籠る。●たれこむる。○源氏「御精進にて御簾おろしこめて行ひ給ふ」

おろしごめ (名) 大饗の食べ殘りの米。○宇治「其かみは。大饗はてゝとりばみといふものを拂ひて入れずして。大饗のおろし米とて給仕したる格勤の者どもの食ひけるなり」

おろしえ (名) 切りおろしたる木の枝。

おろしもののつかさ (名) 監物(けんもつ)の一名。

おろす 降。下(他動四段) 〔一〕高き所の物を低き處にやる。●上にある物を下にやる。●貴き處の物を賤しき處にやる。●下ぐる。落す。〔二〕磨り粉にする。○「藥研にておろす」「大根をおろす」〔三〕仕舞ひ置きたる品物を出して使用する。〔四〕卸賣にする。〔五〕墮胎する。〔六〕料理の詞。魚肉の骨を取りて切る。〔七〕神靈を招く。

おろす (自動四段) 人を制し止むる。●叱り附くる。○源氏「あさましう咎め出でつゝおろす」

をは 尾羽(名) 鳥の尾と翼と。○万葉「尾羽うちふれて鶯なくも」

をば 伯母。叔母(名) 父母の姉妹。……姉なるを伯母と書き妹なるを叔母と書く。

をば (名) 老女。●お婆あさん。

おば 祖母(名) おほばの略。◎祖母(をば)。●ばば。

をば (後) をばを强めて云ふ詞。○古今「海士の刈る藻に住む虫の我からと音をこそ泣かめ世をば恨みじ」

おはち 御鉢(名) 飯櫃。(俗)

おはり 御針(名) 〔一〕針仕事を云ふ。女の詞。〔二〕針仕事を任とする雇女。

をはりだのまひィ 小墾田舞(名) 上古雅樂寮の舞曲の名

◎小墾田は推古天皇の都の名。其御代に出來たる舞なれば云ふ。（紀）

おはやう　御早う（副）　今朝も早く起き給ひしの意。人に會ひてする挨拶の詞。

をばな　尾花（名）　薄の穗。●穗に出でたる薄。

をばなり　（名）　振分髪（ふりわけがみ）の童兒。―はなりに同じ。（萬葉）

をばながゆ　尾花粥（名）　薄の穗を黑燒にして入れたる粥。七月廿七日信州諏訪の御射山祭の日に用ふるもの。又昔し內裏にて八月一日の御祝として用ひられたるもの。

をばなあしげ　尾花葦毛（名）　馬の毛色の一種。差毛のある葦毛。

おはらひ　御祓（名）　〔一〕伊勢大神宮の祓の玉串。〔二〕其他諸神社の祓の御札。●守札。

おはらひたて　御祓立（名）　兜の前立を立つるところ。神のお祓を入れて守とする事あるよりの名。

おはらぎ　大原木（名）　大原女の頭に載せて賣りに來る薪。

おはらめ　（名）　京都の近在大原邊より京の町に物賣りに出づる女。

をばむこ　伯母婿。叔母婿（名）　をばの夫。即ち義理のをぢ。

おはぐろ　お齒黑（名）　齒黑めに同じ。かね。

おはぐろとんぼ　（名）　蜻蛉の一種にして。其羽の黑きもの。

をばやし　小林（名）　林。●森。（萬葉）

おばけ　お化（名）　化物。●妖怪。●變化。

をばご　伯母御。叔母御（名）　をばの尊稱。●をばうへ。

をはぎ　（名）　草の名。春生するもの。うはぎと同物なるべし。○新撰六帖「今日ハ又雪間のをばぎ摘みまぜて野邊の若葉の數や添ふらん」

おはぎ　お萩（名）　萩の餅。●牡丹餅。（俗）

たはぎ　（名）　うはぎに同じ。草の名。嫁菜。

をばしら　男柱（名）　〔一〕櫛の兩端にある大なる齒。（記）〔二〕男根。

おばしま　（名）　欄干。（雅）

おはもじ　御は文字（名）　おはづかしの意。婦女の手紙に云ふ詞。

おに　鬼（名）　〔一〕死靈。●幽靈。●亡魂。●陰鬼。〔二〕想像の惡魔の名。角二つあり口耳脇まで裂けて鋭き牙食ちがひ。虎の皮の褌を締めたる樣に畫かくもの。おもに冥途にては地獄、

我國にては丹波の大江山などに住みて人類を食とす。●夜叉。〔三〕鬼の如く恐るべき。殘酷なる。人を害する。肥大なる形。猛惡の性を備へたるすべての物。〔四〕女。●美人。……鬼と反對の意味にて云ふ。（伊勢）

おにばば

鬼婆（名）　心の鬼々しき老婆。

おにばす

鬼蓮（名）　水草の名。莖に刺多く蓮に似て蓮のために害をなすもの。●異名を茨蓮（いばら）とも水蕗（みづぶき）ともいふもの。

おにぼし

鬼星（名）　星の名。二十八宿の一つ。鬼宿（きしゅく）。

おにおにし

（形。形狀言シク活）　鬼の樣な。●無慈悲な。●粗暴な。●殘忍な。○源氏「いとおにおにしう侍るさがなものを」

おにわたし

鬼渡（名）　小兒の遊戲。おにごっこに同じ。

おにわらび

鬼蕨（名）　蕨の一種。深山に生ずるもの。

おにがはら

鬼瓦（名）　屋根の棟に置く鬼の面の瓦。

おにがらやき

鬼殼燒（名）　料理の名。海老を殼の儘に燒きたるもの。

おにかみ

鬼神（名）　〔一〕神靈。●神。○古今序「目に見ねぬ鬼神をもあはれと思はせ」〔二〕荒ぶる神。●惡魔。●おに。○謠曲「鬼神なりともさすが賴光が。手並にいかで漏らすべきぞ」

おによけ

鬼除（名）　酒の異名。

おにたらし

御多羅枝（名）　天皇の持たせ給ふ御弓。……下學集に「最初多羅樹の枝を截り以て弓を作る。故に爾云ふ」とあれど附會なるべし。「おんとらし」の轉と見るをよしとす。……「みとらし」を見よ。

おにたで

鬼蓼（名）　草の名。犬蓼の一名。

おにむしゃ

鬼武者（名）　鬼の如き勇者。●荒武者。

おにうど

鬼獨活（名）　草の名。獨活の一種。

おにうちまめ

鬼打豆（名）　節分の夜鬼やらひの式に用ふる煎豆（いりまめ）。

おにのばらわた

鬼の腸（名）　七月七日に食ふ素麵。此日に素麵を食へば病疫に罹らずとてする事

おにのま

鬼の間（名）　清涼殿の中。西南の方にある室の名。○南の壁に白澤王の鬼を切る圖あり。故に名づく。

おにのまゆ

鬼の眉（名）　九月九日酒に浸す菊。

おにのしこぐさ

鬼の醜草（名）　草の名。紫苑（しをん）の異名。

○謠曲「紫苑といふはなどやらん。鬼の醜草とは。誰が附けし名なるぞ」

おにやらひィ

鬼逐(名)　〔一〕古へ大晦日に禁中にて行はれたる儀式。●追難(つゐなん)。●なやらひ。〔二〕節分の夜家々にて行ふ豆まき。

おにやんま

(名)　虫の名。蜻蛉の一種。

おにまろ

鬼丸(名)　古代の筆の名。

おにぶえ

鬼笛(名)　古代横笛の名。葉二つの一名。(江談)

おにころし

鬼殺(名)　酒又は煙草の極めて強きもの。

おにごと

鬼事(名)　小兒の遊戯。●鬼渡し。●おにごっこ。

おにごっこ

(名)　小兒の遊戯。多人數の中より鬼を一人定め。追ひつ逃げつして捕へられたるものを負と爲し。之に鬼の役を廻す遊び。

おにあはり

鬼粟(名)　穀物の名。粟の一種。

おにあざみ

鬼薊(名)　草の名。薊の一種。

おにぎた

鬼北(名)　二月に吹く北風。

おにゆり

鬼百合(名)　百合の一種。姫百合より大きく苦味あるもの。●異名は……山百合。●犬百合。

おにみそ

鬼味噌(名)　鹽の辛き味噌。

おにしぼり

鬼絞(名)　絞染の一種。大きく絞りたるもの。

おにび

鬼火(名)　墓所又は朽ちたる木などより燃ゆる青き火。●燐火。●陰火。●狐火。

おにびし

鬼菱(名)　水草の名。男菱の一名。

おにぜきしゃうし

鬼石菖(名)　草の名。石菖の一種。其葉の廣きもの。

おにすぎはら

鬼杉原(名)　杉原紙の最上なるもの。●本杉原。●本糊入。

おぼろ

朧(名)　明ならぬ事。●薄暗き事。△(形)—おぼろなる。(副)——おぼろに。

おぼろかに

(副)　おぼろげに同じ。○萬葉「大丈夫の行くてふ道ぞおぼろかに思ひて行くな大丈夫の友」

おぼろよ

朧夜(名)　朧月夜に同じ。

おぼろつくよ

朧月夜(名)　おぼろづきよに同じ。

おぼろづき

朧月(名)　霞みたる月。●薄く曇りたる月。……多く春の月を云ふ。

おぼろづきよ

朧月夜(名)　月のおぼろに霞む夜。

おぼろげ

朧氣(名)　ふたしか。●大方。●通例。●一

通り。●尋常。〈(形)—おぼろげの。(又)—おぼろげなる。○後撰「おぼろげの海人やはかづく伊勢の海の波高き浦に生ふるみるめは」……此詞は時としておぼろげならぬの意に用ふる事あり。榮花に「おぼろげの(おぼろげナラヌ)鳥獸ならずは出で給はん事かたし」の類。(副)—おぼろげに。○拾遺「逢ふ事は片われ月の雲がくれおぼろげにやは人の戀しき」……これもおぼろげならずの意に用ふる事あり。源氏に「おぼろげに(おぼろげナラズ)しめたる我心から淺くも思ひなされず」の類。

おぼろぶね

朧舟(名)　葦原などに朽ち埋もれたる舟。●繫ぎ捨てゝ汐水などの入りたる舟。○吳竹集「難波潟葦間の月のおぼろ舟雲みて見ゆる春の曙」

おぼほし

(形。形狀言シク活)　〔一〕おぼ〳〵し。●おぼつかなし。●不安心な。○萬葉「己妻(おのつま)の里におきおぼゝしく見つゝぞ來ぬる此道のあひだ」〔二〕鬱陶し。○萬葉「春日山朝居る雲のおぼゝしく」

おぼす

(他動四段)　思ふの敬語。思ひ給ふ。●御思ひなさる。●おぼしめす。●おもほす。

おぼる

溺(自動下二段)　〔一〕水に陷りて沈む。〔二〕物事に深く思ひ入る。●耽る。●惑溺する。

おぼおぼし

(形。形狀言シク活)　おぼろげなる。●たど〳〵し。●明ならぬ。●はっきりせぬ。○源氏「黃昏時のおぼ〳〵しきに」「耳もおぼ〳〵しかりければ」

おぼほる

(自動下二段)　〔一〕溺るゝ。○夫木「割舟の世をうみわたるしるしにはおもての波におぼゝれにけり」〔二〕心のぼける。●うつける。●ぼんやりする。○源氏「いよ〳〵童部の戀ひて泣くやうに心をさめん方なくおぼゝれぬたり」

おぼつかながる

(自動四段)　覺束なく思ふ。

おぼつかなし

覺束無(形。形狀言ク活)　心もとなき。●ふたしかなる。●不安心なる。●待遠なる。

おぼらかす

溺(他動四段)　溺らす。●溺れしむる。

おぼらす

溺(他動四段)　●溺れしむる。

おぼふ

覺(他動下二段)　漢文訓讀の詞。●覺ゆの訛り

おぼこ

（名）　世心の付かぬ少女。●生娘。

おぼえ

覺（名）　〔一〕覺ゆる事。●識得。〔二〕覺ゑ居る事。●記臆。〔三〕他人より思はるゝ事。●君よりの寵愛。●世人よりの名望。○源氏「時代のおぼえ」「我はいとおぼえ高き身とおもひて」〔四〕おぼえがきの略。目錄の始などに書くもの。

おぼえちゃう

覺帳（名）　忘れぬ爲めに記しおく帳面●備忘錄。

おぼえがき

覺書（名）　忘れぬための書付。

おぼゆ

覺（自動下二段）　〔一〕思はるゝ。〔二〕思ひ知る。●さとる。●感ずる。〔三〕覺ゑ居る。●記臆する。●思ひ出す。〔四〕似る。○空穗「かしこけれど此御手こそ右の大將の御手にいとよう覺えたり」

おぼゆ

覺（他動下二段）　語る。●話す。○大鏡「すべては神武天皇を始め奉りて次々の帝の御次第を覺え申すべきなり」

おぼめかし

（形。形狀言シク活）　おぼめかるゝ有樣。●覺束なし。●おぼ〳〵し。●たど〳〵し。○源氏「女君さばかりならんと心得給へれど。おぼめかしくもてなしておはす」

おぼめかす

（他動四段）　おぼめく樣にする。●ほのめかす。●それとなしにうす〳〵知らする。

おぼめく

（自動四段）　〔一〕覺束なく思ふ。●ふたしかに思ふ。○源氏「げにうちつけなりとおぼめき給はんもことわりなれど」〔二〕とぼける。●しらばくれる。○源氏「違ふべくもあらぬ心のしるべを思はずにもおぼめい給ふかな」

おぼし

（形。形狀言シク活）　〔一〕思はるゝ樣な。○源氏「物の上手とおぼしき限りとりどりに打合ひたる拍子など」〔二〕思はるゝ。●思はし。○大鏡「おぼしき事いはぬはげにも腹ふくるゝ心地しけり」

おぼしやる

（他動四段）　思ひやるの敬語。

おぼしめし

思召（名）　思召す事。●尊慮。●深情。

おぼしめす

思召（他動四段）　思ふの敬語。●おもほしめす。●御思ひなさる。

おぼす

思（他動四段）　思ふの敬語。思ひ給ふ。●御思ひなさる。●思召す。

おへや

御部屋（名）　御部屋樣の略。

おへやさま 御部屋樣(名) 〔一〕貴人の妾。〔二〕貴人の後家。●後室。

おと 音(名) 總べて耳に聞ゆるもの。●響。●聲。

おと 乙(名) 狂言の女面の名。

おと 於菟(名) 獸の異名。虎の異名。

おと 弟(名) 〔一〕おとうと。〔二〕いもうと。

おとひ 兄弟(名) 兄弟の略。○萬葉「おとひをとめと相見つるかも」

おどろ 荊(名) 草木などの繁り亂れたる所。○增鏡「奥山のおどろの下も蹈みわけて道ある世ぞと人に知らせん」

おどろおどろし (形。形狀言シク活) 驚くべき程の。●大そうらしい。●仰山な。●恐ろし。○枕「夜いたく更けて門をおどろ〳〵しく叩けば」

おどろかし (形。形狀言シク活) 驚くべき有樣。○空穗「帝琴ども試み給ふにおどろかしき聲出で」

おどろかす 驚(他動四段) 驚かしむる。●驚く樣にする。

おどろふ 衰(自動下二段) 盛が過ぎる。●勢の弱る。

おどろく 驚(自動四段) 〔一〕不意の事に出あひて心の刺衝せらるゝ。●びっくりする。●仰天する。〔二〕眠の覺むる。

おとろへ 衰(名) 衰ふる事。●衰弱。●衰微。

おどろき 驚(名) 驚く事。

おとぼね 頤骨(名) 頤骨の略。●下顎骨。

おとと 弟(名) おとうとの略。

おとど 大殿(名) 〔一〕大きなる殿。●貴人の殿。〔二〕大きなる殿に住む人。〔三〕大臣。〔四〕女の尊稱。

おとどひ (名) をとつひに同じ。●一昨日。

おとどひ (名) 兄弟。●はらから。

おとどこのかみ (名) 兄弟。●同胞。(空穗)

おとどし (名) 昨年の前年。●一昨年。

おとり 雄鳥(名) 雄の鳥。●をんどり。●をす。

おとり 媒鳥(名) 鳥を捕ふる時。之を誘ひ寄する爲めに置く媒介の鳥。

おとり 劣(名) 〔一〕劣る事。●劣等。〔二〕おとりばらの略。(源氏)

おどり 躍。踊(名) 〔一〕をどる事。●俗樂の舞曲。〔二〕ひよめきの一名。

おとりばら 劣腹(名) 妾腹の子。

をどりねんぶつ 踊念佛(名) 空也念佛の一名。

をどりやたい 踊屋臺(名) 踊ををどる屋臺。祭禮の時などに市中を引きあるくもの。

をどりこ 踊子(名) 〔一〕踊りををどる少女。〔二〕少女(をどりに限らず群がりて盆踊などする人々。●踊手

をどりて 踊手(名) 踊ををどる人。

をどりじ 躍字(名) 同し漢字を重れて語をなす文字。●疊字。……日々、丁々、往々の類。

おとる 劣(自動四段) 等級の下る。●彼に比べてわるくなる。

をどる 躍。踊(自動四段) 〔一〕足を擧けて跳れ廻る。〔二〕舞を舞ふ。……但し舞ふに比べては足の運動甚しく下品なる趣あり。〔三〕すべて飛び跳れ騷ぐやうの動作を爲す。

おとなば 弟叔母(名) 父母の妹。

おとなぢ 弟叔父(名) 父母の弟。

おとがひィ 頤(名) 下顎。

おとがね 音金(名) 射る時に音のする樣に弓弦の中に入るゝ金。

おどかし (名) おどしに同じ。威かす事。

おどかす (他動四段) 威すに同じ。

おとよめ 弟嫁(名) 弟の嫁。

おどれ (名) 人を罵る時に云ふ詞。おのれに同じ。

をとつひィ (名) 昨日の前の日。●一昨日。●再昨。●をとゝひ。

おとづる (他動下二段) 人を訪ふ。●見舞ふ。●訪問する。●音信する。

おとづれ 音信(名) おとづるゝ事。●たより。●書信。

おとつづみ 弟鼓(名) 樂器の名。小鼓のこと。

おとつき 乙月(名) 十二月の異名。

おとね 乙子(名) 其月の末の子の日。

おとな 大人(名) 〔一〕元服したる以上の人。〔二〕すべて丁年以上の人。〔三〕衆の頭立つ人。〔四〕老臣。●老僕。●おとなをんな。

おとなひィ (名) 〔一〕音なふ事。●音。●響。○源氏「衣の音なひはら〳〵として」〔二〕おとづれ。

おとなおとなし (形。形狀言シク活) おとなしに同じ。○空穗「若君はやとのたまへば。おとなおとなしうついゐたり」

おとなをんな 大人女(名) 侍女の頭立ちたる人。○住吉「侍從はおとなをんなにて萬に大事の人

おとなだつ

にて」

大人立(自動四段)　大人ぶる。●大人らしく見ゆる。

おとなふ

音(自動四段)　〔一〕音のする。●響く。〔二〕音づる〻。●訪問する。●案内を乞ふ。○源氏「此あたりに音なふをりもあらん」

おとなげなし

(形。形狀言ク活)　大人らしくなし。

おとなぶ

(自動上二段)　大人らしくなる。●大人めきて來る。○源氏「御年の程よりはおとなび美しき御有樣にて」

おとなぶる

大人振(自動四段)　大人らしき風をする。

おとなし

(形。形狀言シク活)　〔一〕心振舞の大人めきたる有樣。●大人らし。○源氏「十一になり給へど程より大きにおとなしう清らにて」〔二〕おとなゝるべしと外より想像せらるる有樣。●おとなと見ゆる。○宇治「おとなしき郎等進み來て」〔三〕柔和なる、溫順なる。●沈着なる。○「娘ばおとなしきこそよけれ」

おとなしやかなる

おとなしき有樣。△(形)―おとなしやかなる。(副)―おとなしやかに。

をどむ

(自動四段)　淀む。●沈澱する。●水底に沈みて溜る。

おとむすめ

乙娘(名)　末女。●季女。

おとうと

弟(名)　〔一〕父母を同じうする年下の男子。〔二〕父母を同じうする年下の女子。●妹。

おとうとよめ

弟嫁(名)　弟の妻。●おとよめに同じ。

おとうとぶん

弟分(名)　約束の上の弟。●義弟。

おとうとでし

弟弟子(名)　同じ師に已れより後に入門したる弟子。

をとこだふか

男踏歌(名)　をとこだふかに同じ。

ただふか

(自動下二段)　戯る〻。●ふざける。●滑稽を言ふ。

おどく

乙矢(名)　弓を射る時。手に持ちたる矢の最終に射るもの。

おどや

(形。形狀言シク活)　〔一〕醜しの轉。〔二〕恐ろし。●けうとい。●氣味のわるい。

おどまし

(名)　おどくる事。●滑稽。●じゃうだん。

おどけ

男(名)　〔一〕男なる人。●男子。●をのこ。〔二〕元服したる男子。●壯夫。●若いもの。〔三〕下男。〔四〕夫。〔五〕俗。すなはち僧にあらぬ人。

をどこ

おとご　弟子(名)　末の子。●末子(ばつし)。

をとこ　小床(名)　床。(歌詞)

をとこばしら　男柱(名)　橋の袂の左右の柱。

をとこだふか　男踏歌(名)　禁中にて昔し正月十四日に行はれたる節會。聲よく歌ふ事の優れたる男を召して年始の祝詞を歌はしめ舞を舞はせたるもの。

をとこあがふゥぎ　男扇(名)　能樂に用ふる扇の一種。狩衣、直垂などの時携ふるもの。

をとこたや　男親(名)　父。

をとこがた　男方(名)　男の方。……女の方に對して。○源氏「男がたの遊びにまじりなどして」

をとこだて　(名)　〔一〕男の氣性を立つる事。●義を重んじ身を輕する氣風。●任俠。〔二〕德川時代の中頃以後男立の行をなし顏を賣るを以て世に立ち市中を横行したる人。●男達。●町奴。●俠客。●顏役。

をとこつかひィ　男使(名)　山城平野祭に發向する勅使。……女使といふものも立つ故に區別して云ふ。(公事根源)

をとこなき　男泣(名)　男の泣く事。男は容易に泣くまじきもの故。極めて感の强き時に云ふ。

おとごのもち　弟子餅(名)　十二月朔日に搗く祝の餅。

をとこぐさ　男草(名)　萩の異名。(藏玉集)

をとこまひィ　男舞(名)　〔一〕昔し白拍子の舞ひたる舞。◎女にして水干立烏帽子に太刀を佩き。男の姿に出で立つ故の名。〔二〕能樂にて狩衣、直垂、素襖など着たる男の奏する舞。

をとこまさり　(名)　女にして其氣性の男にも優る程强き事。

をとこげいしゃ　男藝者(名)　太鼓持に同じ。●幇間。

をとこぶり　男振(名)　男たるの風采。●男たるの容貌。

をとこゑ　男畫(名)　一說には男の形をかきたる畫。又一說には男文字などの類にて當時支那風の畫をいふ。○榮花「男畫など畫師はづかしうかゝせたまふ」

をとこへェし　男郎花(名)　草の名。女郎花に似て花の白きもの。

をとこで　男手(名)　漢字。……假名を女手といふに對して。○空穗「男手も女手もならひ給ふ」

をとこざか　男坂(名)　神社の石壇の正面に昇る急なる

坂。傍より緩やかに昇らるゝ處を女坂と云ふ。

をとこざかり　男盛(名)　壯年の盛時。

をとこぎ　男氣(名)　男らしき氣性。●俠客肌。

をとこぎみ　男君(名)　夫。●良人。●旦那。

をとこめし　男郎花(名)　をとこへしに同じ。

をとこみや　男宮(名)　男の宮樣。●皇子。

をとこみこ　男皇子(名)　男の御子。●皇子。

をとこみこ　男神子(名)　男にて神に仕へ。神おろしを爲し。神慮を窺ひなどする者。

をとこしゅう　男主(名)　男の主人。

をとこじゅう　男衆(名)　下男。

をとこもじ　男文字(名)　漢字。●漢文。(土佐)

をとこす　(自動サ變)　女の男を拵へる。●男と通ずる。○大和「忍びて男したりけり」

おとさた　音沙汰(名)　音信。●噂。

おとばふこ　御伽這子(名)　ばふこに同じ。

おとぎき　音聞(名)　評判。●風聞。○源氏「世の音聞もあはつけきわざなれば」

をとめ　少女。乙女(名)　未婚の少女。●むすめ。●童女。●處女。●生娘。

をとめばな　緒留(名)　緒締に同じ。

おとめつばき　弟女花(名)　菊の異名。

をとめこ　乙女椿(名)　木の名。椿の一種。小さくして八重の美しき花さくもの。

をとめさびす　少女子。乙女子(名)　をとめに同じ。(自動サ變)　少女らしき振舞を爲す。○萬葉「少女等がをとめさびすと唐玉を袂に纏かし」

をどみ　(名)　〔一〕をどむ事。淀み。○祝詞式「すゝぎふるをどみの水のいやをちに」〔二〕をどみたる物。●沈澱物。

おとし　落(名)　〔一〕落す事。〔二〕落す物。〔三〕滑稽などにて留むる話の結局。

おどし　縅(名)　〔一〕鎧をおどす事。〔二〕其おどしたる鎧。○「緋縅」「黑革縅」「卯花縅」

おどし　威(名)　威す事。●威嚇。●脅迫。

おどしいと　縅糸(名)　車をおどすに用ふる糸。

おどしいる　陷(他動下二段)　欺きて落ち入らしむる。

おとしばなし　落話(名)　落しを面白く作りたる話。●らくご。

おとしだね　落胤(名)　母の懷妊中に父死して而して生

れたる子。●賤の女の腹にやどりたる貴人の子。

おとしだな 落棚(名) 違ひ棚の一種。

おとしむ (他動下二段) 劣りたるものと思ふ。●卑しむ。●輕蔑して言ふ。

おどしぐさ 繊草(名) おどしの種。○源氏「たゞさるべきなりのおどしぐさにぜんとぞ思ひける」

おどしげ 繊毛(名) おどしいとに同じ。

おどしぶみ 落文(名) 〔一〕公然言ふべからざる事など書きて道に落し置く文。●落書。〔二〕途中などに取り落したる文。〔三〕時鳥の飛ぶ時空より落したる拔羽。

おどしえ 落餌(名) 鷹に飼ふ餌。

おどしあな 陷穴(名) 敵、獸など陷れて捕る爲めに作る穴。

おとしざし 落差(名) 刀を小尻下りに差す事。

おとしみづ 落し水(名) 稻田に引きたる水の不用になりたるを秋の半頃より流し捨つる事。

おとひめ 乙姫(名) 龍宮の王女。

おとひめ 弟姫(名) 妹の姫。●季女。

おどす 繊(他動四段) 糸、革等にて鎧の札を縫ふ。

おどす 威(他動四段) 威を以て驚かす。●おちしむる。

をぢ 芸薹(名) 草の名。油菜の一名。(和名抄)

をぢ 遠(名) 遠方。●あちらの方。……距離にも時にも云ふ。○新後拾遺「朝夕に見ればこそあれ住吉の浦よりをちの淡路島山」十六夜「戀しのぶ心やたぐふ朝夕にゆきてはかへるをちの白雲」六帖「昨日よりをちをば知らず百年の春の始は今日にぞありける」

おち 乙(名) 物の後に立つ事。●劣る事。○空穗「青み痩せてゆゑぎ出で來て季房今日の御歩みの乙に入らんとて交りたり」

をち (名) 同じ動作を幾度も繰返す事。●初に復る事。●元に復る事。○萬葉「我宿に咲ける撫子まひはせむゆめ花散るないやをちに咲け」

おち 落(名) 〔一〕落つる事。〔二〕漏れ。●脫漏。●手落。〔三〕結局。●好結局。○「おちを取る」

をぢ 伯父。叔父(名) 父母の兄弟。……兄なるを伯父と書き弟なるを叔父と書く。

をぢ 翁(名) 〔一〕年老いたる男。●老翁。●おきな。○催馬樂「奥山に木伐るやをちに〔二〕老人、

先輩、師匠などの尊稱。○「鹽土のをち」「本居のをち」

おぢ 祖父(名) おほぢの略。

おちいる 陷(自動四段) 落ち込む。●はまり込む。●はめらるゝ。●落さるゝ。

おちゐる (自動一段) 〔一〕安心する。●安堵する。〔二〕住み附く。●住居の定まる。

おちば 落葉(名) 〔一〕落ち散る木の葉。●らくようふ。〔二〕落胤。○源氏「朝臣。左樣の落葉をだに拾へ」

おちばごろも 落葉衣(名) 木の葉の身に散りかゝるを衣に見立てゝ云ふ。○後撰「秋の夜の月の影こそ木の間より落葉衣と身にかゝりけれ」

おちほ 落穗(名) 落ち散りたる米麥などの穗。

をちど 越度(名) 過失。●失策。(十訓)

おちおち (副) 落付きて。●安心して。

をぢをぢ 條條(名) でうゝ。●廉々。●件々。

おぢおそる (自動下二段) 恐れ恐るゝ。●恐懼する。

おぢをののく (自動四段) おぢわなゝくに同じ。

おぢわななく (自動四段) 恐れて振へる。

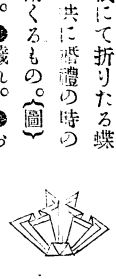
をちかた 遠方(名) をちの方。●あちらの方。●向の方。○新後撰「まづ咲ける花とやいはん打ち渡す遠方野邊の春の淡雪」

おちがた 落方(名) 將に落ちんとする時。●落ち始め。○枕「お前の梅は西は白く東は紅梅にて少し落方になりたれど」

をちかたびと 遠方人(名) 遠方の人。●遙あなたの人。○後撰「七夕の天のとわたる今宵さへ遠方人のつれなかるらん」

をちかへる (自動四段) 同じ動作を幾度も繰返す。●初に復る。●元の處に復る。○續後拾遺「明石潟とわたる千鳥をちかへりいく浦波をかけて鳴くらん」

をてふ 男蝶(名) 紙にて折りたる蝶の形。雌蝶と共に婚禮の時の銚子などに附くるもの。〔圖〕



をぢゃく 汚濁(名) よごれ。●穢れ。●おもに佛教にて云ふ此世の穢れ。

おちたぎつ 落瀧津(形) 水の走り落つる。●瀧となりて落つる。○古今「落瀧津瀧の水上年つもり老いにけりしな黒き筋なし」

をちつかた　遠つ方(名)　をちかたに同じ。

おちつく　落着(他動下二段)　落着かしむる。●鎮むる。

おちつく　落着(自動四段)　〔一〕居處の確と定まる。〔二〕安心する。●沈着する。

おちつき　落着(名)　落ち着く事。

をちなし　(形。形狀言ク活)　鈍し。●弱し。●拙し。○竹取「をちなきことする船人にもあるかな」

おちむしゃ　落武者(名)　戰敗れて落ち行く武者。

おちうど　落人(名)　逃げ落ちたる人。

おちのひと　御乳人(名)　乳母。

おちく　(自動下二段)　恐るゝ。●びくゝする。●こわがる。●おちける。

おちくぼ　落窪(名)　家の内にて殊に落ち込みたる室。

おちぐち　落口(名)　落ちはじめ。○拾遺「足引の山の木の葉の落口は色のをしきぞあはれなりける」

おちぐり　落栗(名)　〔一〕落ちたる栗の實。〔二〕落栗色の略。

おちぐりいろ　落栗色(名)　染色の名。黑み多き紅。

おちぐさ　落草(名)　鷹に追はれて落ちゆく鳥の隱家とする草。○風雅「御狩する片山陰の落草にかくれもあへず立つきゞすかな」

をちやちぢみ　小千谷縮(名)　織物の名。越後小千谷より產する縮織。

たちまふ　落舞(自動四段)　水の落ちて渦卷く。○重之集「最上川おちまふ瀧の白糸は山の眉よりくるにゞありける」

おぢけ　(名)　怖ち恐るゝ心。●恐怖心。(俗)

おちぶる　(自動下二段)　身の成り下る。●零落する。●流離する。●落魄する。

おちふだ　落札(名)　入札の其人に落つる事。又その落ちたる札。

おちぶれ　(名)　おちぶるゝ事。●零落。

をぢご　伯父御。叔父御(名)　をぢの尊稱。

をちこち　遠近(名)　遠き處と近き處。●あちらこちら。●かなたこなた。

おちこむ　落込(自動四段)　落ち入る。●はまりこむ。

おちえん　落椽(名)　雨戸より外に一段低く作りたる椽。

おちあひ　落合(名)　川水の流れ來て他の川水と出合ふ所。

おちあふ　落合(自動四段)　〔一〕川水の流れ來て他の川水と出合ふ。〔二〕人と人と出くはす。

おちあぶる　（自動下二段）　おちぶるに同じ。●零落する。○源氏「かくまで落ちあぶるべき際とは思ひ給へざりしを」

おちゆく　落行（自動四段）　〔一〕逃げ行く。〔二〕衰へ行く。●下り行く。

おちじほ　落汐（名）　引汐に同じ。

なり　檻（名）　猛獸又は狂人など籠め置く處。

なり　折（名）　薄板を折り曲げて作りたる箱。進物の菓子、玉子など入るゝに用ふ。

なり　折（名）　時。●節。●機會。●場合。

なり　居（自動ラ變）　其所に在る。●居る。

おり　織（名）　織る事。●織方。

おり　（名）　水などの底に沈みたる雜物。●沈澱物。●などみ。

おりいろ　織色（名）　〔一〕染めたる糸を以て織りたるもの。〔二〕縱糸と横糸と色を變へて織りたるもの。

おりゐる　下居（自動一段）　〔一〕下りて居る。〔二〕位を下りて居る。

おりゐのみかど　下居の帝（名）　御位を下り給ひたる天皇。●太上天皇。●上皇。

なりは　折羽（名）　雙六の類の室内遊戯品。

なりはへ　（副）　なりはへてに同じ。○續古今「久方の桂の里の小夜衣なりはへ月の色に擣つなる」

なりはへて　（副）　引き返し〳〵。●時長く。●引きつゞきて。●間も置かず。○古今「足引の山時鳥なりはへて誰か優ると音をのみぞ鳴く」

なりにくく　（副）　折惡しくに同じ。○落窪「猶もよろしう降れかし。折にくゝも覺ゆ侍るかな」

なりほん　折本（名）　紙を長くつなぎて折り疊み表紙を附けたる本。……法帖、書畫帖の類。

おりべ　織部（名）　〔一〕織部司。〔二〕朱塗に蒔繪などしたる一種の木盃。◎天正年中に織部重能といふ人の作り出だしたる形なれば云ふ。

おりべぼん　織部本（名）　諸本の一種。天保年中に翻世織部の章句印行せしもの。

おりべつかさ　織部司（名）　古代官廳の名。大藏省の所屬にして禁中の織物染物などの事を掌る所。官吏は正、佑、令、史あり。

おりべのつかさ　織部司（名）　おりべつかさに同じ。

なりど　折戸（名）　一枚の扉が蝶つがひにて半より折れ

て開かるゝやうになりたるもの。

おりぢ 織地(名) 織物の地合。

をりをり 折々(副) 時々。●折節。●たまに。

をりかがみ 折屈(名) 身を折ったり屈めたりする事。●起居の樣子。●動作。

をりから 折柄(副) 其折に。●丁度其時に。

おりかく 織掛(他動下二段) 織りて物に掛け置く。○古今「立田川錦おりかく神無月時雨のあめをたてぬきにして」

をりかへし 折返(名) 折返す事。●折返す處。●折返すもの。

をりかへす 折返(他動四段) 〔一〕紙、布などの類を折りて裏を出だす。〔二〕繰返す。●反復する。〔三〕特には音樂または歌曲を二反する。

をりがみ 折紙(名) 〔一〕横二つに折りたる紙。〔二〕之に書くを本式とする故◎鑒定書。●證明書。

をりがみつき 折紙附(名) 折紙の附き添ひ居るもの。

おれ(ョ)う 御寮(名) 尼の尊稱。=おあんに同じ。(狂言)

おりたつ 下立(自動四段) 〔一〕下り行きて其處に立つ ○「馬よりおりたつ」「舟よりおりたつ」

をりづる 〔二〕自ら手を下す。●親しく其事にあづかる。●深切に其事を處置する。●身を入れてする。○空穗「右大將おりたちて政し給ふ」

おりない 折鶴(名) 〔一〕紙にて鶴の形を折りたるもの 〔二〕之を畫かきたる模樣または紋。

をりうづく (句) 御座ないに同じ。●御座らぬ。○狂言「かやうな目出度い事はおりない」

をりく (名) 折櫃(をりびつ)の音便。

をりくぎ 折釘(名) 折り曲げたる釘。●額など掛くるに用ふるもの。

おりや 織屋(名) 機を織るために設けたる家。●機屋。●機殿。

おりゃる (自動四段) 御座るに同し。○狂言「其事でおりゃる」

をりまつ 折松(名) 〔一〕薪の料に折りたる松の枝。

〔二〕轉じてはたゞ薪をいふ。○辨内記日記「枯れたる萩の枝など折松にせられける」

たりふし（副）〔一〕折柄。●丁度其時に。〔二〕折々。●時々。●たまたま。

たりふす（他動下二段）草などを折りて伏する。○新古今「神風の伊勢の濱荻をりふせて旅寐やすらん荒き濱邊に」

おりこ　織子（名）機を織る工女。●織工。

たりごと　折琴（名）持ち運の便なるため二つに折るゝやうに作りたる琴。（方丈記）

たりゑぼし　折烏帽子（名）〔一〕風折烏帽子。〔二〕侍烏帽子。

おりて　織手（名）機を織る人。●織子。

たりでほん　折手本（名）折り本に仕立てたる手本。

たりあひ　折合（名）折り合ふ事。●和熟。（俗）

たりあヨふ　折合（自動四段）互に讓りあひて和睦する。●中よくする。

たりあし（形。形狀言シク活）折節あやにくなる。●丁度都合わるく。

おりざま　織樣（名）織り方。●織りやう。

たりめ　折目（名）紙、布などの折りたる目。

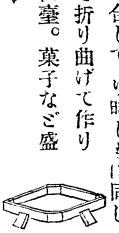
たりしまれ（副）折しもあれの約。○小侍從集「忍妻明くればかへるたりしまれ涙催す鶯の聲」

たりしも（副）丁度其折柄。●其時。

たりしも（名）丁度其折。●其時。○謠曲「其折しもは引く汐にて」

たりしもあれ（副）猶他に然るべき時も有るべきに。●時も時と差し合して。り時しもに同じ。

たりびつ　折櫃（名）薄板を折り曲げて作りたる入物。又は臺。菓子など盛るに用ふ。〔圖〕



おりひめ　織姫（名）〔一〕機織る工女。〔二〕七夕に祭らるゝ女性の星。●織女。

おりもの　織物（名）〔一〕織りたる物の總名。〔二〕錦。

おりすぢ　織筋（名）〔一〕織物の面にあらはれたる糸。〔二〕横糸を太くして織りたるもの。

たりすけ　折介（名）下男の異名。

おわし　御主（代）其方。●御前。●貴樣。（俗）

なる　折（他動四段）押し屈むる。●屈むる。●曲げて二つにする。●挫く。

なる　折（自動四段）波の折れ返る。○好忠集「氷する洲崎の汀ほど遠み寄り來し波も沖にたりつ

つ」

なる 折(自動下二段) 押されて風む。●屈む。●曲る。●挫くる。

なる 居(自動四段) 其所に在る。●すわる。「をり」に同じ。

おる 織(他動四段) 縦筋と横筋とを打ち違へて組み合はす。●布、絹、莚などを作る。

おる 下(自動二段) 高き所より低き所に行く。●くだる。●さがる。

おる (自動下二段) 愚になる。●ぼける。○源氏「かしこがり給へど人の親よ。おのづからおれたる事いでくべかめれ」

おるがん (名) 〔一〕英語より來る。◎西洋風樂器の名。數多の笛ありて管に押され音を立つる仕掛になりたるもの。之を奏する時は足にて風を送り手にて管に續きたる鍵子木の如きものを突きならす。●風琴。

をるやなぎ 折柳(名) 支那古代の笛の曲名。●折柳曲。○謠曲「をるやなぎ落つる梅」

をを (感) 呼ばれて答ふる聲。●承諾して答ふる聲。○源氏「をゝと荒らかに聞ゐたり」祝詞式「神主祝部等諸聞食せと宣る」とある註に「神主祝部等共にをゝと申す」

おほか (名) おほよそ。●疎略。●等閑。○萬葉「吹く風もおほには吹かず。立つ波ものごとにば立たず」

おほか 大(形) 〔一〕大きなる。●太き。●多き。●強き。●廣き。●最初の。〔二〕尊稱として添ふる。○「大神」「大君」

おほ (感) 古代警蹕の聲。……禁中御神樂の時おゝおゝと唱ふる式あるは。警蹕の聲とも云ひ。又天岩戸の前の諸神の笑聲を學べるなりとも云ふ。

おほい 大(形) おほきの音便。〔一〕大いなる。〔二〕位階の等級を定むる處の正。○「おほい三つの位」〔三〕官職の等級を定むる處の大。○「おほいすけ」(大輔)「おほいおほとも」(大辨)

おほね 荒(名) 草の名。●太藺に同じ。(和名抄)

おほひ 被(蓋。掩。覆(名) おほふ事。又おほふ物。

おほひば 覆羽(名) 鳥の身を覆ふ翼。○萬葉「天飛ぶや雁の翼の覆羽のいづく漏りてか霜の降

りけむ」

たほいに 大いに(副)　おほきにの音便。

おほいどの 大殿(名)　大臣の官にある人を呼ぶ尊稱。(源氏)

おほねどの 大炊殿(名)　禁裏にて飯を炊く御殿。

おほねりょう 大炊寮(名)　古代官廳の名。宮内省の所屬にて諸國御料地の稻田米穀の事。および諸司の食料分給の事を掌る所。●おほねのつかさ。

おほいぬ 獒(名)　犬の一種。大きくて力強きもの。

おほいおほともい (名)　古代の官名。大辨。……辨を見よ。

おほひがさ 被笠(名)　被笠に同じ。(夫木)

たほいなる 大いなる(形)　大きなるの音便。

おほねのかみ 大炊頭(名)　古代の官名。大炊寮の長官。

おほねのつかさ 大炊寮(名)　大炊寮に同じ。

おほいまちぎみ (名)　古代の官名。=大臣。

たほいまつりごとのたほいまうちぎみ (名)　古代の官名。太政大臣。(和名抄)

おほいまつりごとのつかさ (名)　古代官廳の名。太政官。(和名抄)

おほいこ 大い子(名)　一番の兄。又は姉。(大和)

おほいき 大息(名)　大きなる息。●溜息。

おほいぎみ 大い君(名)　一番の姉君。(雅)

おほいみやつこ (名)　古代の官名。大領。

おほいまうちぎみ (名)　古代の官名。=大臣。(和名抄)

おほいものまうすつかさ (名)　古代の官名。大納言。(和名抄)

おほいすけ (名)　古代官廳の次官。……すけを見よ。

おほからうか 大廊下(名)　江戸城にありたる座敷の名。將軍家の親族なる大名の着座せし所。

おほば 祖母(名)　大母の意。◎父母の母。●祖母。●ばゝ。

おほばば 大幅(名)　織物などの幅の廣きもの。……本綿幅。半幅などに對して言ふ。

おほばち 大蜂(名)　虫の名。山蜂。

おほばらひ 大祓(名)　(一)昔し百官人民の罪穢を祓ひ清むるため六月晦日と十二月晦日とに行はせられたる朝廷の儀式。(二)後世は神社に於て右の目的を以て神官の行ふもの。

おほばらへ 大祓(名)　おほばらひに同じ。

おほらめ 大原女(名) おばらめに同じ。

おほがばん 大鷸(名) 鳥の名。鷸の一種にして。形大きく脚短く。雄は額に白き瘤あるもの。又川鳥ともいふ。

おほばん 大番(名) (一)鎌倉時代の制。諸國の武士の京師を守護するもの。(二)大番組。

おほばん 大判(名) 德川時代金貨の名。形小判に同じく價は小判十枚にあたる。

おほばん 大版(名) 大形なる版本にて摺りたる本。

おほばんがしら 大番頭(名) 大番組の頭役。

おほばんぐみ 大番組(名) 德川時代の制。京都・江戸、大坂三城の番をする武士。

おほばんせき 大番席(名) 德川時代の旗下の格式の名。俸祿百俵以上二千石未滿のもの。

おほばこ 車前草(名) 草の名。路傍などに生ずるもの。葉は飯櫃形にて。春の頃小さく青白き花咲く。

おほはしりう 大橋流(名) 假名書法の流派。石川丈山の弟子大橋長左衞門の始めたるもの。

おほに (副) 大よそに。●なほざりに。(二七)

おほにはに 大庭(名) (一)大きなる庭。(二)禁中の庭。

おほにへ 大贄(名) つと。●あらまき。(和名抄)

おほがにへ 大賀(名) だいじゃうゑを見よ。

おほぼとけ 大佛(名) だいぶつ。

おほどり 大鳥(名) (一)鳥の名。鸛。(二)鳥の名。鵬。(三)風俗歌の曲名。

おほどりの 大鳥の(枕) 羽にかゝる枕詞。○萬葉「大鳥の羽易の山に」

おほどりあゆみ (名) 大股に歩む事。○謠曲「おほどりあゆみにゆらりくゝと出でたる有樣」

おほどる (自動下二段又四段) (一)散り亂るゝ。●亂れほびこる。○源氏「髮のすその俄におほどれたるやうにしどけなくさへそがれたるを」萬葉「葛花にはひおほどれる葛かづら」(二)おほどくに同じ。○源氏「大路近き處におほどけたる聲して」

おほどほり 大通(名) 市中の大なる道路。●大路。●大道。

おほどか おほまか。●おほやう。●寛大。△(形)ーおほどかなる。(副)ーおほどかに。

おほどねり 大舍人(名) 古代の官名。禁中の宿直、警固、および節會の時諸官を召す等。すべて

おほとねりれうの つかさ　大舎人寮(名)　古代官廳の名。中務省の所屬にして宮中驅使の事を掌る所。頭、助、允、屬の官吏あり。●おほとねりのつかさ。

驅使の事を掌る役。

おほとねりれう　大舎人寮(名)　おほとねりれうを見よ。

おほとなぶら　大殿油(名)　おほとのあぶらの約。◎禁中、殿中などに燈す燈火。(雅)

おほどう　大胴(名)　大鞁(おほつづみ)の一名。

おほとの　大殿(名)　〔一〕大なる殿。〔二〕貴き人。●大臣。〔三〕武家にては若殿に對して其父また隱居せる人をいふ。

おほとのほがひ　大殿祭(名)　宮殿の災なからん事を祈るため昔し禁中にて毎年二度神今食(じんこんしき)と新嘗祭との翌日に行はれたる祭。

おほとのごもり　大殿籠(名)　大殿籠る事。

おほとのごもる　大殿籠(自動四段)　寢るの敬語。●大殿に籠りて寢る。●御寢(ぎょしん)なる。●御やすみになる。

おほどく　(自動四段。又下二段)　おほやうである。●取締なくある。●あまねる。○源氏「いとあまりおほどき給へりけるこそは」「おほとけたる聲」

おほどこ　大床(名)　棺を載する臺。(和名抄)

おほとし　大年(名)　〔一〕御即位ありて大嘗會の行はるゝ年をいふ。●元年。(紀)〔二〕年の最終の日。大晦日。

おほともひ　(名)　古代の官名。辨(べん)。(和名抄)

おほとびと　(名)　古代の官名。侍從。

おほともの　大伴の(枕)　御津高師の枕詞。續きたる意味は古來諸説あれど詳ならず。○萬葉「大伴の御津の濱なる忘貝」「大伴の高師の濱の松が根を」

おほぢ　祖父(名)　大父の意。◎父母の父。●祖父(そふ)。●じゝ。

おほぢがふぐり　(名)　螳螂の巣。(和名抄)

おほぬさ　大幣(名)　大祓の時陰陽師または神官の持つ串に差したる幣。祓の式終れば人々之を引き寄せて身體を撫で川に捨つるなり。○古今「大ぬさと名にこそ立てれ流れてもつひによる瀬にありてふものを」

おほぬさの　大幣の（枕）　引く手あまたの枕詞。大ぬさの處にいへる如く人々の諸方より引き取るものなれば云ふ。○古今「大ぬさの引く手あまたになりぬれば思へどねこそ頼まざりけれ」

ををる　（自動四段）　咲き亂る。●爛熳と咲く。○萬葉「春されば花さきをゝり」「春さればをゝりにをゝり」

おほを　大魚（名）　大なる魚。

おほを　大尾（名）　大なる尾上。●峯。○記「こもりくの初瀬の山の大尾には」

おほを　條（名）　鷹の足に着くる緒。（和名抄）

おほをば　大伯母。大叔母（名）　祖父母の姉妹。

おほをば　大祖母（名）　祖父母の母。●曾祖母。

おほをぢ　大伯父。大叔父。（名）　祖父母の兄弟。

おほをぢ　大祖父（名）　祖父母の父。●曾祖父。

おほをば　大祖母（名）　祖父母の母。●曾祖母。おほおばば。（和名抄）

おほをぢ　大祖父（名）　祖父母の父。●曾祖父。

おほあふぎ　大扇（名）　古へ天皇出御の時。女官が左右より玉體に差し懸け奉りたる長柄の扇。

おほおよび　拇指（名）　指の中の大なるもの。●おやゆび。（和名抄）

おほをそどり　（名）　大きなる鴉を言ふ鳥の意にて烏を憎みて云ふ詞。烏はころくゝと鳴けど來る人もなしとてなり。○萬葉「烏てふ大なそ人のまさでにも來まさぬ君をころくとぞ鳴く」

おほおみ　大臣（名）　上古大連と並びて朝政を執りたるもの。……此役は臣連の姓の人が之に任ぜらるゝ定なりしかば。たゞ姓の上に大の字を附けて尊びたるが官名となれるなり。かくておのづから臣は相となりて文の政を掌り。連は將となりて武の政を掌るに至れり。

おほわ　大輪（名）　車の外圍の輪。（和名抄）

おほわた　大海（名）　海。●大洋。

おほわらひ　大笑（名）　（一）大に笑ふ事。●高聲に笑ふ事。（二）世の笑ひ草となる事。

おほわらは　大童（名）　軍中にて頭髮を振り亂したる姿●亂髮。○謠曲「兜も打ち落されて。大童

おほか　綫車(名)　蠶より糸を繰り取る車。(和名抄)

おほが　大鋸(名)　大きなる鋸。●おが。●ががり。

おほがひ　頁(名)　大貝の意。漢字の傍の名。順、項、頰などの右の部分。

おほがひながひ　大峽小峽(名)　大きなる谷間と小さき谷間と。○祝詞式「大峽小峽に立てる木を」

おほがり　大雁(名)　鳥の名。ひしくひの一名。

おほかは　大革(名)　大皷(おほつづみ)の一名。

おほがたどの　大方殿(名)　(一)將軍の母をいふ。(二)轉じては其家の主人の母を尊びて云ふ。

おほかた　大方(副)　(一)十中の八九まで。●大概。●大略。●大よそ。●あらかた。(二)一般に。●通例に。●廿間直に。●なほざりに。

おほがね　大鐘(名)　釣鐘。

おほがね　大金(名)　多額の金錢。●大金。

おほがねもち　大金持(名)　大金を所持する人。●大金滿家。

おほからし　大芥子(名)　野菜の名。菘(たかな)の一名。

おほかり　大雁(名)　鳥の名。鷗の一名。

おほかむつみ　(名)　桃の木を神としていふ尊稱。……記に曰く「伊邪那岐命(いざなきのみこと)、桃にのりたまはく。汝吾を助けしがごと。葦原の中つ國にあらゆる顯しき青人草の憂き瀨に落ちて苦しまむ時に助けてよ」とのりたまひて。大神づみの命といふ名を賜ひき」

おほがさ　大笠(名)　大きなる笠に柄を附けて雨の降る時などさしかざすもの。○落窪「大笠を二人さして」

おほかみ　狼(名)　獸の名。形犬に似て深山に住み。時によりては人をも害する猛獸。●山犬。

おほかしはで　膳部(名)　大膳職(名)　大膳職の官人。

おほかしはでのつかさ　よ。

おほやう　大樣(名)　こせつかぬ事。●おほまか。△(形)—おほやうなる。(副)—おほやうに。

おほやう　大樣(名)　大方。●多分。●大概。○徒然「しやせましせずやあらましと思ふことはおほやうせぬをよしとす」

おほよそ　大凡(副)　大方。●大要。●大畧。●大抵。●大概。(又)—おほよそに。△(形)—おほ

よその。

おほよそごろも（名）　大裝衣の略。◎晴に着飾りたる衣。○神樂歌「宮人のおほよそごろも膝遠し着のよろしもよ大よそ衣」

おほよびと　大凡人（名）　普通の人。●凡人。

おほよめ　大嫁（名）　兄の嫁。（和名抄）

おほだいこ　大太鼓（名）　樂器の名。〔一〕樂太鼓の大なるもの。高き臺の上に据ゑて庭上の舞樂に用ふるもの。〔二〕桶に革を張りたる如きものにて横に打つ太鼓。……小太鼓に對して云ふ。

おほたか　大高（名）　大高檀紙の略。

おほだから　大寶（名）　おほみたからに同じ。●人民。●國民。（和名抄）

おほたかだんし　大高檀紙（名）　紙の名。檀紙の一種にして上品なるもの。地厚くして松の皮の如き皺あり。

おほたてあげ　大楯揚（名）　武具の名。脛當の一種にして鐵板三枚もて作れるもの。

おほぞら　大空（名）　空。●みそら。（歌詞）

おほざう（名）　表向。●おもだちたる事。●大かた。●なほざり。●一通り。△（形）—おほざうの。—おほざうなる。○源氏「今はかうおほざうの住居ならでのどやかに行ひをもとなん思ふに」（副）—おほざうに。○源氏「かやうにおほざうに打ち散し置き給ふべくもあらず」

おほそで　大袖（名）　〔一〕冕服の一名。〔二〕鎧の袖。

おほつぼりう　大坪流（名）　馬術の流派の名。大坪道禪の始めたるもの。

おほつち　大地（名）　地球。●國土。

おほづつ　大筒（名）　大砲。

おほつづみ　大鼓（名）　樂器の名。鼓の一種。左の脇に抱へ右の手にて打つもの。

おほつごもり　大晦日（名）　年の最終の日。●大年。●おほみそか。

おほつゑ　大津繪（名）　一種の狂畫にして「鬼の念佛」「藤娘」などの類を畫がきたるもの。

おほづめ　大詰（名）　大切を見よ。

おほね　大根（名）　野菜の名。だいこんの雅名。

おほねむし　蝗（名）　大稻虫の意。◎いなむしに同じ。（和名抄）

おほな 大名(名) 總名。

おほなおほな (副) おふなおふなに同じ。

おほなほみ (名) 大直日に同じ。

おほなほび 大直日(名) 神の名。世の凶事を吉事に取直す事を掌る神。……大禍津日神の反對。

おほなかぐろ 大中黑(名) 矢の羽の一種。上下白くして中の大きく黑きもの。

おほなめ 屎背(名) 馬具の名。肌付の古名。

おほなめ 大嘗(名) おほなめまつりの略。

おほなご 凡子(名) なみ〳〵の人の子。●賤の子。○萬葉「おほなごが遠方野邊に刈る萱の束の間だにも我忘れめや」

おほなめまつり 大嘗祭(名) だいじゃうゑを見よ。

おほなみ 大浪(名) 〔一〕大なる浪。〔二〕つなみ。

おほらか (名) 澤山。●大きやか。●大やう。△(形)—おほらかなる。(副)おほらかに。○宇治「飲酒くだものごもなどおほらかにしてたべ」

おほん (形) 大御の音便。

おほんべ (名) おほにへの音便。大嘗會。

おほんどのごもる 御殿籠(自動四段) おほとのごもるに同じ。

おほむかし 大昔(名) 昔の昔。●太古。上古。

おほんぞ (名) 大御衣の音便。●天皇の御衣。

おほむね 概(副) 要するに。●大凡。●大略。●大體。

おほむらじ 大連(名) 上古の官名。連の姓に大の尊稱を加へたるもの。……大臣を見よ。

おほむぎ 大麥(名) 穀物の名。麥に同じ。……小麥に對していふ。

おほふ 被。蓋。覆。庇。掩(他動四段) 上より物を冠らする。●おほひをかくる。●隱す。●包む。●まもる。●かばふ。

おほうち 大內(名) 內裡。●禁裡。●御所。

おほうちぼん 大內本(名) 板本の種類。足利時代に大內義隆の明國に紙を送りて摺らしめたる漢籍。

おほうちき 大褂(名) 古代衣服の名。大きく仕立てたる褂。他人に祿として贈與するためのもの。……うちきを見よ。

おほうちぎり 大內桐(名) 模樣の名。五三の桐。

おほうちびし 大內菱(名) 模樣の名。花菱の一種。

おほうを 大魚(名) 海魚の大なるもの。

おほうたどころ 大歌所(名) 古代官廳の名。宮內省の

所屬にして朝廷の式樂歌曲など掌る所。

おほうなばら 大海原(名) 海原に同じ。大海。●大洋。

おほうみ 大海(名) 廣く大なる海。●大海原。●大洋。

おほうみのはら 大海の原(名) 大海原に同じ。

おほうみのも 大海の裳(名) 波、魚などすべて海中の有樣を模樣にせる裳。……海部を見よ。

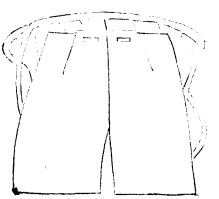
おほのろ (名) ろは助辭。大きなる野邊。(萬葉東歌)

おほのか おほどか。●ゆたか。●しづか。(形)—おほのかなる。(副)—おほのかに。

おほくにだま ●大國魂(名) 大國御魂に同じ。

おほくにみたま 大國御魂(名) 大國主神の荒魂。大和に鎮座し給ふもの。○萬葉「大和の大國御魂。久堅の天の御虛ゆ。天がけり見渡し給ひ」

おほくち 大口(名) 袴の名。三種あり左の如し。(一)束帶の時表袴の下に着するもの。生絹、平絹にて作り通例は赤色。老人は白色を用ふ。●赤大口。●白大口。(二)又前を太き糸にて織りて張り出だすやうに作れるもの。古代公家の服裝の一つ。●前張の大口。(三)武家にて直垂の袴の下に着する袴。また鎧の下にもはく。白色の精好にて作り。後ろの方より腰の下まで糸を太く織らせて外へ張り出づるやうにしたるもの。能裝束の大口は之に屬す。……貞丈雜記に曰く「大口を着れば後ろの方張り出でゝ大に口あくなり。今世束帶の時用ふる赤大口といふものは大きに口あくものにはあらず。赤大口といふもの。後代の喝へ違へにて別古名あるべし」(圖)



おほぐち 大口(名) 大きく口を開く事。●大言。

おほくちの 大口の(枕) 眞神の枕詞。まがみは狼の異名にて口の大きなるものなれば續く。○萬葉「大口の眞神の原に降る雪は」

おほくらだいじん 大藏大臣(名) 現今の官名。大藏省の長官。昔の大藏卿。

おほくらのかみ (名) 官名。大藏卿に同じ。

おほくらのつかさ (名) 官廳の名。大藏省に同じ。

おほくらきやうきょう 大藏卿(名) 昔の官名。大藏省の長官。今の大藏大臣。

おほくらしやうしょう 大藏省(名) 官廳の名。〔一〕古代の制。八省の一つ。諸國の租稅を掌る所。卿、大輔、小輔、丞、錄の官吏。〔二〕現今の制。租稅、國債、造幣等。國家財政の事を掌る所。大臣之が長たり。

おほぐけ (名) 縫針の一種。大きなるくけばり。

おほぐひい 大食(名) 大に食ふ事。●たいしょく。

おほくび 大領(名) 衣類の名所。おくび。●おくみ。

おほや 大屋(名) 〔一〕本屋。●おもや。〔二〕貸家の主。●家主。〔三〕貸家を扱ふ人。●支配人。

おほやまれんげ 大山蓮華(名) 木の名。木蓮の一種。

おほやまづみ 大山祇(名) 山を掌る神の名。

おほやけ (名) 〔一〕(大宅)大なる建物。●官の家屋。〔二〕官。●朝廷。〔三〕天皇。〔四〕(公)官に關する事。●役所向。〔五〕(公)表向。●公然たる事。●公平なる事。公衆に關する事。

おほやけばら 公腹(名) 我一個人のためにあらずして世間のために發する立腹。○紫日記「すゞろに心やましうおほやけばらとかよからぬ人のいふやうに憎くこそ覺えしか」

たほやけどころ (名) 朝廷。●官廳。

おほやけがた 公方(名) 公事に關する事。●役向の方。

おほやけごと 公事(名) 〔一〕禁中にて行はるゝ政事儀式などの總稱。〔二〕公然たる事。

おほやけざた 公沙汰(名) 其筋に訴へ出づる事。●表沙汰。●裁判沙汰。(俗)

おほやけし (形。形狀言シク活) 官の事らしい。●公事らしい。●公然らしい。○枕「是はたおほやけしう唐めいてをかし」

おほやけびと (名) 朝廷に仕ふる人。●官吏。●役人。

おほやしま 大八州(名) 我日本國の異名。即ち本土、九州、四國、淡路、佐渡、隱岐、壹岐、對馬。

おほやすみどの 大安殿(名) 禁中御殿の名。大極殿(だいたくでん)。

おほまか (名) 大やう。●大量。●寬大。●こせつかぬ事。△(形)—大まかな。(副)—大まかに。(俗)

おほまがとき 大禍時(名) 日暮の薄暗くなりたる時刻。此時刻には惡魔などの人家近くまで來て居る時とて恐るゝ風俗あり。

おほまつりごとのおほまうちぎみ (名) 太政大臣。(和名

抄）

おほまつりごとびと　（名）　古代の官名。參議。（和名抄）

おほまつぎみ　（名）　おほまうちぎみに同じ。●大臣。

おほまんどころ　大政所（名）　攝關の職にある人の母の尊稱。

おほまんぢうじころ　大饅頭鎹（名）　兜の鎹の一種。饅頭の如き形のもの。

おほまへ　大前（名）　〔一〕君前。●神前。●佛前。●靈前。〔二〕又相對する人を尊んでも云ふ。○「何がしどの、大前に」

おほまへつぎみ　（名）　おほいまうちぎみに同じ。●大臣。

おほまします　（自動四段）　ましますに一層敬語を加へたる詞。●おはします。

おほけなし　（形。形狀言ク活）　身の程に過ぎたる。●過分なる。●不相應なる。○空穗「何のむくいにかありけん拙き身におほけなき心つきて」

おほけさ　大袈裟（名）　大形に同じ。△（形）―大袈裟な。（副）―大袈裟に。（俗）

おほぶり　大降（名）　雨雪などの大に降る事。

おほぶね　大船（名）　大なる船。

おほぶねのまくら　大船の（枕）　航海する時大船に乘りて居れば賴もしき故たのむに掛け。海を渡る意にてわたりに掛け。泊る意にて津守に掛け。海上をゆたかにたゆたひゆく物なればゆたたゆたふゆくら〳〵に掛け。揖取の意にて香取にも續けたり。○萬葉「大船の思ひたのみて」「大船の渡りの浦の」「大船のたゆたふ海に」「大船のゆたに思へらば」「大船のゆくら〳〵に」「大船の香取の海に」

おほふう　大風（名）　大やう。●尊大。●横柄。△（形）―大風な。（副）―大風に。（俗）

おほごと　大事（名）　大事件。●變事。

おほごゑ　大聲（名）　高聲。

おほごしょ　大御所（名）　將軍の隱居したるもの。

おほえり　大襟（名）　襟を廣く明けて着る事。

おほえなり　大江折（名）　折烏帽子の一種。

【圖】

おほて　大手（名）　城の表門。

おほがて　（名）父母の父。●親父。（榮花）

おほがあに　大兄（名）總領の兄。

おほがあどの　大安殿（名）吉代禁中大極殿の一名。

おほがあね　大姉（名）總領の姉。

おほがあらき　大殯（名）あらきを見よ。大は天皇の時に云ふ詞。

おほがあらめ　大荒目（名）鎧の縅し方の名。糸と糸との間を遠くしたるもの。○保元「白き唐綾を以て縅したる大荒目のよろひ」

おほがあやつび　大綾津日（名）神の名。大禍津日（おほまがつび）に同じ。

おほがさいばり　大前張（名）神樂歌の部門の名。宮人、木綿志天、難波潟、前張、階香取の五曲之に属す。

おほがざと　阝（名）漢字の一部分の名。邱、郎、郡などの右の部分。

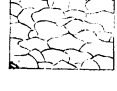
おほがざつま　大薩摩（名）大薩摩節の略。

おほがざつまぶし　大薩摩節（名）淨瑠璃節の一種。正保慶安頃の人薩摩太夫四郎左衛門。法名淨雲といふ人の語り始めたるもの。

おほがざけ　大酒（名）多量に酒を飲む事。●暴飲。●大酒（おほさけ）。

おほがさき　大先（名）上達部の先駈。（枕）

おほがさび　（名）立烏帽子、風折烏帽子に用ふる皺。〈圖〉



おほがき　大（形）〔一〕大きなる。〔二〕位階の等級を定むるところの正。○古今序「おほき三つの位（正三位）柿本の人麿」

おほがきに　大きに（副）大きく。●數多く。●甚しく。●極めて。●非常に。●最も。

おほがざり　大切（名）〔一〕大きく切る事。又其切りたる物。〔二〕芝居などの其日に演ずる最終の幕。●大詰。

おほがきおほいまうちぎみ　（名）太政大臣に同じ。

おほがきおとど　太政大臣に同じ。

おほがぎやうう　大形（名）事實よりは体裁の方が大きくゆる事。●大袈裟。△（形）—大形なる。（副）—大形に。

おほがきなる　大きなる（形）大きくある。●遠大なる。●宏大なる。●重大なる。●壯大なる。

おほがきんだちのつかさ　正親司（名）おほきみづかさを見よ。

おほがきさけゑ　大蚶氣繪（名）古代の笼の名。（江記）

おほぎさき（名）　先帝の御后。●皇太后宮。

おほきみ　大君（名）　〔一〕天皇陛下。〔二〕皇族の總稱。〔三〕諸王。

おほきみづかさ　正親司（名）　古代官廳の名。親王諸王の位階。其御母方の氏など總べて皇族名籍の事を掌る處。正、佑、令、史の官吏あり。●おほきんだちのつかさ。

おほきみの　大君の（枕）　御蓋（みかさ）の枕詞。御蓋とは天皇の御輿にさしかくる絹蓋（きぬがさ）の事なれば云ふ。○萬葉「大君の三笠の山のもみぢ葉は今日の時雨に散りか過きなむ」

おほきみのかみ　正親正（名）　古代の官名。正親司（おほきみづかさ）の長官。

おほきし　大（形。形狀言ク活）　おほき大きなるに同じ。

おほきもいり　大肝煎（名）　德川時代地方の役人。＝大庄屋に同じ。

おほゆか　大床（名）　大なる家屋。

おほゆあ　大湯坐（名）　ゆあびさを見よ。

おほゆみ　弩（名）　大きなる弓にて彈（はたき）にて引くやうになりたるもの。（和名抄）

おほゆび　大指（名）　手足の最も大なる指。●拇指。●親指。

おほめ　大目（名）　秤目にいふ詞。二百匁を一斤とするもの。

おほめつけ　大目附（名）　德川幕府の役名。老中の支配の下に諸大名の監督をなす役。

おほみ　大忌（名）　おほいみの略。◎新嘗會の時小忌衣を着けざる祭官の稱。

おほみ　大御（形）　大と御との尊敬を重れたる詞。……多くは天皇または神などに用ふ。○「大御代」「大御歌」

おほみは　大御母（名）　天皇の御母。●皇太皇后。

おほみたからたにほみたやのすめらみこと　（名）　太上天皇。

おほみたから　大御寶（名）　國民。●百姓。

おほみそか　大晦日（つごもり）（名）　年の最終の日。●大年。●大晦日。

おほみづ　大水（名）　洪水。

おほみら　大蓮（名）　蓮の種類。らっきゃう。

おほみのばら　大海の原（名）　おほうみのばらの略。

おほみのやり　大身鎗（名）　鎗の一種。身の長く大なるもの。

おほみや　大宮（名）　〔一〕神社の尊稱。〔二〕皇居。●御

所。●禁裡。〔三〕皇太后宮。〔四〕神樂の曲名。又催馬樂の曲名。

おほみやどころ　大宮所（名）　皇居の地。●御所。○萬葉「いにしへの大宮所みれば悲しも」

おほみやづかさ　大宮司（名）　昔し一神社の長たる神官。●大宮司。

おほみやのめ　大宮賣（名）　神の名。禁中八神殿に祭らるゝ神の一つ。平和親睦を掌り守る神。……天鈿女命の一名とも云ふ。

おほみやびと　大宮人（名）　朝廷官吏の總稱。

おほみけ　大御食（名）　天皇または神佛に供ふる食物。

おほみこと　大御言（名）　陛下の御命令。●勅命。

たほみこともちのつかさ　（名）　古代官廳の名。太宰府に同じ。（和名抄）

おほみあかし　大御明（名）　神佛に奉る燈明。（和名抄）

おほみあへ　大御饗（名）　禁中にて群臣に賜はる酒宴。

おほみき　大御酒（名）　天皇御飲料の御酒。

たたし　（形。形狀言シク活）　男らし。●猛し。●勇ましく。●雄壯なる。○源氏「心もちひ男々しくすくよかに」

おほし　（名）　藥草の名。大黃に同じ。（和名抄）

おほし　多（形　形狀言ク活）　充分なる。●多量なる。●多數なる。

おほし　（形）　大凡の。●通例の。（雅）

おほしほ　大潮（名）　地球と太陽と月球と一直線に並ぶ時に起る滿潮。●高潮。

おほしか　麋鹿（名）　獸の名。鹿に似て大きく寒地に住むもの。

おほしたつ　生立（他動下二段）　おほすに同じ。

おほじやうや　大庄屋（名）　德川時代地方の役名。庄屋の頭たるもの。●大肝煎。

おほしやうじ　大床子（名）　昔し禁中清涼殿畫の御座にある御食臺。こゝは午飯をめしあがる處にて殿上人之が陪膳を爲す。

おほしまりうおほびろま　大島流（名）　鎗術の流派の名。

大廣間（名）　〔一〕大きく廣き座敷。……大名の殿中にては議事堂などにあてたる處。〔二〕江戸城内にては格式高き大名にあらざれば列席し得ざりし一室。

おほびる　大蒜（名）　草の名。にんにくの古名。（和名抄）

おほひるめむち 大日靈貴(名) 天照大御神の御一名。

おほひれ 大比禮(名) 東遊即ち神樂歌の中の一曲。

おほひめ 大姫(名) 姉娘。(字治)

おほもと 大本(名) 物事の起源。●源因。●起因。

おほもん 大門(名) 正門。●表門。

おほまうちぎみ (名) おほいまうちぎみに同じ。●太政大臣。

おほせ 仰(名) 仰する事。●命令。●言付。

おほせい 大勢(名) 多數の軍勢。●多人數。

おほぜり 大芹(名) 〔一〕草の名。いたちのあし。〔二〕催馬樂の曲名。

おほせごと 仰言(名) 仰せの御言葉。

おほせぜき 大關(名) 相撲取の最上位。●關取。●關。

なほす (自動下二段) 終るに同じ。○紫日記「船にのりなほせたるを」

おほす 生(他動四段) 生ひ立たしむる。●そだつる。●養育する。

おほす 仰(他動下二段) 言ふの敬語。●言付らる。●命ずる。●のたまふ。

おほす 負(他動下二段) 負はしむる。●負擔せさする。

おほす (他動下二段) 終らしむる。●通す。●果す。

○「歩みおほす」「調べおほす」

おほすゐりゅう 大水龍(名) 古代横笛の名。材上天皇御宇の寶物。

おほすずかや 大鈴萱(名) 萱の一種。小判草に同じ。

なほり 終(名) 終る事。●仕舞。●果て。●最後。●終結。●結局。●末期。

なほりがき 尾張柿(名) 蜂屋柿の一名。

なほりだいこん 屋張大根(名) 尾張名産の大根。●宮重大根。

なほる 終(自動四段) 〔一〕限りとなる。●盡くる。●果つる。●終結する。〔二〕死ぬる。

おはさうず (自動上二段) おはしますの音便。○源氏「心もまどひて耻ぢおはさうず」

おはします (自動四段) 〔一〕おはすに同じ。〔二〕女用文にては「御坐候」の意。○「御うれしくおはしまし候」

おはす (自動四段) 居る。行く。來るの敬語。=サ變のおはすに同じ。

おはす (自動サ變) 居る。行く。來るの敬語。=四段のおはすに同じ。

おはす (助動四段。又サ變) 給ふに同じ。

をか 岡(名) 山の低きもの。●小高くして平らかなる所。

をか 陸(名) 陸地。●陸。○夫木「鳴海潟をゝをめぐりて行く人は都のつとに何を語らん」

をか (名) そば。●ばた。……己れ手を下さずして傍に見て居る時などに云ふ詞。(俗)

おが (名) 大鋸の略。

をがひィ 小峽(名) おほかひをかひを見よ。

おかひィこぐるみ (名) 絹布の衣服に身を纏はるゝ事。(俗)

をかぼ 陸穂(名) 畑に作る稻。●陸稻。

をかべ 岡邊(名) 岡のほとり。●岡の近所。

をかとこき (名) 豆腐。婦人の詞。

をかぢ 陸路(名) 草の名。桔梗の古名。

おかはッ (名) 陸より路。●くがぢ。

をがはッ 小川(名) 御厠の略。◎小兒の大小便をする桶。●おまる。(俗)

をがはら 牡瓦(名) 〔一〕小さき川。●こがは。〔二〕川に同じ。

をがみ 尾鏡(名) 瓦の一種。丸瓦。

おかた 御方(名) 〔一〕其人を指していふ敬語。○「あの御方はよいお人じや」(俗)〔二〕妻の敬語。

をかだ 陸田(名) 水の無き田。●畑。

おかたばうちやうう 御方庖丁(名) 庖丁の一種。泉州堺より產ずるもの。

をかたまのき (名) 〔一〕古今集に見えたる木の名。實物は詳ならず。〔二〕後には榊の異名として用ふ。○謠曲「をかたまの木の枝に。黃金の鈴を結びつけて」

をかつつじ 岡躑躅(名) 木の名。丹躑躅。

をかづら (名) 木の名。桂の一種。

をかづき 鼈甲(名) 獸の名。尾長く常に卷きて頭に被ぎ居るもの。

をがら 苧幹(名) 皮を去りたる麻の莖。●あさがら。

をがむ 拜(自動四段) をろがむの略。●膝を折り頭を低れて禮を爲す。●掌を合はせて神佛の前に禮を爲す。●ぬかづく。●拜禮する。

をかん 惡寒(名) 醫術上の詞。さむけ。

おがくづ 大鋸屑(名) 大鋸にて材木を挽きたる屑。

をがや 小萱(名) 萱に同じ。(歌詞)

おかげ 御蔭(名) 〔一〕神佛の冥助。●加護。〔二〕人の

おかげまゐり

引立て。●助力。●補助。●なさけ。

御蔭參(名)　六十一年目毎に行はる〻伊勢參宮。人毎に「おかげでさ、ぬけたさ」と歌ひ行く風あり。

おかげまゐりで

御蔭詣(名)　おかげまゐりに同じ。

なかごえ

岡越(名)　岡を越え行く事。又其道。○夫木「なかごえの路をくるしみ川添の飛鳥の方を行きてめぐらん」

ながさはらりゅう

小笠原流(名)　武家禮式の流派。足利義滿の時小笠原長秀の定めたるもの。

ながさはらびし

小笠原菱(名)　紋の名。三階菱の一名。

ながきつ

小垣内(名)　垣内に同じ。●垣の内。○萬葉「ながきつの廡梦ひきはし。妹なねの作り着せけん」

なかみ

岡見(名)　十二月晦日の夜にする古代風俗の一つ。顯昭曰く「十二月晦夜蓑笠を着て木の末に登り我家を見れば來る年の内にあるべき事の皆見ゆるなり。是を岡見といふなり」○堀川「言靈の覺束なさに岡見すと梢ながらに年を越すかな」

なかみ

岡見(名)　已れ手を下さずして。人の爲す事を見て居る事。●傍觀。(俗)

ながみ

男神(名)　(一)男體の神。(二)特には伊弉諾尊。

ながみ

拜(名)　拜む事。●拜禮。●禮拜。

おがみ

龍(名)　神の名。雨雪を掌る神。●龍王。●龍神。○萬葉「我岡のおがみにいひて降らせたる雪のくだけしそこに散りけん」

ながみうち

拜打(名)　太刀を頂上に戴き拜むやうなる手附をして敵を切る事。○謠曲「向ふ者をば拜み打ち」

おかみさま

(名)　他人の妻の敬語。

おかめ

(名)　お多福。●醜婦。

なかめ

岡目(名)　傍觀する目。(俗)

なかめはちもく

岡目八目(句)　圍碁に喩へていふ詞。◎自身局に當ると傍觀するとは八目の差ありとの意。

おかめざさ

(名)　笹の一種。五枚笹の一名。

なかし

(名)　能樂に云ふ詞。狂言師のする間の役。……間を見よ。

なかし

犯(名)　罪を犯す事。●犯したる罪。○著聞「をかしあるものならばあだにはあるまじきものを」

なかし

（形。形狀言シク活）〔一〕面白し。……我心の感情を主とする時。○徒然「和歌こそ猶なかしきものなれ」〔二〕美し。……人の容貌をいふ時。○紫日記「顏もかど〳〵しうあなをかしの人やとぞ見ゆる」〔三〕風流なる。●氣のきゝたる。●心にくし。……物事または他人の心に就きていふ時。○源氏「なかしき御贈物などあるべきをりにもあらねば」〔四〕笑ふべし。●笑ふに堪へたる。○榮花「なぐ是がなかしからん。物笑いたうしける女房たち多かりける宮かな」

おかし

（形。形狀言シク活）面白き意味のはおかしにて笑ふべき意味のはなかしなりといふ一說あるにより此假名を用ふる人もあり。……なかしな見よ。

なかじょうき

陸蒸氣（名）　瀛車。（俗）

なかしね

陸稻（名）　陸田に作る稻。●陸穗（なかほ）

なかび

（名）　岡邊。（萬葉）

なかひき

（名）　德川時代。捕吏の下役。●手先。●おかっぴき。

なかもち

岡持（名）　料理品など持運ぶに用ふる手の附きたる箱。

なかせ

苧持（名）　苧を卷きつくる持。

なかす

犯。侵。冒（他動四段）　爲すまじき事を爲す。●禁ぜられたる事を行ふ。●難き事を爲す。危險なる事を爲す。●凌ぐ。●奪ふ。●橫領する。●襲ふ。

おかず

（名）　飯の菜。●お菜（さい）。（俗）

およろひぎ

御鎧着（名）　主人の鎧を着て供する武家の從者。途中にても主人の緩急の事あらば之を着させん爲めの用意。

およぼす

及（他動四段）　及ばしむる。

およる

（自動四段）　寢るの敬語。●寢給ふ。○者聞「月なも御覽ぜでおよるなれば此御文まゐらするに及ばず」

およそ

凡（副）　おほよそに同じ。

およづれ

妖言（名）　誰いふとなく世間または人の身に起るべき未來の凶變を言ひ觸らす詞。○萬葉「およづれのたはことゝかも高山の巖の上に君がこやせる」

およな

（名）　おうなに同じ。●老女。

およぐ

泳（自動四段）　身を水上に浮べて進み行く。●

游泳する。●水をあびる。

およぶ 及(自動四段) 屆く。●達する。●行きわたる。

およぎ 泳(名) 泳ぐ事。●游泳。●水練。●水あび。

およし (副) 凡に同じ。

および (名) 指。○拾玉「およびを折りて數ふれば」

および 及(名) 及ぶ事。

および 及(接) と。●並に。●且つ。○「算術および圖畫」「官吏および人民」

およびごし 及越(名) 物を隔てゝ手を先に出だす事。○「盃をおよびごしにさす」

およずく (自動下二段) 小兒の漸々賢くなるをいふ。●智惠づく。●大人らしく見ゆる。源氏「若君のいと美しうおよずけ給ふまゝに」

おだひィに (名) おだやかに。●靜に。

おたいこ 御太鼓(名) 女帶の結び方の名。太鼓の胴の如くに丸くするもの。

おだひィし (形。形狀言シク活) おだしに同じ。○續後紀「たのもしくおだひしく」

をだ 小田(名) 田。(歌詞)

をだち 小太刀(名) 太刀。○萬葉「かきはきの小太刀取り佩き」

をだはワらぢヤヂョうちん 小田原提灯(名) 提灯の一種。小さく細長きもの。

をだはラらひヤヒョうぢヤヂョう 小田原評定(名) まとまらぬ相談。●ぐずくして捗取らぬ評議。◎後北條氏小田原籠城の時降參可否の評議の長引きて決定せざりし故にいふ。

小田刈月(名) 九月の異名。

をだかりづき 御寶(名) 一月二日の夜枕の下に入れて寢る寶船の繪。

おたから

おだつ (他動下二段) 人を誘ひて事をなさしむる。●煽動する。

おだやか 穩 しづか。●平安。●平和。●安穩。●柔和。●溫順。(形)—おだやかなる。(副)—おだやかに。

をだやもり 小田屋守(名) 田の庵の番人。

をだま 苧玉(名) へそに同じ。編みたる麻の毬の如く卷きたるもの。

おたまや 御靈屋(名) 貴人の靈を祀りたる所。●廟所。●靈廟。

をだまき 苧環(名) 苧玉に同じ。

をだまき (名) 枝も葉もなき枯木。○狹衣「谷深み立

つをだまきは我なれや思ふ心の朽ちて止みぬる」

をだまきむし

苧環蒸(名)　料理の名。麺類に鳥肉など加へ茶碗にて蒸したるもの。

おたまじゃくし

御玉杓子(名)　〔一〕杓子の一種。●先の丸きもの。〔二〕蛙の子。◎形お玉杓子に似たる故に云ふ。

をだけ

雄竹(名)　男竹(をとこだけ)に同じ。●眞竹(まだけ)。

をたけび

雄詰(名)　雄々しく叫ぶ事。(紀)

おたふく

阿多福(名)　〔一〕額と鼻と頤と低くして兩頰のみ膨れたる想像の女。●三平二滿。●おかめ。●お福。〔二〕之に似たる醜婦。

おたて

(名)　おだつる事。●煽動(せんどう)。

おだし

穏(形。形狀言シク活)　穏やかなる。○源氏「あばれに長き御心のほどをおだしき物に打ちとけ頼み聞ゆ給へる御有樣」

おたび

御旅(名)　御旅所の略。

おたびしょ

御旅所(名)　祭禮に神輿を置く所。●御假屋。

をれ

折(名)　折るゝ事。又折れたるもの。

をれ

(名)　舞樂の一返。……同じ曲を二返三返舞ひ返す事あるゆゑにいふ。○源氏「一をれけしきげかり舞ひたまふ」

おれ

(代)　〔一〕自身をいぶ。●己れ。●我。○著聞「おれが母にて候ふもの」〔二〕他人を罵りて云ふ。●汝。●貴樣。○宇治「おれは何事いふぞ」

をれば

折葉(名)　折れたる草葉。○五代「難波潟芦の折葉をおしわけて」

おれおれし

(形。形狀言シク活)　老耄したらしい。●ぼけたらしい。●氣の拔けたやうな。○源氏「もとよりおれ〳〵しき人の心にてはさかしく強ひてものたまはず」

をれかへる

折返(自動四段)　〔一〕折れては返り折れては返りする。●折れに折るゝ。○空穗「尾花をれかへりまれく」〔二〕舞樂の同じ曲を繰返し舞ふ。○空穗「ながすみの侍從落蹲舞ひて御階のもとに舞いでゝをれかへり舞ふ」

をれくぎ

打釘(名)　〔一〕折れ損じたる釘。〔二〕折り曲げたる釘。＝をりくぎに同じ。

をれこだる

(自動下二段)　同じ曲を繰返しつゝ亂れ舞ふ。○辨内侍日記「をれこだれ身をなきにな

して舞ひたり」

をれぎ 折木(名) 折れたる木。○夫木「御狩人奈須の夏野は心せよ高草がくれをれぎ伏すなり」

おれもの (名) おれ〳〵しく爲りたる人。○源氏「深きらうなきおれものも」

をそ 獺(名) 獸の名。かはうそ。

をそ (名) うそ。●虛言。(古)

おぞ (形) おぞしの略。おろか。○萬葉「おろのたはれを」「おぞや此君」

おそひ 襲(名) 物の上にかぶせる事。又は其物。●衣の上着。

をそろ (名) をそに同じ。虛言。(萬葉)

おそろし 恐ろし(形。形狀言シク活) 恐るべし。●驚くべし。●甚し。●意外なる。

おそば 遲齒(名) 生ゑ揃ひて後に出づる齒。●八重齒。

おそば 御側(名) 君の御側に仕ふる家來。●昵近。●近臣。●侍臣。

をそばふし (自動下二段) 子供のあまゆる。(落窪)

おそはや 遲速(副) 遲かれ速かれ。○萬葉「おそはやも汝をこそ待ため」

おそり (名) 恐れに同じ。○土佐「海賊のおそりあり」

おそる 恐(自動四段) 下二段のおそるの古格。○古今「且は人の耳におそり且は歌の心に耻ぢ」

おそる 恐。畏。懼(自動下二段) 勢の強きを見て氣後れのする。●おづる。●臆する。●氣遣ふ。

おそはる 魘(自動下二段) 夢中にて惡魔などに襲はれたる心地する。●うなされる。

おそれ 恐(名) 恐るゝ事。●氣遣ひ。●心配。

おそれいる 恐入(自動四段) 恐れ多く思ふ。●非を悟りて恐縮する。

おそれおほし 恐多(形。形狀言ク活) 尊嚴をけがすの恐れあるをいふ。●勿躰なし。

おそれながら (副) 恐れ多しとは思ふものゝ。●勿躰なけれども。

おそなはる (自動四段) 遲くなる。●延引する。●遲刻する。

おそなへ 御供(名) 神前に供ふる餅。●鏡餅。

おそう 御僧(名) 僧を尊びていふ詞。○謠曲「御僧に弔はれ申さんとてこそ」

おそふ 襲(他動四段) 覆ひかぶせる。●不意に攻め掛くる。●官職家業などを繼ぐ。

おそらくは (副) 或は。●若しくは。●多分は。●十

中の八九に。

おそぐつのゑ (名) 春書。●枕書。(著聞)

おぞましい (形。形狀言シク活) 〔一〕おぞしに同じ。にぶし。〔二〕恐ろし。

おぞけだつ (自動四段) 恐ろしさに身のふるはるゝ。●身の毛よだつ。●ぞっとする。

おそぶる (他動四段) 戸を開かんとて押して振り動かす。○萬葉「誰ぞ此屋の戸おそぶる」

おそぶらふ (他動四段) おそぶるに同じ。○記「少女の鳴すや板戸をおそぶらひ我立たせれば」

おそざくら 遲櫻(名) 春より後に咲く櫻。

おそざき 遲咲(名) 其時節より後れて咲く事。又其花。

おそぎ 遲衣(名) 衣の上着。(萬葉)

おそし 遲(形。形狀言ク活) 進みの鈍き。●時の後れたる。●のろい。●ぐずくする。

おぞし (形。形狀言ク活) にぶし。●のろし。●愚なる。

おぞし (形。形狀言ク活) おずしに同じ。恐ろし。●氣味のわるい。

おそしさま 御祖師樣(名) 佛法の信徒が其宗旨の元祖を尊びていふ詞。

をつ (自動上二段) 同じ事を繰返す。●初に復る。●もとにもどる。○撰集抄「杉村にをち鳴く時鳥の初音」

おつ 乙(名) 音樂上の調子。低音。……甲の對。

おつ 乙(名) 十干の第二番。きのと。

おつ (名) 變。●曲。●異。●妙などの意。△(形)—おつな。○「おつな眞似」「おつな風」(副)—おつに。○「おつに言ふ」(俗)

おつ 落(自動上二段) 高き所より低きに急に下る。●おちいる。●くだる。●さがる。●劣る。●衰ふる。●終結する。●手に入る。●漏るゝ。●逃ぐる。

おづ (自動上二段) 恐るゝ。●恐ろしく思ふ。

をっと 夫(名) をびとの音便。◎良人。●をとこ。

おっとりまく 追取卷(他動四段) 追っ詰めて取り卷く。

おっとりこむ 追取込(他動下二段) 追っ詰めて取り圍む。

おっとる (他動四段) 押し取るの轉。◎取るを強めていふ詞。○謠曲「落ちたる履をおっとって」

をっとせい 臘脂臍(名) 北海に住む海獸の名。形海獺(ふとかい)に似て其臍は藥に用ふるもの。

おつるうめ　落梅（名）　支那古代の笛の曲名。●落梅の曲。

おづおづ　（副）　おちながら。●おそる〳〵。

をっかい　越階（名）　順序を踏まず位階の進む事。△（動）—越階す。

おっかけおっかけ　追掛々々（副）　引續きて。●間斷なく。

をづかみ　（名）　僧の髪の手にてつかまるゝ程に延びたる事。●五分刈頭ほどの處。○義經記「法師なれども頭剃らねばをづかみがしらにおひたる」

をっそ　越訴（名）　順序を踏まず直に上官に訴ふる事。●直訴。△（動）—越訴す。

をつつ　現（名）　うつゝに同じ。●現在。●現今。○萬葉「古へゆ今のをつゝに」

をづつ　尾筒（名）　馬の尾を包む袋。

おっつけ　追附（副）　間もなく。●程なく。●直に。

をつねん　越年（名）　舊年を送り新年を迎ふる事。●年越し。

おって　追手（名）　追ひ行く人。●追ひ來る人。

おって　追て（副）　追ひて。●あとから。●後日。●後刻。

おっしゃる　（自動四段）　仰せらるの轉。◎のたまふ。●言はるゝ。（俗）

おないどし　同年（名）　同じ年の音便。◎同齢。

おなり　御成（名）　皇族、攝關、將軍家などの他行するを云ふ。

をながどり　尾長鳥（名）　鳥の名。鳳鳥の一名。

おながれ　御流（名）　貴人の飲みたる盃の殘滴。又其盃。

をながざる　尾長猿（名）　猿の種類。尾の長くして力强く身を支ふるに足るもの。

おなんど　御納戸（名）　染色の名。鼠を帶びたる藍色。

おなんどやく　御納戸役（名）　德川幕府の役の名。若年寄の支配にて納戸の財物出納の事を掌る役。

をなご　女子（名）　（一）女に同じ。（二）女の子。●童女。

おなじ　同（形。形狀言シク活）　異なる所のなき。●ひとしき。●一樣なる。●同一なる。●同樣なる。（二）同年號、同年、同月、同姓などの意に用ふ。○「同じき四年」「同じき三月廿五日」「同じき十日」「同じく五郎時致」

おなじく　同（副）　並に。●共に。○謠曲「御衣を賜はつて裳といふ物を參せ上げ候ふ云々。又雨露の御爲なれば。同じく笠を參らする」

おなじくはッ　同(副)　同じ事ならば。●成らう事ならば。●いっその事に。○後撰「あたら夜の月と花とを同じくは心知れらん人に見せばや」拾遺「櫻狩雨は降り來ぬ同じくは濡るとも花の陰に隱れん」

おらぶ　(自動四段)　大聲を出だす。●わめく。●どなる。○萬葉「天仰ぎ哭びおらび」

をん　(名)　雄鳥。●をす。

おむ　臆(自動ト二段)　臆する。●びくゝする。●おめる。

おん　恩(名)　めぐみ。●なさけ。

おん　音(名)　〔一〕聲。●音。〔二〕言語の發音。〔三〕漢字の原語のまゝの發音。……訓に對して。

おん　御(形)　尊稱形容詞の一つ。おほんの略。多く我國純粹言語の上に冠らせて用ふ。○「おんふみ」「おんかほ」「おんいで」「おんかへり」

おんゐ　恩威(名)　恩惠と威光と。

おんゐん　音韻(名)　音と韻と。

おんゐんがく　音韻學(名)　漢字の音と韻とを研究する學科。

おむろがき　御室柿(名)　柿の一種。京都御室邊に產するもの。

おむろやき　御室燒(名)　陶器の名。京都御室の名產。

おんばかせ　音博士(名)　古へ大學寮の官名。漢字の音を專門に研究する職。

おんばかせ　御佩刀(名)　太刀の尊稱。●みはかし。●御太刀。

おんばこ　(名)　草の名。車前草。

おんばう　御坊(名)　〔一〕墓を守る人。〔二〕火葬を取扱ふを業とする人。

おんと　音吐(名)　音聲に同じ。

なんど　溫度(名)　溫かさの加減。

おんど　音頭(名)　音樂。又は念佛。唱歌などのはじめに唱へ出だす人。

おんどとり　音頭取(名)　〔一〕音頭の役にあたるもの。〔二〕物事の主唱者。又誘導者。

なんどり　雄鳥(名)　をとり。●をす。

なんたう　穩當(名)　相當。●溫和。●柔順。△(形)—穩當なる。(副)—穩當に。

なんたう　溫湯(名)　熱湯と冷水との間の湯。中を得たる溫かさのもの。

おんどく 音讀(名) 〔一〕漢字を音にて讀む事。……訓讀に對して。〔二〕聲を出だして書を讀む事。……默讀に對して。

おんて 音調(名) 音聲の調子。●聲調。

なんりゃう 怨靈(名) 怨みを含みて死したる人の崇り。●怨念。●死靈。

なんりゃう 溫良(名) 溫和淳良なる事。●おとなしき事。△(形)—溫良なる。(副)—溫良に。

おんりつ 音律(名) 音樂の音調。●音樂。

なんる 遠流(名) 古代刑罰の名。流刑。●遠島。

なんわ 溫和(名) おだやかなる事。●中を得て程よき事。△(形)—溫和なる。(副)—溫和に。

なんが 溫雅(名) おとなしやか。●しとやか。●みやびやか。△(形)—溫雅なる。(副)—溫雅に。

おんかい 音階(名) 音樂上の音の高低を段階もてあらはしたるもの。

おんかた 御方(名) 〔一〕北の方。●奥方。●奥樣。○源氏「御方ははやう失せ給ひて」〔二〕御方の住む殿。○源氏「立ち出でゝ御方に入り給へれば」〔三〕住所の尊稱。御殿。○源氏「おの〳〵十にあまり給ひて後は御方異にて」

おんがく 音樂(名) 調子を合せて樂器を鳴らす事。●樂。

おんがへし 恩返(名) 恩に報ゆる事。●報恩。

おむかし (形。形狀言ノ活) 喜ばし。●うれし。○竟宴歌「いさをしの正しき道のおむかしさ」(自動四段) おむかしく思ふ。

おむかしむ 陰陽(名) 陰陽道の略。

おんやうはかせ 陰陽博士(名) 古代の官名。陰陽寮に屬して陰陽道の教授を掌る職。

おんやうだう 陰陽道(名) 〔一〕天文、曆數、卜筮等の事を研究する道。〔二〕之によりて人の身の吉凶を卜し。鬼神を使役し。祓、祈禱を爲す一種の術。

おんやうれう 陰陽寮(名) 古代官廳の名。天文曆數卜筮等の事を掌る所。

おんやうのつかさ 陰陽寮(名) おんやうれうに同じ

おんやうけ 陰陽家(名) 陰陽師に同じ。

おんやうじ 陰陽師(名) 〔一〕古代の官名。陰陽寮に屬して陰陽道の事を掌る職。〔二〕陰陽道を業として。鬼神を使役し。人の身の吉凶を

をんたい

トし。祓新禱を爲すもの。

溫帶(名)　地理學上の詞。寒帶と熱帶との間にありて南北共緯度二十三度二十八分より六十六度三十二分に至る間の處をいふ。其南にあるは南溫帶。北にあるは北溫帶の名あり。

おんたらし

御多羅枝(名)　おにたらしを見よ。

なんだん

溫暖(名)　時候のあたゝかき事。●春三四月頃の陽氣。

おんたく

恩澤(名)　めぐみ。●恩。

おんぞ

御衣(名)　衣服の敬語。●みぐ。●おめし。

おんぞうし

御曹司(名)　まだ部屋住にて家督相續せぬ若殿。……始は堂上公卿の子息の稱なりしが後は源氏嫡流の子息に云ふ事と爲る。

なんねん

怨念(名)　恨の念慮。●怨む心。●執念。

おむな

嫗(名)　年老いたる女。●おうな。

なんな

女(名)　〔一〕女性の人。●少女。●婦女。●女性。●婦人。●をみな。●をうな。●をなご。●め。●めのこ。〔二〕妻。〔三〕情婦。〔四〕下婢。

おんな

嫗(名)　おうなに同じ。

をんたいふ

なんなべや

女部屋(名)　侍女などの居る室。女中部屋。

なんなだふかう

女踏歌(名)　昔し禁中にて正月十六日に公事として行はれたる女の踏歌。……男踏歌を見よ。

なんなおや

女親(名)　母。●母親。

なんなどころ

女所(名)　女官の詰所。(源氏)

なんなわらは

女童(名)　女の童。●童女。

なんなわざは

女孺(名)　にょじゅに同じ。

なんなわざ

女業(名)　女子の所行。

なんながた

女形(名)　芝居にて女の役をする役者。

なんながた

女方(名)　〔一〕女の身に取りての方。○源氏「女方も心あわたゝしけれど」〔二〕女の居る所。○源氏「女方にぞおはします」

なんなかうむり

女冠(名)　婦人に賜はりたる位階。

なんながく

女樂(名)　婦人のみにて奏する音樂。(源氏)

なんながみ

女神(名)　女神に同じ。神女。

なんながみゆひ

女髮結(名)　女の髮を結ふを業とする事。又は其人。

なんなだいふ

女太夫(名)　遊藝を業とする女。

なんなだより

(名)　女にて依賴すべき人。○宇穗「は

なんなづかひィ　らからなごをこそなんなだよりとはすれ」

女使(名)　加茂、春日等の祭に發向せしめらるゝ女の勅使。内侍の人之を勤む。

なんなぐるま　女車(名)　〔一〕女の乘れる事。〔二〕女の乘る料の車。

なんなぐさ　女草(名)　草の名。川芎の一種。

なんなぶり　女振(名)　女たるの風采。●女としての容貌。

なんなぶみ　女文(名)　女同士やりとりする手紙。(源氏)

なんなご　女子(名)　〔一〕女の子。●むすめ。○土佐「此家にて生れしなんなごの」〔二〕女。

なんなごんり。リコう　女今良(名)　女官の御殿を掃除する下女。

なんなゑ　女繪(名)　〔一〕女がかきたる書。〔二〕女をかきたる畫。●美人畫。

なんなで　女手(名)　假名の文字。●女文字。○大鏡「大貳にも劣らぬなんなでかきにて」

なんなあるじ　女主(名)　〔一〕其家の妻。●主婦。〔二〕女にて一家の主たる人。●女戸主。

なんなざか　女坂(名)　神社に參詣する道の險しからぬやう斜に附きたる坂。……眞直にて險しき石階を男坂といふ。

なんなざんまい　女三昧(名)　好色の行爲。

なんなめ　(名)　姿。●めかけ。

なんなし　(形。形狀言シク活)　女らしい。○源氏「いとあてに女しう」

なんなものぐるひィ　女物狂(名)　發狂せる女。●狂女。●女氣違。(謠曲)

なんなもじ　女文字(名)　假名文字。●女手。

おんらい　恩賴(名)　みたまのふゆ。●神の與へ給ふ恩。

おんくん　音訓(名)　漢字の音讀と訓讀と。

おんけい　恩惠(名)　めぐみ。●なさけ。●慈愛。

なんけつどうぶつ　溫血動物(名)　動物學上の詞。冷血動物に對して溫き血を持ちたる動物をいふ。

なんげん　溫言(名)　溫和なる言語。

おんぷ　音符(名)　音樂上の聲音を表示する記號。♩♪♫の類。

おんぶつ　恩物(名)　幼稚園にて使用する玩具。

なんこ　溫故(名)　故きを溫ぬる事。

おんこ　恩顧(名)　御顧を蒙る事。●深きなさけを受く

る事。●曇貧にさるゝ事。

おんごんの 慇懃の(形) いんぎんなるに同じ。れんごろなる。○謠曲「釋迦大師のおんごんの教」

なんこう 溫厚(名) 溫和にして篤實なる事。△(形)—溫厚なる。(副)—溫厚に。

なんごく 遠國(名) 遠き國。●遠國。

なんごくぶぎょう 遠國奉行(名) 德川幕府の制。諸國に出役したる奉行の總名。

おんてん 恩典(名) なさけある所置。

おんでん 隱田(名) 公に告げずして租稅を免れ居る隱し田地。

なんでき 怨敵(名) 怨みある仇敵。●怨讐。

おんあい 恩愛(名) 恩惠と愛情と。●父子夫婦などの愛情。●濃なる愛。

なんき 溫氣(名) 溫暖なる氣。●暖氣。

おんぎ 恩誼(名) 恩惠と情誼と。●なさけ。

おんきょう 音響(名) 音響。●ひゞき。

おんぎょく 音曲(名) 音樂に合せて唄ふ歌曲。……おちに俗曲に云ふ。

おんきん 恩金(名) 恩誼にて貸しくれたる金。●恩借の金。●恩賜金。

おんきゅふ 恩給(名) 功勞によりて其筋より賜はる給與金。

おんみ 御身(代) 其許。●貴殿。●おまへ。

おんし 御師(名) おしに同じ。

おんし 恩賜(名) 主君より物を下し賜はる事。又其賜物。●拜領。

おんしょう 恩賞(名) 賞品を下し賜はる事。●褒美。●賞與。

おんじょう 音聲(名) 人の聲。=おんせいに同じ。

なんじょうじ 園城寺(名) 古代の香の名。

なんしつ 溫室(名) 溫めたる部屋。●暖室。●むろ。

おんじん 恩人(名) 己れに恩を與へたる人。

おんしゃく 恩赦(名) 恩誼上より罪を赦す事。

おんしゃく 恩借(名) 恩誼上より貸しくれたる金。

なんじゃく 溫石(名) 燒きて布切などに包み病人などの身に添へて暖を取る石。●溫石石。

おんじき 飲食(名) 飲食物。(佛教)

おんじゅ 飲酒(名) 酒を飲む事。(佛教)

おんじゅかい 飲酒戒(名) 酒を飲むまじき佛法の禁戒。

おんじゅらく 飲酒樂(名) 雅樂の曲名。

なんじゅん 溫順(名) 溫和にして柔順なる事。●おとな

しき事。△(形)—溫順なる。(副)—溫順に。

なんしう 怨讐(名) 怨みある讐敵。●怨敵。

なんしふ 溫習(名) 復習。△(動)—溫習す。

なんびん 穩便(名) おだやか。●穩當。●穩和。△(形)—穩便なる。(副)—穩便に。

おんびん 音便(名) 語學上の詞。聲音の便宜上より或る音を他の音に轉じて發音する事。……「いもうと」は「妹人」の音便。「てうづ」は「手水」の音便といふの類。

おんもの (名) 玉佩を見よ。(和名抄)

おんものい 追物射(名) 犬追物の如き射方にする事。○盛衰記「おんものいにこそ射たりけれ」

おんせい 音聲(名) 人の聲。

おんせん 溫泉(名) (一)湯の湧き出づる泉。●出で湯。(二)溫泉場の略。●湯治場。

なんぜん 溫然(副) 溫和なる有樣。●餘裕ある有樣。●にこやかなる有樣。

なんせんば 溫泉場(名) 溫泉のある場所。●湯治場。

なんせんやど 溫泉宿(名) 溫泉場の宿屋。

おんす 弓(名) 英語より來る。◎秤の目方。我七匁五分四餘。

をう (感) 驚く聲。●やあ。○宇治「をうといひて逃げにけり」

をふ 苧生(名) 麻の生ねたる所。(歌詞)

をふ 終。卒。畢、自動下二段) 終る。●成就する。

おふ 追(他動四段) (一)先に行くものに及ばんとして走る。●おっかける。(二)船を走らす。○土佐「曉に船を出だして室津を追ふ」(三)追ひ拂ふ。●放逐する。

おふ 負(他動四段) (一)物を脊に載せて擔ふ。●脊負ふ。●しょふ。(二)其事の責を引受くる。●負擔する。

おふ 生(自動上二段) 生ね出づる。●生ずる。●發生する。●生育する。

あう 襖(名) (一)綿を入れたる衣。(二)古へ之を鎧にも代用せし事あり。戎衣といふ。(三)闕腋の袍の一名。

わう 王(名) (一)一國の君主。(二)皇族にて親王にも爲らず。又姓を賜はりて臣下にも爲り給はざるもの。(三)すべて物の頭。○「花の王」「獸の王」(四)將棋の駒の名。すなはち王位に擬したるもの。

わうゐ　王位(名)　帝王の位。
わうゐ　王威(名)　帝王の威光。●皇威。
わうろく　女王祿(名)　昔し正月十一日に禁中にて女王に祿を賜はりたる儀式。……女の字は讀まぬを習とす。
わうばい　黄梅(名)　木の名。梅に似て黄なる花咲くもの。
わうばん　椀飯(名)　〔一〕昔、人を饗するに用ひたる椀盛の飯。○盛衰記「酒着わうばんかきすゑて之を勸む」〔二〕椀飯振舞の略。○應仁記「今日十五日は山名の家の椀飯なれば嘉例の如く勤めらる」
わうばんぶるまひ　椀飯振舞(名)　正月に一家親族など會して開く新年の饗宴。
わうばく　黄蘗(名)　藥品の名。きはだ。
わうばくしう　黄蘗宗(名)　佛教の禪宗の一派。後光明天皇の御宇僧隱元の開きたるもの。
わうに　黄丹(名)　染色の名。椀に紅を加へたるもの。●わうたん。
わうにょ　王女(名)　〔一〕王の御息女。〔二〕女王に同じ。
わうにょ　皇女(名)　天皇の姫御子。
わうにょうご　王女御(名)　皇族より出でたる女御。
わうにんてい　皇仁庭(名)　雅樂の曲名。
おうほう　應報(名)　前世の所行に當る返報。●むくい。○「因果應報」(佛教)
わうほふ　王法(名)　國家の法律。……佛教の戒律に對して云ふ。
わうへい　横柄(名)　大威張。●横着。
おうへん　應變(名)　變事に臨みて適當に處分する事。
わうへん　往返(名)　往復。△(動)—往返す。
をうど　夫(名)　をっとに同じ。
おうど　嘔吐(名)　一度胃に入りたる物を吐き出す事。△(動)—嘔吐す。
おうど　首(名)　おびとに同じ。
わうど　黄土(名)　繪の具の名。赤みある黄色のもの。
おうたふ　應答(名)　返答。●應對。●挨拶。△(動)—應答す。
わうだう　王道(名)　帝王治國の大道。
わうだう　黄銅(名)　銅と亞鉛との合金。眞鍮に同じ。
わうだう　横道(名)　〔一〕正しからぬ道。●よこみち。●不道理。〔二〕横着。△(形)—横道なる。(副)—横道に。

あふち 楝(名) (一)喬木の名。楝樹。(二)重の色目の名。表薄色裏青。又表紫裏薄紫。

わうぢょ 王女(名) わうにょに同じ。

わうてうてう 王朝(名) 王朝時代の略。

わうてうじだい 王朝時代(名) 天皇の親ら政權を握らせ給ひし時代。歴史上特に大化革新より平家滅亡までの時代を云ふ。

わうちく 横着(名) 我儘。●得手勝手。●利己。△(形)—横着な。(副)—横着に。

わうりゃう 横領(名) 勝手に占領する事。●横取。△(動)—横領す。

あうりょうし 押領使(名) 古代の官名。諸國の兇徒反人を取り押ふる役。

おふをよし (枕) おふをは大魚。よしは助字。◎大魚の鮪とかゝる枕詞。○記「おふをよし鮪つく海人」

あうあう 快々(名) 樂しからぬ有樣。●鬱々。

わうわう 往々(副) 時々。●折々。●再々。●度々。

わうか 王家(名) 王室。●皇室。

わうが 狂駕(名) 來訪の敬語。

おうよる (自動四段) 奥の方へ寄る。●年の寄る。●昔の方に寄る。○枕「おうよりて三四人つどひて」源氏「御手の筋ことにおうよりにたり」

おうよう 應用(名) 事物に適する樣に用ふる事。●適用。●活用。△(動)—應用す。

おうだ 歐打(名) 人を打擲する事。△(動)—歐打す。

おうたい 應對(名) 問ひ答ふる事。●應答。●挨拶。△(動)—應對す。

わうだい 往代(名) 過ぎし代。●往昔。●往古。

わうたいはちんらく 皇帝破陣樂(名) 雅樂の曲名。

わうたん 黄丹(名) わうにを見よ。

わうたん 黄疸(名) 病の名。皮膚の黄色になるもの。

わうれん 黄蓮(名) 藥草の名。芹に似て白き花咲くもの。根を藥用とす。

わうそん 王孫(名) (一)天皇の御孫。(二)天皇の御子孫。

わうざう 皇璽(名) 雅樂の曲名。

わうぞく 王族(名) 帝王の御一族。●皇族。

わうねん 往年(名) 過ぎし年。●先年。●前年。

をうな 女(名) をんなに同じ。

をうを (感) 驚き叫ぶ聲。○宇治「我を殺す人あり

をうくとゞ呼びける」

おうな 嫗(名) おむなに同じ。老女。●婆々。

おふなおふな (副) それ相應に。●身の程につけて。○源氏「御心につくべき御遊びをしおふなおふなおぼしいたづく」

をうなご 女子(名) 〔一〕女の子供。○源氏「をうなごを生ふし立てん事」〔二〕女。○榮花「をうなごば形をこそと」

おうなし (形。形狀言ク活) 奥無しの意。◎奥底なく。●思慮なく。●分別なく。●ゆくりなく。●淺はかに。○とりかへばや「まだいと若くおうなくおはしますを」

わうらい 往來(名) 〔一〕往きと歸りと。●ゆき〻。△(動)—往來す。〔二〕人の往來する道路。●往還。

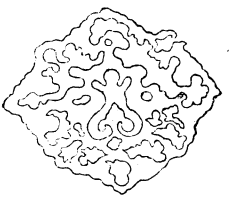
わうらい 往來(名) 〔一〕往復の意よりして書簡文の事に云ふ。○「商賣往來」「消息往來」〔二〕昔し旅人の關所を通る時に用ひし手形の如きもの。○謠曲「笈の中より往來の卷物一卷取り出だし」

あうむ 鸚鵡(名) 鳥の名。熱帶地方の産にて能く人の言語を眞似得るもの。

あうむはい 鸚鵡盃(名) 鸚鵡貝にて作れる盃。

あうむがひ 鸚鵡貝(名) 貝の名。白色に紫を帶びて鸚鵡の形に似たるもの。

あうむがた 鸚鵡形(名) 古代模樣の名。〈圖〉



あうむがへし 鸚鵡返(名) 人の贈りたる歌に似せて返歌する事。……阿彌陀佛に曰く「あうむがへしと云ふ事歌の返歌にあり。もろこしに鸚鵡と云ふ鳥は。人の物云ふ詞をまねて鳴く鳥なり。その如く人の方より來たる歌を。其内に文字一つ二つ取り替へて。我歌になして返しするを鸚鵡返しと申すなり。ある人通ひなれたる女房の所へ行きたれば。宮づかへの人の事にて其宿へ出で逢はざりければ。よみて其宿におくなり。知らせばや月うちふけて寒き夜に逢はで空しく歸る心を。とよみておけば。其次の朝。かの女房宿へ出で〻此歌

を見て。あうむがへしに爲せり。知らせはや月うちふけて寒き夜に逢はで空しく歸す心を。かやうに文字一二の間にて我歌になせり」

あうむのつき　鸚鵡杯(名)　あうむはいに同じ。

あうむのさかづき　鸚鵡の盃(名)　あうむはいに同じ。(謠曲)

あうむせき　鸚鵡石(名)　人の言葉など反響さする石。

わうのはな　王鼻(名)　假面の名。猿田彦神に擬して作れる鼻高きもの。

わうく　王化(名)　帝王の及ぼす化育。●王澤。

わうくん　王冠(名)　帝王の冠。

わうくわん　往還(名)　〔一〕往復。〔二〕公衆の往來する道路。

あうぐうらく　央宮樂(名)　雅樂の曲名。

わうけづく　王氣付(自動四段)　皇族の風采の備はりてある。○とりかへばや「若君の　とうつくしげにわうけづきておはしますを」

わうげふ　王業(名)　帝王の事業。

おうぶん　應分(名)　身分相當。△(形)—應分なる。(副)應分に。

わうぶん　横文(名)　横文字の文章。●歐文。

わうふく　往復(名)　往きと復りど。●往返。●文書のやりとり。△(動)—往復す。

わうこ　往古(名)　過ぎし時。●昔。●古。●往昔。

おうご　擁護(名)　神佛の加護。○謠曲「觀音擁護の結緣なり」

あふご　枋(名)　天秤棒。

わうご　往古(名)　わうこに同じ。(雅)

わうごん　黄金(名)　〔一〕鑛物の名。金。●こがね。〔二〕金貨。〔三〕金錢。

わうごんばい　黄金梅(名)　木の名。黄色なる花の咲く梅。

わうかう　横行(名)　勝手次第に歩き廻る事。△(動)—横行す。

おうゑん　應援(名)　加勢する事。●援兵を出す事。△(動)—應援す。

おふて　追手(名)　城の表門。●大手。

おうてんらく　應天樂(名)　雅樂の曲名。

わうてき　横笛(名)　よこぶえ。

わうさ　王佐(名)　帝王の輔佐たる事。又は其人。

あふさかの　逢坂の(枕)　關の意にてせき、せくなど

あふさきるさ

の枕詞。

（名）　左に餘れば右に足らぬの意。❀彼によければ此にあしきの意。○古今「そへにとてとすればかゝりかくすればあないひしらずあふさきるさに」

おうき

あふぎ

嘔氣（名）　嘔吐を催ほす事。❀吐氣。

扇（名）　竹などの骨に紙を張り要を附けて、開閉の出來るやうに作りたる團扇の類。夏暑き時扇ぐ具にも禮式の具にも歌舞などの具にも用ふ。

あうぎ

奥義（名）　藝術にて秘事とする奥の習。❀秘傳。❀一子相傳の傳授事。

わうぎ

黄耆（名）　藥草の名。夏の頃黄色の花咲く。其根を藥用とするもの。●異名は……木綿蔓（もめんづる）❀やはうぐさ。

あふぎなり

扇折（名）　扇を作る職工。❀扇師。

あふぎかけ

扇懸（名）　扇をひろげて柱などに掛け置くもの。

あふぎあはせ

扇合（名）　中古雅遊の一種。組を左右に分けおのゝ方より趣向を凝らしたる扇に歌など附けて持集り優劣を判斷するもの。

あふぎあみ

扇網（名）　扇の形に開く網。

わうきうぐう

王宮（名）　帝王の宮殿。❀王城。

あふぎびやうし

扇拍子（名）　扇を打ち鳴らして樂器に代用する事。

わうめい

あふみぢ

王命（名）　帝王の命令。❀勅命。

近江路（名）　（一）京都より近江へ行く街道。❀近江の道路。（二）催馬樂の曲名。

あふみなんな

近江女（名）　能面の名。女に用ふる物。

あふみおもて

近江表（名）　近江名産の疊表。

あふみかぶら

近江蕪（名）　近江名産の蕪。

あふみなべ

近江鍋（名）　近江名産の鍋。筑摩祭に用ふるもの。（堤中納言）

あふみぶり

近江振（名）　上古雅樂寮歌曲の名。（古今）

あふみぶし

近江節（名）　淨瑠璃節の一種。近江語齋の始めたるもの。

あふみもちひ

近江餅（名）　近江名産の餅。（堤中納言）

あふみすげがさ

近江菅笠（名）　近江名産の菅笠。●信樂笠。

をうし 牡牛(名) 牡の牛。●男姓の牛。
おふし 唖(名) 物言ふ事の出來ぬ不具者。
あうし 襖子(名) 襖に同じ。
あうし 奥旨(名) 奥義に同じ。
わうし 王師(名) 官軍。
わうし 横死(名) 非命の死。●變死。△(動)—横死す。
あふじ 押字(名) 名乘の字を草書にして自筆に書く事。自分自分のしるしに用ふ。
わうじ 王子(名) 〔一〕王の御子。〔二〕神の名。天照大神を御父伊弉諾尊に合せ祀る時の稱なりといふ。
わうじ 皇子(名) 天皇の御子。
わうじ 往時(名) 過ぎし時。●先年。●昔。
わうじ 往事(名) 過ぎし時の事。
おうしょう 應鐘(名) 十月の異名。
わうしゃう 王將(名) 將棋の駒の名。王たり將たる位に擬したるもの。
わうじゃう 王城(名) 帝王の居城。●王宮。●帝都。
わうじゃう 皇鑾(名) 雅樂の曲名。
わうじゃう 往生(名) 〔一〕此世を去りて極樂淨土に生るゝ事。(佛教)〔二〕轉じては死ぬる事。△(動)—往生す。
わうせいうくん 王昭君(名) 雅樂の曲名。
わうしつ 王室(名) 天皇の御家。●皇室。
わうじつ 往日(名) 先の日。●過日。●先日。
わうしゃ 王者(名) 帝王たる人。
わうじゃく 虚弱(名) 虚弱。●柔弱。○盛衰記「頼政わうじゃくの勢にて固めて候門を押し破り入れ奉りては衆徒御高名に候まじ」
わうじゃく 往昔(名) わうせきに同じ。(謠曲)
わうしき 黄鐘(名) 十二律の一つ。●音樂の調子の名。
わうしきでう 黄鐘調(名) 音樂の調子の名。
あうしゅくばい 鶯宿梅(名) 梅の異名。◎拾遺集に曰く「内より人の家に侍りける紅梅をほらせ給ひけるに。鶯のすぐひて侍りければ家のあるじの女まづかく奏せさせ侍りける。勅なればいともかしこし鶯の宿はと問はゞいかゞ答へん。かく奏せさせければほらずなりにけり」此故事によりての名。
おふしもと (名) 生ひたる若木の下。(萬葉)
わうせい 王政(名) 帝王の政治。

おうせつ 應接(名) 對面して談話する事。●對話。●面談。△(動)—應接す。

おうせつじょ 應接所(名) 應接する場所。●對面所。●面會所。

おうず 應(自動サ變) 〔一〕受け引く。●諾する。〔二〕答ふる。●返答する。〔三〕他の物事を鈞り合ふ。●適當する。●相應する。

あうひ 奥秘(名) 奥義に同じ。

をの 斧(名) 鉞の小なるもの。

おの 己(代) おのれの略。◎かの字の前に用ふるもの。●わが。●おれが。○「おのが心」「おのが言ふ事」

おのおの 各(代) 人々。●面々。●皆々。●諸君。●方々。

おのおの 各(副) 己々の意。◎何れも。●銘々。●一つ〳〵。●各自に。

をのわらはゥ 男童(名) 男の子供。●童男。

おのがよよ 己が世世(副) それ〳〵の社會々々に。●おの〳〵別々に。○後撰「汝の間にあさりする海人もおのがよよかひありとこそ思ふべらなれ」

おのがじし (副) 各自。●銘々。●おの〳〵思ふ儘に●自分自分の勝手に。○蜻蛉「おのがじしいきあかれぬ」△(形)—おのがじゝの。●おのがじゝなる。○源氏「おのがじゝの營み」貫之集「おく霜の心や分くる菊の花うつろふ色のおのがじゝなる」

おのれ 己(名) 自己。●自身。●自分。

おのれ 己(代) 〔一〕我。●余。〔二〕人を罵りて呼ぶ詞。●貴樣。●汝。○「おのれにくいやつめ」

おのづと (副) おのづからに同じ。(俗)

おのづから 自(副) 天然自然に。●しぜん。●ひとりでに。●たまさかに。

おのつま 己妻(名) 己が妻。●我妻。○萬葉「おのつまを人の里におきおほゝ〳〵く見つゝぞ來ぬる此道のわびだ」

おのら 己等(代) おのれらに同じ。我等。○空穗「女なるおのらだに」

をのゝく (自動四段) わなゝくに同じ。ぶる〳〵ふるへる。

をのこ 男子(名) 〔一〕男子。〔二〕男。〔三〕家の子。●郎黨。

なのこはらから　（名）　男兄弟。

なのこかんなぎ　男覡（名）　男神子（をとこみこ）に同じ。

なのこご　男兒（名）　男の子。●童男。

なのへェ　尾上（名）　峯の上。また山の尾の上。……尾を見よ。○「尾上の月」「尾上の櫻」「尾上の鹿」「尾上の霞」（歌詞）

おのもおのも　（副）　已もく〳〵の意。◎おの〳〵に同じ。（古）

なく　（他動四段）　招き寄する。●搖く。○萬葉「月立ちし日よりをきつゝ打ちしぬび待てど來鳴かぬ時鳥かも」

おく　奥（名）　〔一〕物事の深き處。●日元に遠き所。●隱れて容易に見ぬ所。〔二〕奥座敷。●奥向。〔三〕陸奥の地方。

おく　置（他動四段）　〔一〕其場に据ゑ付くる。●其場に在らしむる。〔二〕捨て置く。●差置く。○萬葉「飛ぶ鳥のあすかの里をおきていなば君があたりは見ねばすかもあらん」〔三〕心、耳、目などに留むる。●殘す。○枕「聞き置き給ひし事など仰せらる」佛足石歌「大丈夫の蹈み置けゐる跡は」〔四〕遠慮する。○古今「人に心をおさつしら波」〔五〕場所月日など中に隔つる。○「間を置く」「二軒置きて先の家」

おく　置（自動四段）　露霜の地上に留まる。

おく　起（自動上二段）　〔一〕臥したるものゝ立つ。〔二〕睡の覺むる。目覺むる。●床を離るゝ。

おく　億（數）　千万の十倍。

おくい　奥意（名）　奥義（おうぎ）。●奥の手。

なぐろ　小畔（名）　狹き畔。●田の畔。○散木「山里は晴れせぬ霧のいぶせきに小田のなぐろに鶉なくなり」

おくば　奥齒（名）　口の奥の方にある齒。

おくにかぶき　阿國歌舞伎（名）　古代歌舞伎の一名。◎出雲のお國が始めて演（をど）せし故にいふ。

おくどこ　奥床（名）　奥にある臥床。

おくてェう　億兆（數）　億と兆と。●非常に多き數。

おくり　送（名）　〔一〕送る事。〔二〕葬送。

おくりなさむ　（他動下二段）　葬る。○玉葉「はらからなる人の身まかりておくりなさめける夜」

おくりがな　送假名（名）　漢字に書き添ふる假名。……「學ぶ」「學びて」のぶびの類。

おくりな 諡(名) 死後其人を尊びて附けたる名。……天智天皇、貞信公、烈公の類。

おくりなす 諡(自動サ變) 諡を附くる。○「諡して文武天皇といふ」

おくりむかへェ 送迎(名) 送る事と迎ふる事。

おくりこむ 送込(他動四段) 送りて這入らしむる。(俗)

おくりこみ 送込(名) 送り込む事。

おくりてがた 送手形(名) 品物に添へて送る手形。● 送券。

おくりじゃうぅ 送狀(名) 品物を送る時に添ふる目錄書き。

おくりび 送火(名) 七月十六日の夜。盆祭に來り居たる亡者の靈魂の冥途に歸るを送るとて門邊にて焚く火。

おくりもの 贈物(名) 人に贈り與ふる品物。● 進物。

おくぬの 奥布(名) 昔陸奥より產したる一種の布。○夫木「今は世にあるもまれなる奥布の用ひられしは昔なりけり」

おくる 送(他動四段) (一)其人の至る處まで附き添うて行く。● 旅立つ人を見立つる。(二)會葬する。(三)品物を其人の許に屆くる。(四)月日を經過さする。(五)かれこれへと傳ふる。● 次へ〳〵と延ばす。(六)送假名を附くる。(七)同じ文字を書くべき所に符號を用ふる。……「月々」「いろ〳〵」の々〳〵の類。

おくる 贈(他動四段) 與ふる。● やる。● くるゝ。● 授くる。● 進ずる。● 賜ずる。

おくる 後(自動下二段) 物事の後になる。● 劣る。● 生き殘る。

をぐるま 旋覆花(名) 草の名。夏の頃菊に似て一重なる花さくもの。

おくぐるま 小車(名) 小さき車。● 車。(歌詞)

おくぐく 御書(名) 昔し詔書勅書などを內記の書く時。月日の間に闕字したるを宸筆にて日附を遊ばし入れらるゝ事。○代始和抄「勅符といふに三箇國の國司のかたへ關々をかたむべきよし仰せ下さるゝ文なり。御書ある例もあり又なき例もあるなり」

おくが (名) 奥。● 奥深き場所。

おくがた 奥方(名) 貴人の妻。● 夫人。● 奥樣。

おくがき　奥書(名)　〔一〕書籍の末に書く文。●跋文。〔二〕書類の末に證明などのため他人の書き添ふる文。○「區長の奥書」

おくよこめ　奥横目(名)　徳川幕府の役名。奥勤の横目役。

おくだかし　臆高(形。形狀言ク活)　臆病の強き。○源氏「おくだかきものどもは物も覺ねす」

おくだん　臆斷(名)　臆測の判斷。△(動)—臆斷す。

おくれ　後(名)　後るゝ事。●失敗。●未練。

おくれゐる　後居(自動上一段)　殘り居る。○萬葉「おくれゐて我やは戀ひんいなみのゝ秋萩見つゝいなむ子故に」

おくればせ　(副)　時過ぎて馳せ付くるの意より起りて◎場合に後れてする事。

おくれがけ　後駈(名)　後れて駈け付くる事。

おくれまじ　(名)　夏の末に吹く南風。

おくれげ　後毛(名)　髻まで屆かぬ髮の毛。

おくれざき　後咲(名)　其季節に後れて咲く事。●又其花。●遲咲。

おくそく　臆測(名)　當推量。●自分勝手の推測。△(動)—臆測す。

おくそこ　奥底(名)　心の奥。●底意。●深意。

なぐつ　麻鞋(名)　麻にて造りたる鞋。(和名抄)

おくづま　奥妻(名)　秘藏の妻。●最愛の妻。(萬葉)

おくつき　奥津城(名)　墳墓。●墓所。(萬葉)

なぐな　童男(名)　幼年の男兒。●童兒。(紀)

なぐらかん　小倉羹(名)　菓子の名。練羊羹の一種。小豆の粒の交りたるもの。

おくらかす　(他動四段)　後らすに同じ。○源氏「おくらもし給はゞいみじうつらからん」

なぐらし　小暗(形。形狀言ク活)　薄暗し。○源氏「山の方をぐらくて」

なぐらじるこ　小倉汁粉(名)　食品の名。汁粉の一種。小豆の粒の交りたるもの。

なぐらす　小暗(他動四段)　かきくらす。●暗くする。○源氏「かきくもり日影も見ねぬ奥山に心なぐらす頃にもあるかな」

おくらす　後(他動四段)　おくれしむる。●遲くさする。●のこす。

おくむき　奥向(名)　家の奥の方。●勝手向。

おくのゐん　奥の院(名)　神社佛閣にて一層奥の山上などに別に神躰本尊などを安置したる所。

おくのて 奥の手(一) 〔一〕左の手。(古) 〔二〕技藝の上にて常には使はぬ手。●秘術。●秘訣。

おくやま 奥山(名) 〔一〕奥深き山。●深山。〔二〕催馬樂の曲名。

おくやまに 奥山爾(名) 催馬樂の曲名。

おくやまの 奥山の(枕) 奥山に生ふるものなれば眞木にかゝる枕詞。○萬葉「奥山の眞木の板戸を押し開き」

おくまり (名) おくまる事。●奥深き事。

おくまる (自動四段) 奥深くある。○源氏「公達もおくまりておはす」

おくぶか 奥深(名) 奥の深き事。●深遠。△(形)—奥深な。(副)—奥深に。(俗)

おくぶかし 奥深(形。形狀言ク活) 奥の方へ深きをいふ。●あらはに見ねをいふ。

おくて 晩稻(名) 晩く熟する稻。

おくて 奥手(名) 左の手。(萬葉)

をぐさ 小草(名) 草。(萬葉)

をぐさおひづき 小草生月(名) 太陰暦二月の異名。

おくさま 奥樣(名) 妻の尊稱。

おくざしき 奥座敷(名) 奥まりたる室。

をぐき 小畝(名) 畝。(萬葉)

おくゆかし (形。形狀言シク活) 奥の見ねずして何となく中が見たく知りたく思はるゝ。●奥深し。

おくゆき 奥行(名) 家又は屋敷地などの表より裏までの距離。

おくみ 衽(名) 衣類の名所。襟と身との間の三角の處。

をぐし 小櫛(名) 小さき櫛。●櫛。(萬葉)

おぐし 御髮(名) 髮の敬語。

おくじやうるり 奥淨瑠璃(名) 奥州より流行し始めて元祿の比盛なりし一種の淨瑠璃。三味線を用ひず扇柏子のみにて語るもの。●仙臺淨瑠璃。

おくじま 奥縞(名) 紺と樺茶とを堅縞にしたる綫留縞をいふ。

おくび 衽(名) 衣類の名所。—おくみに同じ。

おくびやうう 臆病(名) 些細の物事に驚き易き性質。●小膽。●こわがり。△(形)—臆病なる。

おくびやうぐち 臆病口(名) 能舞臺の右の後ろにある狹き樂屋の出入口。又切戸とも云ふ。●芝居にて花本舞臺の上手にある出入口。

おくせつ 臆說(名) 當推量の說。●想像說。

おくす 臆(自動サ變) 恐ろゝ。●氣おくれのする。

をや 小屋(名) 小さき家。

をや (感) 〔一〕反語のをに歎息のやの添ひたるもの。○後撰「白川の瀧のいと見まほしけれどみだりに人をよせじものをや」源氏「されば云ひよりにけるをやとほゝゑまれて」〔二〕歎息のをやと重れて況んやましてやなどの詞の下に置くもの。○「況んや人間に於てをや」

おや 親(名) 〔一〕父母。●兩親。〔二〕先祖。

おやいし 首石(名) 〔一〕西洋にて家屋を建つる時地中に其固めとして埋むる石。〔二〕之にたとへて基督教にて基督を云ふ。

おやいも 親芋(名) 大なる芋。

おやになひぼし (名) 星の名。からすきぼしに同じ。

おやぼね 親骨(名) 扇子などの骨の中にて最も太きもの。

おやぢ 親父(名) 〔一〕父親。〔二〕年老いたる男。●老爺。

おやわん 親椀(名) 本膳に用ふる飯椀。

おやがる (自動四段) 親の如くに振舞ふ。●親ぶる。○源氏「親がりたる御言葉」

おやがかり 親掛(名) 衣食住とも親に仰ぐ身分。●部屋住。(俗)

おやかた 親方(名) 〔一〕親とも賴む人。○平治「今は一向親方ともたのむなり」〔二〕其社會其職業の頭人。

おやなしご 親無子(名) 親の既に死したる子。●孤兒。

をやむ 小止(自動四段) 暫く働きの止まる。●少し止む。○好忠集「我家は行く程遠し佐保風の暫しはをやめ妹し待つらん」

をやま (名) 遊女の異名。

をやまだ 小山田(名) 山田。

おやぶね 親船(名) 大きなる船。

おやぶん 親分(名) 〔一〕義父母。〔二〕親方。

おやこ 親子(名) 親と子と。●親子。●父子。●母子。

おやご 親御(名) 他人の親の尊稱。

おやこぐさ 親子草(名) 木の名。楪の異名。

おやごころ 親心(名) 親として子を思ふ慈愛心。○謠曲「千里を行くも親心。子を忘れぬと聞くものを」

おやざと 親里(名) 親の住み居る所。

おやざま 親樣(名) 親の樣に思ひ居る人。●親方。

おやざまに 親樣に(副) 親のやうに。●親の如くに。○蜻蛉「うしろやすからん人に親ざまにあづけて」

おやゆび 親指(名) 手足の指の最も太きもの。●拇指。●大およびゆび。

おやめく (自動四段) 親の樣に見ゆる。●親の樣に振舞ふ。

をやみ 小止(名) をやむ事。○源氏「雨のをやみなく降りて」

おやじ (形。形狀言シク活) 同じの古言。○萬葉「妹も我も心はおやじ」

をやしろ 小社(名) 小さき神社。●社。

おやもと 親許(名) 親里。●實家。

をやす (他動四段) 痒ゆる樣にする。●痒えしむる。(紀)

をま 牡馬(名) 男性の馬。(和名抄)

をまつ 雄松(名) 男性の松。幹葉共に粗く黑きもの。

おまんがべに (名) 昔し江戸の中橋におまん稻荷の社あり。之に供ふる爲に其近傍にて賣りたる紅の名。

おまんま (名) 飯。(俗)

おまんどころさま 御眞向樣(名) 元祿時代の俗語にて佛像の事。

おまへ 御前(名) 貴人の前。●ごぜん。

おまへ (代) (一)君主などの代名詞。○枕「御前にも笑はせおはします」(二)相對する人の代名詞。●汝。●御身。●其方。●其許。

をまき 緒卷(名) (一)機道具の名。腰の一名。縱糸を卷くもの。(二)紡錐の一名。

おまし 御座(名) 貴人の座席。●御座所。(雅)

おましどころ 御座所(名) 貴人の常に住む所。(雅)

おまします (他動四段) おはしますに同じ。(雅)

おます 坐(自動四段) おはすに同じ。(雅)

をけ 桶(名) (一)麻笥より出でたる詞。◎細き板を集め箍にて締めたる圓き器具。(二)又之に似て丸き筒形の器。○「火桶」「腰桶」

をけ 麻笥(名) 苧を績みて入るゝ器。檜の板を曲げて丸く作れるもの。

をけがは 桶側(名) 桶の側に作る板。

をけがはどう 桶側胴(名) 鎧の一種。胴の左脇を蝶番

をけつ 惡血(名) 惡き血。●黑血。

をけら 朮(名) 草の名。〔うけらに同じ。(和名抄)

おけら (名) 虫の名。螻蛄に同じ。

をけらのもちひ 朮餅(名) 朮にて作れる餅。昔し十二月晦日追儺の時に食したるもの。(四季物語)

をけぐれ 桶樽(名) 〔一〕桶側に作る材木。〔二〕桶側に同じ。

をけや 桶屋(名) 桶を造る職工。又賣る家。

をけび 桶火(名) 火桶の火。

おぶ 佩帶(他動下二段。又四段) 〔一〕腰に纏ふ。●腰に着くる。●身に着くる。〔二〕含む。●有つ。

をぶち 小斑(名) 昔し陸奥をぶちといふ處より出でたる名産の馬。○後拾遺「綱絶えて離れぼてにし陸奥のをぶちの駒をきのふ見しかな」

おふれ 御觸(名) 御布告。●御布達。

をぶつ 汚物(名) 汚れたるもの。●穢き物。

をぶね 小舟(名) 小さき舟。●舟。(歌詞)

おふく 阿福(名) おたふくに同じ。

おふくろ (名) 母。(俗)

をぶくろ 尾韜(名) 馬の尾を包む袋。(和名抄)

をぶさ 緒總(名) 禮服の飾の名。〔綬に同じ。

をぶさ 尾房。鞦(名) 鷹の尾に着くる總。○堀川「降る雪にゆくへも見ねずはし鷹のをぶさの鈴の音ばかりして」

をこ (名) 馬鹿げたる事。●あほう。△(形)—をこの(又)—をこなる。(副)—をこに。

おご 於期(名) おごりの略。

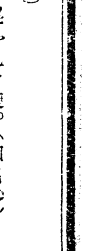
おこと 御事(代) 御身。●そなた。●おまへ。○謠曲「おことは乳母の侍從にてはなきか」

をごと 小琴(名) 小さき琴。●琴。(歌詞)

おことはじめ 御事始(名) 十二月八日御事汁を食ひて祝ふ事。是より歲末儀式の始まる由なり。

おことに 御事煮(名) 御事汁の一名。

をことてん 乎已止點(名) 古代の漢文訓點法。漢字の上下左右中央などに點を打ち。其點



の位置によりて「思」の字ならば或は「思ふ」と讀み或は「思ふこと」と讀み或は「思ふに」と讀むべきの符號となしたるもの。……其一例を此に示す。〈圖〉

おことじる

御事汁(名)　御事始に食する汁。小豆に大根、芋、牛蒡、人參、豆腐などを入れたるもの。

おこはゥ

御強(名)　婦女子の詞。強飯の敬語。

おこり

瘧(名)　病の名。熱病の一種にして多くは一日おきに起るもの。●わらはやみ。●瘧。●間歇熱。

おこり

起(名)　發端。●原因。●由來。

おごり

(名)　おごる事。〔一〕(傲。驕)傲慢。●たかぶり。〔二〕(奢)奢侈。●贅澤。

おこりび

起火(名)　起りたる火。●熾火。

おごめふゥ

(他動四段)　補ふに同じ。(萬葉)

おこる

起。興。發(自動四段)　はじまる。●盛になる。

おこる

(自動四段)　腹立つ。●怒る。(俗)

おごる

(自動四段)　〔一〕(傲。驕)人を輕蔑して尊大に構ふる。●高ぶる。〔二〕(奢)身分不似合なる榮華を爲す。●贅澤をする。●見ばえを飾る。〔三〕自ら錢を出して人を饗應する。●馳走する。●振舞ふ。(俗)

をこがる

(他動四段)　をこなりと思ふ。●馬鹿げたと思ふ。○字治「をこがりあざけりて」

をこがまし

(形。形狀言シク活)　〔一〕馬鹿らし。〔二〕生意氣なる。

おこたり

怠(名)　〔一〕懈怠。●懶惰。●過失。〔二〕過失の詫言。●謝罪。○增鏡「さまざまおこたりかしこまり申させ給ひ」〔三〕無沙汰。●さだえ。……男女の間に云ふ。○源氏「心より外のおこたりはなべての世に覺しゆるすらん」

おこたりぶみ

怠書(名)　過失を謝する書面。●怠狀。●謝罪書。●過證文。(字治)

おこたる

怠。懈(他動四段。又自動四段)　〔一〕勤むべき事を勤めぬ。●なまける。●懶惰になる。〔二〕病の直る。●平癒する。○平穩「忽に病おこたり」

おごそか

嚴(名)　威儀ある事。●嚴重。●嚴格。△(形)—おごそかなる。(副)—おごそかに。

おこそづきん

御高祖頭巾(名)　婦人用の頭巾。袖頭巾

の一名。

をこづる

（他動四段）　すかし欺く。●誘惑する。●教唆する。○源氏「さすがに此文をけしきなくをこづり取らんの心にて」

をこづく

（自動四段）　をこがるに同じ。（著聞）

おこなひ

行（名）　〔一〕行ふ事。〔二〕所行。●行狀。●品行。〔三〕佛法の行ひ。●戒行。●つとめ。即ち誦經念佛等の類。

おこなひびと

行人（名）　佛道の行者。

おこなはる

行（自動下二段）　實行さるゝ。●流行する。

おこなふ

行（他動四段）　〔一〕事を爲す。●取扱ふ。●實行する。〔二〕佛道を修むる。●行ずる。

おかう

御講（名）　報恩講。

おごのり

於期菜（名）　海草の名。海苔の一種。長くして糸の如く其色綠なるもの。●おご。

をごく

（自動四段）　動くに同じ。○重之集「さゝがにの雲の旗手のをごくかな風を便りに思ふなるべし」

をごけ

麻小笥（名）　麻笥に同じ。

をごごと

（名）　戲言。●じゃうだん。（源氏）

をこゑ

（名）　戲畫。●狂畫。……鳥羽繪、大津繪の類。

をこめく

（自動四段）　をこに見ゆる。●馬鹿げる。●ふざける。○源氏「殊更にをこめきて作り出でたる物のたとひにこそはなりぬべかめれ」

をごめく

（自動四段）　鼻の動くやうに見ゆる。……得意に物言ふ時の形容。○徒然草「鼻のほどをごめきていふは」

おこし

御越（名）　來るの敬語。●御出。（俗）

おこし

（名）　おこしごめの略。

をこじ

（名）　魚の名。●をこぜに同じ。（和名抄）

をごし

尾越（名）　〔一〕峯を越す事。○「尾越の鴨」〔二〕峯を越す處。○夫木「生駒山尾越にさける櫻花おりぬる雲と人や見るらん」

おこしごめ

（名）　糯米を煎りて砂糖又は水飴などにて固めたる菓子の名。●おこし。

おこしび

起火（名）　おきびに同じ。（紀）

おこしずみ

起炭（名）　おこして火となしたる炭。（紀）

をこぜ

虎魚（名）　魚の名。肉は淡味にして多く蒲鉾に作らるゝもの。

おこす

起。興（他動四段）　〔一〕臥したるものを起くる

樣にする。〔二〕寐たるものを覺めしむる。〔三〕衰へたるを振はしむる。○古今序「ふりにし事をもおこし給ふとて」〔四〕物事を創もる。●開く。●あらはす。

おこす（他動四段。下二段）　彼方より此方に届くる。●送り來る。●よこす。

おでん　御田（名）　田樂の敬語。（俗）

おてんば（名）　あばれ女。●浮氣娘。

おてまへ　御手前（代）　御身。●足下。●貴殿。

をてもこのも（副）　このもかのも。●かなたこなた。○萬葉「二上のをてもこのもに網さしてあが待つ鹿を夢につげつも」

をあはせ　緒合（名）　琴、琵琶などの合奏。○謠曲「叉玉琴のをあはせに」

おあん　御庵（名）　御庵主の意。◎尼の尊稱。

おあし　御足（名）　錢の敬語。

をさ　梭（名）　機の具。竹にて櫛のやうに作り縱糸を貫き通すもの。

をさ　長（名）　頭立ちたる人。●頭領。●長。

をさ　譯（名）　通譯。●通辭。●通辯。（組）

をさをさ（副）　大方。●大概。●可なりに。●あまり。●一向。●ろくに。●ねっから。●そんなに。●事ら。……多くはず　なし　まじ　等の打消の詞を下に置く時の副詞。○空穗「世の中の事をさ〳〵聞にめを」源氏「をさをさ滯る事なう」又「此侍從もあやしき戯れ人にて萬の人の聟になり給へとをさ〳〵聞に給へど」

をさをさし（形。形狀言シク活）　ばかぐし。●かひぐし。○伊勢「わかければ文もをさ〳〵しからず」

おさがり　御下（名）　神佛又は貴人に供へて下げたる食物。

おさがり　御降（名）　一月三箇日の内に降る雨又は雪を祝ひていふ詞。

をさな　幼名（名）　元服前の名。●童名。

をさなな　幼馴染（名）　幼時の親しみ。

をさなじみ　幼兒（名）　幼稚なる兒。

をさなご　幼心（名）　幼時の心意。

をさなごころ　幼心地（名）　幼時の心持。

をさなごこち　幼遊（名）　幼時の遊戯。

をさなあそび

をさなし（形。形狀言ク活）　まだ生長せぬ。●いとけ

なし。●子供らし。●賢からぬ。

をさなびる（自動下二段）　幼く見ゆる。○今物語「心にくゝをさなびれたる手にて」

おさらば（名）　別れ。●是を限りの別れ。●最期。

おさらば（感）　別るゝ時の挨拶。●左様なら。

をさむ（他動下二段）　〔一〕（治）物事を有るべき樣に有らしむる。●整理する。●鎮定する。●平和にする。〔二〕（修）德行に叶ふやうにする。●修業する。●研究する。〔三〕（納）藏に仕舞ふ。●上に物を出だす。●上納する。〔四〕（收）取りまとむる。●取り入るゝ。●終結を爲す。〔五〕（葬）葬る。

おさん（名）　飯炊女。●下女。●お三どん。

おさんどん（名）　おさんに殿の音便を添へていへる詞

をさむるつかさ（名）　治部省の一名。（和名抄）

おさ、ふ（他動下二段）　〔一〕押し付くる。●押し留むる。

をさまり（名）　〔一〕をさまる事。〔二〕結局。●終局。

をさまる（自動四段）　〔一〕泰平無事になる。●平和になる。●靜に定まる。〔二〕終る。●局を結ぶ。●片付く。〔三〕品行上修業上好結果を得る。

おさまさ（感）　おうましさよと笑ふ意の囃し詞にやと

橘守部の說なり。○神樂歌「きゝんゝすの姑き慨たさや。御園生に參り來て。木の根をほりにんで。おさまさ角折れぬ。おさまさ角折れぬ」

おさけ（名）　〔一〕女帶の結び方。半分拔き出して下げ置くもの。〔二〕女兒の髮の結び方。本を縛りて後ろに垂らし置くもの。

をさふね（名）　刀鍛の名。備前の國長船村の刀鍛冶の作りたるもの。●備前物。

おさへ（名）　〔一〕抑ふる事。〔二〕抑へに用ふる物。●おもし。〔三〕あとおさへ。●しんがり。〔四〕防禦。

おさへ（名）　八重齒の一名。

をさゑぼし（名）　折烏帽子の一種。〔圖〕

おさへのき（名）　塞城。其地方の抑へとしての城。……今の鎭臺の類。○萬葉「しらぬひ筑紫の國は。仇守るおさへのきぞと」

おさへもの（名）　酒宴の終に出だす菓子くだもの

の類。

たささ 小笹(名) 小さき笹。●笹。(歌詞)

おささき 御先(名) 手先。●手下。○「お先に使はれる」(俗)

たささぎ (名) 獸の名。＝兎に同じ。(萬葉)

たささめ 長女(名) 〔一〕老女。〔二〕下婢。

たささめ (名) 〔一〕總べてねさむる事。〔二〕終り。〔三〕秘藏。●とっとき。

たささめどの 納殿(名) 御秘藏の御物を納め置く所。禁裏宣陽殿の内にあり。

たささめのつかさ (名) 修理の一名。(和名抄)

たささし (形。形狀言シク活) 物事に長じたる有樣。○空穗「御心のかしこく政をささしく」

おささし 御差(名) 貴人の子に乳を上ぐる女。

おささじ 御匕(名) 貴人の抱への醫者。●御殿醫。

たささし 鰒(名) 魚刺の意。◎竹の串などに刺し列ねたる干魚。●目刺。(和名抄)

たささす (他動四段) 食すの敬語。めしあがる。○萬葉「古の人のささせる吉備の酒」

たささす 建(自動四段) 尾指すの意。◎北斗星の劍先の向ふをいふ。……「寅に建す」といへば其劍先が寅の方角を指すの意と知るべし。

たささ 萩(名) 草の名。蘆に似て陸に生じ。茅に似たる花咲くもの。秋風に吹かれて葉のざわ〳〵と鳴る音がさびしきものなりとて常に歌人の材料と爲る。

おき 沖(名) 海、湖、川などの岸より遠き所。

おき 息(名) いき。●呼吸。(古)

おき 置(名) 間を隔つる事。○「十日おき」「一月おき」

おき 熾(名) 起りたる炭火。○伊勢「おきのねて身を燒くよりもかなしきは」

おき (名) 物の奥深き所。＝奥(おく)に同じ。(古)

おきろなし (形。形狀言ク活) 宏大なる。●極めて大きなる。○紀「丈六の佛を造る功德おきろなし」

おきろくしやう 隱岐綠青(名) 繪の具の名。始め隱岐より產せし綠青の一種。

おきばん 起番(名) 寢ずに番する事。●寢ずの番人。

おきにすむ 沖に住む(枕) 鴨の枕詞。(万葉)

おきにすむも (枕) 沖に住むの轉。鴨の枕詞。○萬葉東歌「おきにすもかものもころや」

おきべ 沖邊(名) 沖の方。

おきどこ 置床(名) 床の間の一種。取外しの出來るもの。

おきどころ 置所(名) 置く場所。●置場。

おきぬふ 綴(他動四段) 補ふに同じ。(古)

おきがた 置形(名) 布などに置きたる模樣。

おきかへる 起返(自動四段) 臥し居たる者が起きてすわる。●起き直る。

おきかき 熾搔(名) 炭火を搔き立つる具。

おきかぜ 荻風(名) 荻を吹く風。○和泉式部日記「ねざめれば聞かぬなるらん荻風は吹かざらめやは秋の夜な〳〵」

おきそ (名) 嘆きて嘯く息。○萬葉「大野山霧たちわたる我嘆くおきその風に霧立ちわたる」

おきつ 掟(他動下二段) 心中にて規律を立つる。●定めを立つる。●極りをつける。●處置する。●處分する。●指揮する。○源氏「とかくの御事などおきてさせ給ひて」徒然「高名の木のぼりといひし男人をおきて、高き木にのぼせて」

おきつとり 沖津鳥(名) 沖に居る鳥。(歌詞)

おきつとり 沖津鳥(枕) 鴨あぢは沖に居る鳥の名なれば其れに言ひかけたる枕詞。○紀「沖津鳥かもどく島に」萬葉「沖津島あぢふの原に」

おきつち 置土(名) 道路、庭などに土を置き添ふる事。

おきつかぜ 沖風(名) 沖より吹く風。(歌詞)

おきつだひ 興津鯛(名) 鯛の一種。駿河興津の名産にて其味美なるもの。

おきつなみ 沖津波(名) 沖中に立つ浪。(歌詞)

おきつなみ 沖津波(枕) 沖津波の重きて立つ。競ひて寄する、折れ撓む、などゝ掛かる枕詞。○萬葉「沖津波しきてのみやも戀ひわたりなむ」「沖津波さほ漕入り來」「沖津波とをむまよびき」

おきつふね 沖船(名) 沖中に浮ぶ船。(歌詞)

おきつき 奥津城(名) おくつきに同じ。●墓所。(万葉)

おきつみとし 沖津御年(名) 稻の異名。○祝詞式「手肱に水沫かきたり。向股に泥かきよせて取り作らむおきつみとしを」

おきつみや 沖津宮(名) 龍宮。

おきつしらなみ 沖津白波(名) 〔一〕沖に立つ白浪。〔二〕海賊の異名。

おきつしま　沖津島（名）　沖中にある島。（歌詞）

おきつしまね　沖津島嶺（名）　おきつしまに同じ。（歌詞）

おきつしまやま　沖津島山（名）　沖津島の山。（歌詞）

おきつしまもり　沖津島守（名）　沖津島の番人。（万葉）

おきつも　沖津藻（名）　沖に生ずる海草の總名。●海の藻。（祝詞式）

おきつもは　沖津藻葉（名）　沖津藻に同じ。○祝詞式「大海原に生ふるものは沖津藻葉遠津藻葉」

おきつもの　沖津藻の（枕）　沖津藻の海底にかくるゝ意にてなびり（隱るゝの意）に言ひ掛け。又波に靡くの意に續けたる枕詞。○萬葉「我背子は何く行くちも沖津藻のなはりの山を今日か越ゆらむ」沖津藻のなびきし妹は」

おきつす　沖津洲（名）　沖中の洲。（歌詞）

おきつすたべ　奥津棄戸（名）　墓。（紀）

おきな　翁（名）　〔一〕老いたる男。●老翁。●老爺。〔二〕能樂の曲名。老翁の姿したる人の出でゝ祝言を述べ舞ふもの。能樂中殊に神道の秘事として此曲を重んず。

おぎなひィ　補（名）　補ふ事。●補助。●埋草。●足し前。

おぎなひィぐすり　補藥（名）　常に身心を養ふ爲めの藥。●強壯劑。●ほやく。

おきなほる　起直（自動四段）　臥し居たる人の起きあがりてすわる。●おきかへる。

おきなほほ　翁頰（名）　面頰の一種。翁の面に似たるもの。

おきなおもて　翁面（名）　能樂の翁に用ふる面。……白色（はくしき）および黑色を見よ。

をきなは　招繩（名）　壓に附くる繩。

おきなは　沖繩（名）　沖中にて魚を捕ふるに用ふる繩。

おきなわたし　翁渡（名）　〔一〕能樂の翁の中にある所作の名。……轉じては翁を舞ふ事。〔二〕再び轉じて芝居の幕明に三番叟を舞ふ事。

おきながひィ　翁貝（名）　貝の名。溷貝（なまがい）の類にして色の白きもの。

おきなぐふ　補（他動四段）　物事の足らぬ所を足す。●補助する。●うめる。●つくろふ。

おきなぐさ　翁草（名）　菊の異名。

おきなのめん　翁の面（名）　おきなおもてに同じ。

おきなぶ　（自動上二段）　おきなさぶに同じ。○源氏「何となくおきなびたる心地して」

おきなるぼし　翁烏帽子（名）　立烏帽子の一種。能樂の

翁に用ふるもの。〔圖〕

おきなさぶ（自動上二段）　老人らしくなる。●年寄じみる。○千載「今朝みればさながら霜をいたゞきておきなさびゆく白菊の花」

おきなさび（名）　老人らしくなる事。○伊勢「翁さび人なさがめそ狩衣けふばかりとぞ田鶴も鳴くなる」

おきなゆり　翁百合（名）　草の名。鹿子百合の一名。

おきなめん　翁面（名）　おきなおもてに同じ。

おきなみ　沖波（名）　沖中に立つ波。

おきなびと　翁人（名）　翁に同じ。老翁。

をきむし　招虫（名）　尺蠖の一名。

おぎのりわざ　除業（名）　掛買。○土佐「空言をしておぎのりわざをして錢も持て來ず已れだに來ず」

おぎのる　除（他動四段）　物を買ひて代金を借り置くをいふ。●掛買をする。

おぎぐち　置口（名）　縁。●縁を取る事。○紫日記「袖口におぎぐちなし」落葉「おぎぐちの經營にし」

おきくら　置座（名）　物を据ゑ置く座。●置場所。○祝詞式「ちくらのおきくらにおきたらはして」

おきあがりこぼふし　起上小法師（名）　小兒の玩具。人形の底の方に鉛などの重しを入れ轉ばせば起き直るやうに出來たるもの。

おきぶみ　置文（名）　遺書。●書置。

おきふし　起臥（名）　起くると臥すと。●寐起。●朝夕。

おきごたつ　置炬燵（名）　炬燵の一種。据ゑ付けずして何處へでも持ち行かゝるもの。

をきゑ　拓餌（名）　鷹を呼び寄する爲めの餌。○金葉「のきばうつ眞白の鷹の餌袋にをきゑもさゝで返しつるかな」

おきて　掟（名）　〔一〕總べて掟つる事。〔二〕掟てゝ定めたる事。●法則。●法式。●法制。●法度。●法令。●法律。

おきあがる　起上（自動四段）　立ちあがる。●起きて立つ。

おきあかす　起明（他動四段）　起き居て夜を明かす。

おきあげ　置揚（名）　蒔繪などの模樣を高く置き揚げたるもの。

おきあさり　沖淺蜊(名)　貝の名。淺蜊の一種。殼厚く斑あるもの。

おきあみ　沖網(名)　網の名。沖中に張りて魚を捕るもの。

おきざり　置去(名)　人を捨て置きて己のみ立ち去る事

おきめばる　(名)　魚の名。赤目鯛の一名。

おきみやげ　置土産(名)　別れて行く人の跡に殘し置く贈物。

おきしく　置敷(自動四段)　置き渡す。○夫木「今宵しも稻葉に露のおきしくは秋の隣になればなりけり」

おきび　熾火(名)　おきに同じ。起りたる火。

おきもの　置物(名)　床の間に据ゑ置く裝飾品。

おきすゑ　置据(名)　物を其場に据ゑたる儘手を着けずに置く事。

をゆ　瘁(自動下二段)　病などにて身體のぐんにゃりとなるをいふ。●衰弱する。○記「にはかにをいまし」

おゆ　老(自動上二段)　齡のたくる。●年寄る。●年とる。●老人になる。●老衰する。

をめい　汚名(名)　汚れたる名。●臭名。

おめいかう　御命講(名)　法華宗にて祖師の祭。＝會式に同じ。

おめにかかる　御目に懸る(句)　對面するの敬語。●拜謁する。●拜顏する。

おめにかく　御目に懸く(句)　〔一〕人に物を見するの敬語。〔二〕人に物を贈るの敬語。

おめおめ　(副)　耻を忍びて。●耻も知らずに。●厚顏にも。(又)—おめ〳〵と。○著聞「引放つべくもあらねば力及ばずしておめ〳〵と女の行くに從ひて行くに」

おめがはり　(名)　面變(おもがはり)の轉。(萬葉東歌)

おめむし　(名)　虫の名。わらぢむし。(和名抄)

をめく　(自動四段)　大聲あげて叫ぶ。●わめく。

おめあし　(名)　病の名。足に水氣を持ちて重くなる病。(和名抄)

おめみえ　御目見(名)　貴人に面會する事。

おめみえいじやう　御目見以上(名)　以上を見よ。

おめし　御召(名)　衣類の敬語。

おめしちりめん　御召縮緬(名)　縮緬の一種にして高等なるもの。◎貴人御召料の意。

おめしもの　御召物(名)　おめしに同じ。

なみおみ 小忌(名) 小忌衣の略。

おみ 臣(名) 大身といふ美稱より來る。◎(一)姓の一つ。(二)君に仕ふる人。●臣下。●家來。

おみ 使主(名) 姓の一つ。

おみ (代) 御身に同じ。

おみ (形) 大御の略。○「おみ帶」「おみ足」「おみ輿」

おみヤミヨ **うじ** (名) 陰陽師に同じ。

なみな 女(名) なんな。●婦人。●女子。(古)

おみな 嫗(名) 年老いたる女。●おうな。●おむな。

なみながみ 女神(名) めがみ。

なみなめ (名) 妾。

なみなべメ**し** 女郎花(名) 草の名。秋の初め黄にして蘂せる粟の如き花のさくもの。

なみなべメ**しづき** 女郎花月(名) 七月の異名。(藏玉集)

なみなべメ**しあはせ** 女郎花合 名) 女郎花に歌を添へ趣向を凝らして左右優劣を鬪はす古代の雅遊。●歌合の種類。

なみのよ 小忌の夜(名) 豐明節會の内丑の日の夜を云ふ。此夜は舞姫小忌衣を着する定めなればなり。(榮花)

おみのこ 臣子(名) 臣。●臣子。●臣民。

なみごろも 小忌衣(名) 古代禁中祭服の名。大嘗會新嘗會などに祭官または舞姫の着るもの。張りたる白布に山藍といふ草もて春草小鳥などの模樣を摺る。其製大方狩衣の如くツユは無し。大袖と鰭袖との縫目に紙捻を下げ。又右の肩には赤紐といふものを掛く。●青摺衣。●山藍の袖。(圖)

なみびと 小忌人(名) 小忌衣を着たる人。(公任集)

なし 鴛鴦(名) 水鳥の名。雄は殊に麗はしくして背に銀杏の葉の形したる瑠璃色の羽あり。雌羽又は思ひ羽といふ。雌雄戀愛の情深きものなるを以て常に歌人詩人の材料となる。

なし 食(名) 食物。●飯。

おし (形。形狀言シク活) (一)(惜)殘り多し。●殘念なる。(二)(愛)あいらし。●かはいそうな。

おし 啞(名) 啞に同じ。

御師(名) 神佛に參詣する時我祈禱の事を引受く

る神官又は僧侶。

おし

押。壓(名)　(一)押す事。●押し附くる事。(二)押す爲めに用ふる物。●重し。

おし

(感)　おゝのおとしゝのしゝと重ねたるもの。◎警蹕の聲。……侍中群要供御の事の條に曰く「初め御膳を供する人先づ蓋の盤を取り鬼間の御障子に入立つの間警蹕を稱す。其詞カシ」○日中行事「次々の藏人二人此御臺盤をかきて一の御臺の南に竪さまにすう鬼の間のとりぬ障子を入ほど陪膳けいひつすおしといふ」

おしいり

押入(名)　押込。●強盜。

おしいる

押入(他動下二段)　強ひて入るゝ。●押込む。

おいる

押入(自動四段)　強ひて入りこむ。

おいた

押板(名)　(一)仕立物又は紙などを擦みて其皺を伸す爲めに用ふる二枚の厚板。(二)昔し之を室の上座に置き花瓶など置きたるより起りて。◎床の間の板。●板床。

おいだす

押出(他動四段)　押して出す。●おしだす。

おいれ

押入(名)　夜具衣類など入るゝ戸棚。

おいづ

押出(他動下二段)　おしいだすに同じ。(雅)

をしろ

尾白(名)　尾の毛の白き馬。(和名抄)

おしろい

白粉(名)　顏などを白く見するために塗る化粧品。多くは鉛を燒きて造りたるもの。●しろいもの。●はくふん。

おしろいばな

白粉花(名)　草の名。夏の末、紅、黃などの花咲き。白き粉を含める實を結ぶもの。

おしば

押葉(名)　紙の間に押し挾みて貯へ置く植物の葉。……植物學の標品などにするもの。

おしはる

押張(他動四段)　押して張る。○「弓をおしはる」「簾をおしはる」

おしはるす

(他動四段)　晴らす。●明にする。○祝詞式「眞澄の大御鏡をおしはるしてみそなはす如く」

おしばかり

推量(名)　すゐりゃう。●推測。●臆測。

おしばかる

推量(他動四段)　他の例に證據を取りて想像する。●推量する。●推測する。●臆測する。

をしべ

雄蕊(名)　植物學上の詞。多くは花の中に雌蕊を圍みて立ち花粉を保持するもの。●雄蕊。

おしべ

(名)　磯邊。○萬葉「駿河の海おしべにおふる濱菖蒲」

おしへがす
おしへぐ
（他動四段）　おしへぐに同じ。
（他動四段）　おしへがす。●切れ〳〵にする。○枕「有明の月のくまなきいみじうをかし。金などおしへぎたるやうなるに」

おしへす
（他動四段）　強く押し付くる。●へしゃぐ。●ぺたんこにする。○枕「藍葡萄染などのさいでのおしへされて草紙の中にありけるを見つけたる」

をしどり
おしどど
鴛鴦（名）　をしに同じ。
（感）　おしは聲蹕の聲。どゞは止まれの意にて歌曲の囃し詞とせしもの。○光仁紀童謠「葛城の寺の前なるや。豐浦の寺の西なるや。おしどゞ おしどゞ。櫻井に白玉しづくや眞白玉しづくや。おしどゞ。おしどゞ。然せば國ぞ榮ゆるや。吾家等ぞ榮ゆるや。おしどゞ。おしどゞ」……是は事の忌諱に觸るゝ歌なれば斯かる囃し詞を添へたるなり。

おしちや
おしおくり
御七夜（名）　眞宗にて報恩講の一名。
（名）　漁船の稍大なるもの。◎風の順逆に拘はらず櫓の力にて押し送るとの意。

おしわく
おしわぐむ
押分（他動下二段）　物の込み合ひたる中を押しのけて分け行く。
（他動四段）　手の先にて丸くする。●まるめる。○源氏「文を小さくおしわぐみて」

をしか
牡鹿（名）　男性の鹿。●牡の鹿。

をしかは
おしかかる
韋（名）　なめしがは。（十巳）
押掛（自動四段）　身を寄せかくる。●よっかゝる。○源氏「勾欄におしかゝりて霜枯の前栽見給ふ」

おしから
（名）　忍耐力の強き事。●物に撓まざる勇氣に富みたる事。○今昔「膽太くおしからになん」

おしからだつ
（自動四段）　おしからに富みて居る。○宇治「膽太くおしからだちてなんおはしける」

おしかく
押掛（自動下二段）　〔一〕追掛くる。〔二〕招かれぬに其場に趣く。

おしかけ
押掛（名）　〔一〕押掛くる事。〔二〕馬具の名。おもづら。

おしかけぎゃく
押掛客（名）　招かれぬ宴會の席に來合す客。

おしかへす　押返(他動四段)　押して戻す。●押しのくる。●繰り返す。

おしがみ　押紙(名)　(一)附紙(つけがみ)。●附箋(ふせん)。(二)西洋紙に書きたる文字の墨を押へて吸ひ取らしむる紙。●吸取紙。

をしがも　鴛鴦鴨(名)　鳥の名。鴛鴦(をし)に同じ。(夫木)

をしゃう　和尚(名)　一寺の主僧。●住持。●住職。

をじょく　汚辱(名)　辱かしめ。●恥辱。

おしよす　押寄(自動下二段)　攻め寄する。

おしたつ　押立(自動四段)　無理にする。●強ひてする。●強迫する。●壓制にも行ふ。○源氏「おしたちあはゝしき御振舞はよも」

おしだす　押出(他動四段)　押し出だすの略。

おしつけ　押附(名)　押附の板の略。○謠曲「鎧の胸板押附總角。かけずたまらずつっと射通し」

おしつけのいた　押附板(名)　鎧の胸板の第一番目の板。

をしね　小稻(名)　稻。

おしね　晩稻(名)　おそいねの約。◎晩く熟する稻。●おくて。

おしつく　押付(他動下二段)　(一)強く押す。(二)強ひて人にさする。

おしつまる　押詰(自動四段)　物事の終。●近くなる。

おしつけ　押付(名)　押し付くる事。●強迫。

おしつけ　(副)　おっつけに同じ。間もなく。●今に。

おしなべて　(副)　總じて。●總體に。●全體に。●概して。●悉く。○拾遺「五月蠅(さばへ)なす荒ぶる神もおしなべて今日はなごしの祓なりけり」

おしならぶ　押並(他動下二段)　押さへて並ばしむる。○謠曲「おしならべてむんずと組めば」

おしなぶ　押並(他動下二段)　(一)同一にする。●一つにする。●總合する。○蜻蛉「先に燒けにしにくき所こたびはおしなぶるなりけり」(二)通例である。●なみ〳〵である。○源氏「おしなべたる大方のは」「おしなべたらぬ志のほど」

をしむ　惜(他動四段)　惜しく思ふ。

をしむらくは　(副)　をしきことには。

をしふ　教(他動下二段)　迷はぬやうに案内する。●善に導く。●教育する。●教化する。●教訓する。

おしうり

おしうつる

押賣(名)　強ひて賣り付くる事。●強賣。

推移(自動四段)　年月時候の經過する。●世に連れて物事の移り行く。

おしのく

をしのふすま

押除(他動下二段)　押して除き去る。

鴛鴦衾(名)　鴛鴦の模樣を附けたる衾。此鳥は夫婦の情深き物なりとて之を畫く。

おしくだす

押下(他動四段)　押して下す。●下す。○源氏「平調におしくだし調べ給ふ」

おしくら

押競(名)　押合。

おしくくむ

(他動四段)　包む。●蓋ふ。○源氏「上莚(はむしろ)におしくくみて」

おしくくみ

(名)　包みたるもの。●蓋ひもの。○金葉「大路に子を捨てゝ侍りけるおしくゝみに書きつけ侍りける」

おしやる

押遣(他動四段)　押して遣ひやる。●おしのくる。

おじゃる

(自動四段)　〔一〕御座る。〔二〕行かっしゃる。《俗》

おしまづき

(名)　脇息(けうそく)に同じ。(和名抄)

おしまく

押卷(他動四段)　卷く。○源氏「いかなる繪にかと思すにおしまきよせて」

おしけつ

押消(他動四段)　打消す。●壓倒する。●有れども無きやうの取扱にする。○源氏「大臣おはせましかばおしけち給はざらまし」

をしけし

(形。形狀言ク活)　惜しに同じ。○萬葉「今ぱ我身のをしけくもなし」

おしぶち

押緣(名)　物の押へとして其端に打ち付くる物。

おしこる

押凝(自動四段)　一かたまりになる。●群集する。○源氏「女房三十人ばかりおしこりて」

おしこむ

押込(他動下二段)　強ひて入るゝ。●押入る。●禁錮する。

おしこむ

おしこめ

押込(自動四段)　強ひて入る。●押し入る。

押籠(名)　德川時代刑罰の名。●蟄居(ちつきよ)。●禁錮。

おしごみ

押込(名)　戸など破りて入り込む盜賊。●押入り。●強盜。

をしへ

おしゑ

教(名)　教ふる事。●神、儒、佛、基督等の道。

押繪(名)　綿の上に切れを貼り附けて作りたる一種の美しき繪。多くは人形などを作る。

をしへかた　教方(名)　教ふる方法。●教授法。

をしへのにはヲ　教庭(名)　教訓の場所。●學校。

をしへぐさ　教草。教種(名)　〔一〕教訓の種となる事柄。〔二〕教に同じ。

をしへご　教子(名)　門人。●弟子。……師匠を學の親といふに對して云ふ。

おしゑざいく　押繪細工(名)　押繪を作る事。又其作りたる繪。

おして　押手(名)　琴、琵琶などの押さへて彈く手。

おして　押(副)　强ひて。●無理やりに。

おして　押手(名)　〔一〕昔し墨を手のひらに塗りて之を捺し證據となしたるもの。●手形。〔二〕その意味より起りて印判。●印形。●判。

おしてる　押照(自動四段)　おしなべて照り渡るの意。○萬葉「月おしてれり」

おしてる　(枕)　難波といふ地名に掛かる枕詞。おしなべて照り輝く涙の華といふ意に續けたり。○萬葉「おしてる難波の宮」

おしてるや　(枕)　おしてるに同じ。難波の枕詞。○萬葉「おしてるや難波の津より」

おしあひヤイ　押合(名)　押し合ふ事。●押競。

おしあひへしあひヤイヤイ　(副)　多くの人の互に前後左右より押しつ押されつして。

おしあつ　押當(他動下二段)　押さへて其物に當つる。○源氏「御袖を顏におしあて給へるほど」

おしあふヤフ　押合(他動四段)　相互に押す。●押競する。

おしあく　押明(他動下二段)　押して明くる。○「戸を押し明けて」

おしあぐ　押上(他動下二段)　押して上ぐる。

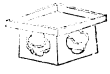
おしあげど　押上戸(名)　上の方に押し上げて留めて置く樣に作りたる戸。……引戸などに對していふ。

おしあて　押當(名)　當推量。●推測。○源氏「おしあてにのたまふ」

おしあゆ　押鮎(名)　干したる鮎。(土佐)

たしざめ　韋鮫(名)　なめしたる鮫の革。

をしき　折敷(名)　食器など載する角切の盆。薄き板を折り曲げて造りたるもの。〔圖〕



おしざり　押切(名)　馬草など刻む道具。押しつけて切る及物。

おしきり　押切(名)　割印に同じ。●押切判。

おしきりばん 押切判(名) 押切(おしきり)に同じ。●割印。

おしきる 押切(他動四段) 押して切る。●押し通す。

おじめ 緒締(名) 煙草入・巾着などの二筋になりたる緒を一つに貫きて締むる數珠玉の如きもの。

おしひたすらに (副) ひたすらに。●一向に。●ひとへに。○後拾遺「さまざまに思ふ心はあるものをおしひたすらにぬるゝ袖かな」

おしひらむ 押平(他動下二段) 押し付けて平たくする

おしひらく 排(他動四段) 〔一〕押して開く。●押し明くる。〔二〕押しのける。

おしひしぐ (他動四段) 〔一〕押し附けてつぶす。●へしゃぐ。○枕「蓬の車におしひしがれたるが」〔二〕押さへて跡へ返す。○枕「おしひしぎかへして」

たしもの 食物(名) 食物(くひもの)。(古)

おしぜみ 啞蟬(名) 虫の名。鳴かぬ蟬。

おび 帶(名) 〔一〕衣類の上に結ぶ紐。〔二〕帶の如き形したるもの。又は帶の如き用をなすもの。

おひいさま (名) 御姫樣に同じ。(俗)

おびと 首(名) 〔一〕頭(かしら)。●長(をさ)。〔二〕かばねの一つ。

おびとり 佩取(名) 佩取革の略。

おびとりがはゥ 佩取革(名) 太刀に附けたる革紐の名。佩く時帶緒を通して腰に着くる用をなすもの。

おびとりきひろげ 帶解廣(名) 帶も結ばぬ程の自墮落なる風附。

おびどめ 帶留(名) 帶の上に締むる紐。

おびぢ 帶地(名) 帶に用ふる切地。

おびを 佩緒(名) 太刀を佩く時佩取革(おびとりかは)に通して腰に着くる爲めの緒。

おびがはゥ 帶革(名) 束帶の時に用ふる革製の帶。●革帶。

おびがね 帶金(名) 太刀を腰に帶ぶる時に緒を貫く爲の鐶。

おびかけ 帶掛(名) 女裝具の名。帶留。

おびたたし 夥(形。形狀言シク活) 非常に數の多き。●度外に甚し。

おひつ 御櫃(名) お鉢に同じ。●飯器。●飯櫃。(俗)

おひら 御平(名) 平椀に盛りたる菜(さい)。(俗)

おひらき 御開(名) 婚禮祝宴の散會。歸るといふ文字を忌みて言ひ替へたる詞。

おひんなる（自動四段）　御目に爲るの意。◎御目覺に爲る。●御起きに爲る。（俗）

おびく　御比丘（名）　御比丘尼の略。◎尼の尊稱。

おびく　誘（他動四段）　欺き誘ふ。

おひや　御冷（名）　冷水をいふ敬語。（俗）

おびやかす　劫。脅（他動四段）　威力を示して我意に從はしむる。●脅迫する。

おひゃくど　御百度（名）　百度參に同じ。

おびやす（他動四段）　おびやかすに同じ。

おびふう　帶封（名）　帶の樣に卷きて封ずる事。新聞書類を郵送する時などに用ふ。

おびぶくろ　帶袋（名）　腰に佩ぶる袋。巾着の類。（和名抄）

おびえ（名）　おびゆる事。

おびゆ（自動下二段）　勢を見て驚く。●恐怖する。○源氏「人々おびねさわぎて」

おびしばり　腦（名）　人體の腰骨と肋骨との間の處。●帶を締むるあたり。（和名抄）

おびひき　帶引（名）　遊戯の名。綱引の類。

なひも　雄紐（名）　入紐の差し入れて輪に通す方を云ふ。即ちボタンの如き處。……輪の方を雌紐と云ふに對して。

おびもの　佩物（名）　玉佩（ぎよくはい）に同じ。

おも　面（名）　〔一〕顏に同じ。面部。●おもて。〔二〕物事の表面。

おも（名）　〔一〕母。〔二〕乳母。……（萬葉）

おも　主（名）　〔一〕主たる物事。●要點。△（形）—おもなる。（又）—おもの。（副）—おもに。〔二〕狂言の仕手役。（してやく）

おもひ　思（名）　〔一〕思ふ事。●思想。●考へ。●所存。〔二〕物思ひ。●心配。●悲しみ。●戀慕。●恨み。●怨念。

おもひ　思（名）　忌服。●喪。●喪中。○古今「思ひに侍りける秋の頃」

おもひいる　思入（自動四段）　深く思ふ。●思ひに沈む。●考へ込む。

おもひいたり（名）　察し。（源氏）

おもひいだす　思出（他動四段）　其事の心に浮ぶ。●考へ出だす。●想ひ起す。

おもひいづ　思出（他動下二段）　おもひいだすに同じ。

おもひば　思羽（名）　鶯驚の雄にある美しき羽。●劒羽（つるぎば）。

おもひはかる　思量（他動四段）　思慮する。●おもんば

かる。

おもひはらから　（名）　相愛する兄弟。●中よき兄弟。

（空穂）

おもひどる　思取（他動四段）　心の中に悟る。●合點する。●會得する。

おもひおく　思置（他動四段）　思ひを殘し置く。

おもひおこす　（他動四段）　〔一〕（想起）過去の事を思ひ出す。〔二〕（思起）心を振りおこす。●奮發する。

おもひおもひに　（副）　各自思ひの儘に。

おもひおもひの　（形）　各自思ひの儘の。

おもひわたる　思渡（自動四段）　思ひつゝ月日を過す。

おもひわづらふ　思煩（自動四段）　心を惱まして考ふる。○萬葉「おもひわづらひ音のみし泣かゆ」

おもひわぶ　（自動上二段）　つらく思ふ。●心中にて困る。○源氏「若き妻子の思びわびぬべきにより」

おもひかぬ　思兼（自動下二段）　思ひに堪へ兼ぬる。

おもひかね　思兼（副）　思に堪へ兼ねて。●思ひあまり。○拾遺「おもひかねて妹がりゆけば冬の夜の川風寒み千鳥なくなり」

おもひかはす　（自動四段）　互に思ひ合ふ。●相慕ふ。

おもひかね　思兼（名）　神の名。又八意思兼神をいふ。天岩戸ごもりの時天照大神を招き出だし奉るの策を建てたる神にて思慮千萬人を兼ねたりといふ故の名。

おもひがけなし　（形。形狀言ク活）　思ひよらず。●案外なる。●意外なる。

おもひがけず　（副）　思はず。●意外に。●案外に。

おもひかへす　思返（他動四段）　〔一〕思ひて又思ふ。●再思する。●熟考する。〔二〕本善の性に還る。●改心する。

おもひかまふ　思構（他動下二段）　心中に計畫する。●豫想する。

おもひよる　思寄（他動四段）　心付く。●思ひ當る。

おもひたち　思立（名）　思ひ立つ事。●企。

おもひたつ　思立（自動四段）　思ひ初むる。●思ひを起す。

おもひだす　思出（他動四段）　おもひいだすに同じ。（俗）

おもいれ　思入（名）　芝居の役者などが心中に思案のあるらしき樣子をする事。○「此處暫くおもい

れ」

おもいれ 思入(副) 存分に。●思ふ儘に。(俗)

おもひィづづく 思續(他動四段) あれからこれへと色々に切目なく物を思ふ。

おもひィつらぬ 思連(他動四段) あれやこれやと色々ならべて思ふ。○古今「うき事をおもひつらねて厂がれの鳴きこそわたれ秋の夜なく」

おもひィつく 思付(他動四段) 考案を立つる。●氣が付く。●考へ付く。●思ひ出す。

おもひィつき 思付(名) 思ひつく事。●工夫。●考案。●趣向。

おもひィね 思寢(名) 其事を心に懸げて眠る事。○「思寢の床」「思寢の枕」「思寢の夢」

おもひィなる 思成(自動四段) 思ひて遂に其心になる。○源氏「なからふまじくこそ思ひなりぬれ」

おもひィなほ゛す 思直(他動四段) 〔一〕尙又思ふ。●熟慮する。●再考する。●〔二〕改心する。

おもひィなし (名) 我知りたる事故自然氣のせいで左樣に思はるゝをいふ。……たとへば「思ひなしにや顏のよく似たる」といへば。我既に太郎と二郎と兄弟なる事を知り居るが故に。己が氣にて左樣におもはるゝならんの意なり。○月詣集「神無月おもひなしにや住吉の松ふく風もけさはさびしき」

おもひィなす (他動四段) 考を其方に向くる。●心中にて假定する。●我知りたる事故自然氣のせいで左樣に思はるゝ。……おもひなしか參考せよ。○源氏「女は左こそ忘れ給ふをうれしきにおもひなせど」

おもひィのいろ 思の色(名) 「おもひ」のひを緋に言ひかけたる詞にて即ち緋の色なり。○古今「耳なしの山の梔なしてしがなおもひのいろの下染にせん」

おもひィのいへ 思の家(名) 思ひのひを火に言ひ掛けて云ふ。火の家の意。=火宅に同じ。○近衛院千首「我心三つの車にかけつるはおもひの家をうしとなりけり」

おもひィのほか 思外(名) 思ふに違ふ事。●案外。●存外。●豫想外。

おもひィのたま 念珠(名) 念珠の直譯。數珠。○謠曲「おもひのたまの數々に。御法をなして稱名の。聲うちそふる後夜の鐘」

おもひィのつゆ
おもひィのこす
思の露(名)　涙のこと。(歌詞)
思殘(自動四段)　跡に心を殘す。●思ひを留むる。

おもひィぐまなし
(形。形狀言ク活)　〔一〕思ひやりのなき。○散本「世の中はおもひぐまなきものなれや賴む身をしも厭ふと思へば」〔二〕思ひがひのなき。○千載「おもひぐまなくても年の經ぬるかな物いひかはせ秋の夜の月」

おもひィぐさ
思草(名)　〔一〕草の名。實物は詳ならず。○新古「訪へかしな尾花がもとの思草しをるゝ野邊の露はいかにと」〔二〕思の種。●思ひ出す材料。○謠曲「之を見るたびに。いやましの思草」

おもひィやり
思遣(名)　思ひ遣る事。●察し。

おもひィやる
思遣(他動四段)　〔一〕身に引き較べて推量する。同情を表する。●推量する。●想像する。〔二〕憂の思ひを遣る。●氣を晴らす。

おもひィまはす
思廻(他動四段)　よく〳〵考ふる。●思ひ廻らす。●熟考する。●沈思する。

おもひィご
思子(名)　愛兒。

おもひィこむ
おもひィで
思込(自動四段)　決心する。●深く思ふ。
思出(名)　思ひ出す事。●思ひ出す材料。●紀念。

おもひィあはッす
思合(他動下二段)　他の例と比較して考ふる。●過去の事と思ひくらぶる。

おもひィあがる
思上(自動四段)　見識高く持つ。●自任する。○源氏「はじめより我はと思ひ上り給へる御方々」

おもひィあかす
思明(他動四段)　物を思ひて夜を明かす。

おもひィあたる
思當(自動四段)　思ひて其事に當る。●考へ出だす。●思ひ合はする。

おもひィあまる
思餘(自動四段)　己の分別に及ばぬ程である。

おもひィきり
思切(名)　思ひ切る事。●斷念。

おもひィきる
思切(他動四段)　〔一〕其事を思ふの念を去る。●あきらむる。●斷念する。〔二〕決心する。

おもひィきって
思切(副)　志を定めて。●奮發して。

おもひィきや
(副)　思ふたか。否。思ひはせなんだの意。◎思ばざりき。●豈圖らんや。●何ぞ知らん。○新古今「年たけて又越ゆべしと思ひ

きや命なりけり小夜の中山」

おもひみだる 思亂(自動下二段) 思ひて心の亂るゝ。

おもひびと 思人(名) 愛する女。●意中の人。●戀人。

おもひまうく 思設(他動下二段) 心構へする。●心に期する。●豫期する。

おもひもの 思者(名) 氣に入りの妾。●愛妾。

おもはゆし (形。形狀言ク活) 面目なき。●耻かし。●赤面の至。

おもに 重荷(名) 〔一〕目方の重き荷物。〔二〕重き任務。●重大なる責任。

おもにくし 面憎(形。形狀言ク活) つらにくし。

おもほでる 面火照(名) 怒りて顏の赤くなる。●眞赤に怒る。●憤る。(記)

おもほゆ 思(自動下二段) 思はるゝ。

おもほす 思(他動四段) 思召す。

おもべり (名) 顏付。●顏色。(續紀宣命)

おもと 萬年青(名) 草の名。葉は濃綠色にて廣く厚く赤色の丸き實なるもの。盆栽として賞せらる。

おもと 御許(名) 〔一〕女の尊稱。母にも姉にも娘にも他人にも云ふ。〔二〕おもとびとの略。……(雅)

おもと 御許(代) あなた。●御身。●其許。……多く女に用ふ。子より母に對しても云ふ。

おもとじ (名) 母刀自に同じ。(古)

おもとびと 御許人(名) 〔一〕君の身近く仕ふる人。近侍。●近臣。●侍臣。〔二〕特には侍從の官人を云ふ。〔三〕御側の女官。●奥女中。

おもとびとまちぎみ (名) 侍從(じたうゆう)に同じ。(和名抄)

おもちゃ 御弄び物の意。◎小兒の弄ふもの。●玩弄物。●手遊。

おもり 錘(名) 物に重みをつくる爲に用ふる道具。○「網の錘」「釣絲の錘」「秤の錘」

おもりか 重々しき有樣。(形)—おもりかなる。(副)—おもりかに。

おもる 重(自動四段) 重くなる。

おもおもし 重々し(形。形狀言シク活) 威嚴ある。●鄭重なる。●沈着なる。

おもわ 面輪(名) 面(おもて)。●顏。○萬葉「望月の足れるおもわに。花のごと笑みて立てれば」

おもはく (名) 思ふ所。●所存。●考案。●趣向。

おもはし 思(形。形狀言シク活) 物思はるゝ。●心配に

なる。●あらまほしと思はるゝ。●望まるる。

おもはッせぶり（名）　人をして奥床しく思はするやうな所爲をする事。（俗）

おもわする　面忘（他動下二段）　顔を忘るゝ。●見忘るゝ。○萬葉「遂にや子等がおもわすれなむ」

おもわすれ　面忘（名）　面忘るゝ事。●見忘るゝ事。○謠曲「見しにもあらぬ面忘れ」

おもがい　轡（名）　馬の具の名。馬の首に懸くる組緒。●おしかけ。

おもかぢ　重舵（名）　船人の詞。舵を右に轉ずる時の舵の取り方。

おもがはり　面變（名）　顔付の變る事。

おもがた　面形（名）　顔の形。●顔付。●面影。（萬葉）

おもがつ　面勝（自動四段）　人に對して臆せぬをいふ。（記）

おもがくし　面隱（名）　〔一〕顔を背けて隱す事。……恥かしき時などにする所爲。○萬葉「あひみればおもがくしするものからに繼ぎて見まくのほしき君かも」〔二〕物を蓋ひて顔を隱す事。○源氏「御文をおもがくしに廣げたり」

おもがくす　面隱（自動四段）　おもがくす事。（源氏）

おもかげ　面影。俤（名）　別れて後に見ゆる心地する其人の顔姿。●有るが如く目にちらつきて見ゆる客貌または景色。○「人の面影」「妹の面影」「夢の面影」「去年の面影」「春の面影」

おもかげぐさ　面影草（名）　山吹の異名。

おもやョう　面樣（名）　顔立。●面差。●容貌。

おもだか　澤瀉（名）　〔一〕水草の名。葉も根も慈姑（くわゐ）に似て小さし。秋の頃白き花咲くもの。〔二〕紋の名。〔圖〕〔三〕茨菰。古代筐の名。

おもだかおどし　澤瀉縅（名）　鎧の縅の一種。種々の色の糸にて上狹く下廣く澤瀉の葉の形に縅したるもの。其形は又御幣のやうにも見ゆ。（保元）

おもだたし　面立（形。形狀言シク活）　面目ある。●名譽なる。○枕「祭の使などに出でたるもおもだたしからずや」

おもだつ
おもたし 重立(自動四段) 物事の主となる。●頭立つ。重(形。形狀言ク活) おもしに同じ。……但し是は物の量のみに云ふ。

おもづら 面頰(名) 武具の名。‖めんぼゝに同じ。〈圖〉

おもづら 面連(名) 馬具の名。‖おもがいに同じ。

おもねる 阿佞(自動四段) 人に對し求めて氣に入られんと搆ふる。●媚ぶる。●諛ふ。●追從する。

おもなる
おもなし 面馴(自動下二段) 顏を見馴るゝ。(雅)
面無(形。形狀言ク活) 面目なし。●恥かし。(雅)

おもらかに (副) 重々しく。

おもむろに 徐(副) そろ〳〵。●しつかに。●徐々に。

おもんばかる 慮(名) 思ひ量る事。
慮(他動四段) 思ひ量るの音便。●思慮を運らす。

おもむく 趣(他動下二段) 趣かしむる。

おもむく 赴。趣(自動四段) 面向くの意。◎其方に向ふ。●行く。●至る。

おもむき 趣(名) 〔一〕事情。●意味。●趣意。〔二〕物事の面白み。●趣味。●雅致。●風韻。●雅味。
惟(他動上一段) 思ひ見るの音便。●考へ見る。○「夫れつら〳〵おもんみるに」

おもんみる

おもんず 重(他動サ變) 重しとする。●貴ぶ。●尊重する。

おもふ 思(他動四段) すべて心を働らかすをいふ。●思慮する。●憂ふる。●戀慕する。●嘆く。●怨む。●推量する。●想像する。●思ひ出す。

おもふどち (名) 相思ふ友。●親友。○土佐「立てば立ち居れば又ねる吹く風と波とにおもふどちにやあるらん」
(副) 相思ふ友同士。●中のよい人々にて。○古今「おもふどち春の山邊にうちむれてそこともいはぬたびねしてしが」

おもふ
おもふ (副) 思ひながら。●思ひつゝ。

おもの 御物(名) 〔一〕貴人の食品。●供御。〔二〕食物。○宇治「白米十石をおものにして」

おもの (名) 玉。佩。

おものだな 御物棚(名) 禁中にて膳部を載する棚。

おものやどり 御物宿(名) 禁中にて御膳立などする所。

おもや 母屋(名) 〔一〕家の中の主なる部分。＝母屋に同じ。〔二〕構中(かまへうち)の尤も主なる建物。長屋でなきところ。

おもやかに (副) おもらかにに同じ。

おもやく 重役(名) 重き役目。●重き役人。

おもぶせ 面伏(名) おもてぶせに同じ。

おもて 面(名) 〔一〕顔。●おも。●つら。〔二〕木などにて面の形に作り舞樂、能、神樂など舞ふ人の顔におつるもの。●めん。〔三〕(表) 表面●外面●外部〔四〕向。●方●地方。○「南おもて」「江戸おもて」〔五〕武家にて奥向ならぬ方」。

おもで 重手(名) 重き手傷。●重傷。●深手。

おもておこし 面起(名) 面目ある事。

おもてがた 面形(名) 舞樂。能樂などに用ふるめん。

おもてがへ 表替(名) 疊表を取替ふる事。●疊替。

おもてうた 表歌(名) 面目を得べき傑作の和歌。●自讃歌。(長明無名抄)

おもてぐち 表口(名) 家の表の方の出入口。

おもてぶせ 面伏(名) 面目なき事。●恥辱。

おもてざた 表沙汰(名) 公沙汰(おほやけざた)に同じ。●公事訴訟。

おもてもん 表門(名) 家の表の方の門。●正門。

おもざし 面差(名) 顔附。●顔立。

おもざらひィ 面嫌(名) 幼兒の知らぬ人を見て泣く事。●人見知り。○夫木「世の中はいわけなき子のおもざらひ見知りなきには音こそ泣かるれ」

おもゆ 重湯(名) 飯を煮出したる汁。重病人などの食するもの。

おもみ 重み(名) 重き分量。●重さ。●重々しき樣體。

おもし 重(名) 物事の上より押さへて下を鎮むるもの●おさへ。●おし。

おもし 重(形)形狀言ク活) 物事の輕からぬ。●物事の些細ならぬ。●重大なる。

おもしろし 面白(形)形狀言ク活) 興味のある。●愉快なる。●笑ふ可き。●樂しむべき。

おもしる 面知(自動四段) 顔を見知る。○萬葉「おもしる君が見ねぬ頃かな」

おもち 面持(名) 顔付。●顔色。●顔づかひ。○源氏「同じ舞の足蹈おもゝち世に見ねぬさま

なり」

おせち 御節(名) 正月三箇日および五節句の日の儀式の膳部。

をせなか (名) 源氏末摘花の巻に「先づ居丈の高う。をせなかに見ゆ給ふ」とありて解釋に敷説ある詞なり。〔其一〕小脊長の意にて脊の長きを云ふ。〔其二〕男脊中の意にて男の脊に似ふつゝかに長きを云ふ。〔其三〕脊のたわみまがれるを云ふ。

をせぐむ (自動四段) 小脊屈むの意にて脊中の屈み曲りたるを云ふにや。雅言集覽にはをせなかと同じ意ならんかと云へり。○宇治「丈高くをせぐみたるもの赤髭にて五十ばかりなる」

おせぐくに (詞) 押されて平たくなりたる有樣。(宇治「鮨鮎のおせぐくに廣らかなるが」

をすなす 小簾(名) 小さき簾。※こす。(歌詞)

をすなす 雄牡(名) 男性の鳥、獸、虫、魚。※をに同じ。

をす 食(他動四段) 〔一〕食ふ。※食する。○萬葉「うつせみの命を惜しみ波にぬれいらごが島の玉藻刈りをす」〔二〕知しめす。※統御し給ふ。○萬葉「やすみしし我大君の。聞しをす天の下に」

おす 〔一〕力を出だして前または下へ押さへつくる。〔二〕押して跡を附くる。○「判を押す」「形を押す」〔三〕既に知りたる事によりて知らぬ事を思ひ量る。※推理する。〔四〕押しのくる。※壓倒する。〔五〕強ひてする。※耐へ忍ふ。

おすひィ 襲(名) 上古婦女の外出する時衣の上に頭より被りて裾の邊にて結びたるもの。後世の被衣の類。○萬葉「手弱女のおすひ取り懸け」

おすわりをすくに (名) お供へに同じ。正月の餅飾。

おすまし 食國(名) 天皇の統御し給ふ國。○續紀宣命「食國の政」

おすゑ (形ク形狀言ク活) おすしに同じ。○源氏「此めのとこそおすましけれ」

おすし 御末(名) 德川時代大奥の女中に使はれたる下女。※又下女。

おすび (形。形狀言ク活) 氣味わるし。○恐ろし。※強し。(源氏)

(名) 磯邊の轉。○萬葉東歌「眞間のおすびに

波もこごろに」